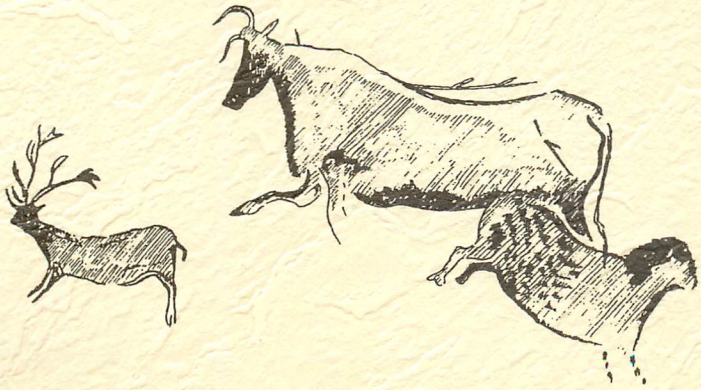
野辺山シンポジウム　2000

人類の適応行動と認知構造

八ケ岳旧石器研究グループ



開催にあたって

21世紀が目の前まできています。新しい世紀の考古学は、いったいどのような展開をみせるのでしょうか。その可能性を模索するため、今世紀最後の年となった秋に「人類の適応行動と認知構造」というテーマで、旧石器時代を主としたシンポジウムを開催することになりました。

400万年有余の歴史の中で、人類は変わりゆく環境に対しどのような適応行動をとってきたのでしょうか。また、20世紀の科学が切り崩せなかった大きなテーマのひとつが人の心だといわれていますが、適応理論だけでは解決のつかない人類の心の問題は、どのように考古学的に解明されてゆくのでしょうか。適応と認知は相反する概念にもみえますが、いずれもヒトのなかで共存していることはこの問題が不可分であることを教えてくれます。

本シンポジウムは、この2000年に八ケ岳旧石器研究グループが結成10周年を迎えたことを記念して企画いたしました。幸い、最前線で研究を進められている方々にご発表いただくことができました。発表者の皆様はもとより、この問題に関心をもって野辺山にお集まりいただいた参加者の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

本シンポジウムが新たな考古学的展望を開くきっかけとなってくれれば幸いです。

2000年10月14日

八ケ岳旧石器研究グループ
代　表　堤　　隆

野辺山シンポジウム　2000

人類の適応行動と認知構造

2000年　10月13・14・15日

（於：八ケ岳　野辺山高原）

■八ケ岳　ストーン　ワークショップ　— オープニング・イベント —

10月13日（金）　PM１：00～PM５：00

講師：大沼克彦さん（国士舘大学イラク古代文化研究所）

■シンポジウム

目　　次

10月14日（土）PM１：00～PM５：00

人類進化と適応行動 ……佐藤宏之…１
石材資源の利用行動　— 歩く人類の適応行動 —　……野口　淳…14
環境と人類　— 相互作用論と適応の構造 —　……小野　昭…25
寒冷環境への適応 ……加藤博文…28
シェーン・オペラトワールと技術組織 ……西秋良宏…35

10月15日（日）AM９：00～PM１：00

適応・進化・認知　— 認知考古学の役割 —　……松本直子…37
石器研究と認知考古学 ……桜井準也…50
石器製作技術と音声言語　— ルヴァロワ剥離方式における実験研究 —　……大沼克彦…70
景観と象徴 ……安斎正人…78
スタイルとエスニシティー ……田村　隆…87

（表紙の絵は、ジョンワイマー著：河合信和訳『世界旧石器時代概説』雄山閣より引用させていただきました）

人類進化と適応行動

東　京　大　学
佐藤　宏之

1　人類進化学説のパラダイム・シフト

近年の人類進化の図式は、進化生態学（行動生態学）の理論的進展[1]に基づき、R. ブレイスの猿人→原人→旧人→新人の一系統進化説に代表される段階的進化観から、環境系への適応放散に基づく異種人類の同時併存へとシフトした。これが意味するもっとも重要なパラダイム・シフトは、一言で言うならば、生物としての人の研究と文化科学の対象としての人の研究の統合であった。今世紀初頭における遺伝人類学を中心としたダーウィン進化論の再構成は、ドブジャンスキー、メイヤー、シンプソン等によって現代進化理論の総合説に発展させられ、生物進化の進化機構を明示したことでダーウィニズムの最終的な勝利を宣言したわけであるが、モルガン、スペンサー等の社会ダーウイニズムの影響もあってか、文化科学の思潮の上では文化進化の原理にはあいかわらずラマルキズムが採用されつづけ、その結果生物と人との対立的理解がそのまま進行してきた（佐藤 1999a）。

確かに、遺伝人類学が明らかにした進化機構は、ピアンカによれば生物を自己複製する分子複合体と定義されるため、遺伝子浮動の中立的な突然変異の蓄積により個体変異をもつ集団の中で、自然選択の結果最も繁殖可能性（自己複製率）の高い個体が生き残る確率が高いという考えに到達している（ピアンカ 1980）。厳密なダーウィニズムにおいては、進化の単位は個体であるから、進化は遺伝子の遺伝確率にほかならないと考えられたのである[2]。しかしながら、1970 年代以降になると、まずウィルソン等によって創始された社会生物学が発展し、社会性昆虫の進化の説明に端を発する生物の利他行動の進化を遺伝学的に説明した（血縁淘汰説）（ウィルソン 1983－84）。これはやがて、動物行動学と結合し、繁殖行動だけではなく一般的な行動やそれを選択した意志決定およびその意志決定にいたる環境認識能力も自然選択に影響するのだから、進化の単位は個体だけではなく集団行動も含まれるとする行動生態学に発展する。また、同時期古生物学からはグールドやエルドリッジによって、進化の歴史は一時期の種の大量絶滅と新種群への交代という激変期と、対照的な種が存続している期間の安定期からなり、それは大規模なニッチの構造的変化に対する激しい種間競争に基づくとする新しい進化理論（断続平衡説）が提出され（エルドリッジ 1992）、ともに進化理論に対してきわめて大きな影響を与えた。

特に、従来人間行動に特有と考えられながら個体を単位とした自然選択というダーウィニズムの考え方では説明が困難とされてきた利他行動（協力関係）の進化が、少なくとも血縁関係の範囲では遺伝学的に説明可能とした社会生物学の影響は大きく、やがてゲーム理論の応用により非血縁の集団内においても、利他行動が集団の戦略的意味を有することを明らかにしつつある。「お返し戦略」等に代表される高い戦略的意味を有する個体間の協力行動（利他行動）は、集団間親争の進化的淘汰を説明可能としており、人間社会に特有

とされてきた集団の分配行動や社会関係の進化を展望する可能性が現在議論されている（リドレー2000 他）。集団内における協力行動や社会的関係の維持は、集団間競争を勝ち抜くための進化的意味を有するため、群れ社会においても、個体の利益によく合致することになる。人間は、社会関係を最高度に発達させることによって最終的な個体の利益を最大にするという適応戦略を最も巧妙に発達させた生物と理解できる。

このような新しい進化理論は、生物の社会や集団行動の意味を進化論に統合して理解することを可能にしたので、人間の社会・文化を扱う人文社会科学分野にも急速に受け入れられるようになった（ブロイアー1988）。その結果現在では、人類進化の研究は、生物適応と文化適応の両側面から統合的・総合的に分析する必要性が急速に増してきている。

例えば、近年注目を集めている進化心理学は、意識や知性、認知能力の発達を、400 万年以上に及ぶ人類史を通じて先史狩猟採集民の間で行われてきた複雑な人間関係の社会的な処理機構の生成に起因する進化的産物と見なしている（例えば佐倉 1997）。つまり、人の文化適応も、進化の所産である脳の発達を通じて行われてきたと解釈しているのだ。従って、今日の社会的な環境問題の多くは、本来の人間の社会生活環境とは異なる 1 万年前[3] 以降の定住社会がもたらした、認知構造と人口環境の不調和に起因する構造的課題なのである。現代人の脳の基本構造は、進化的には現代社会に適応しきれていないと言えるだろう[4]（佐藤 1999a）。

2 「直立二足歩行するサル」 －猿人－

人類進化史から俯瞰した場合に必ず挙げねばならない構造変動と言えるのは、第一に 500－470 万年前頃と推定されている初期人類の出現、第二に約 4 万年前の現代人による社会・文化・生活構造の革命的変化、そして第三に約 1 万年前の定住社会の出現とそれに続く文明と国家の出現であろう。

遺伝人類学者宝来聡は、ミトコンドリア DNA 分析によって、人がチンパンジーとの共通祖先から分岐した年代（遺伝距離）は 490 万年前と推定しており、一方 1992 年にエチオピアで発見されたラミダス猿人のアルゴン・アルゴン年代測定値は 440 万年前とされる。このように最近の遺伝人類学や形質人類学上の証拠からは、人類の起源は 500 万年前頃と絞り込まれてきたが、最近の人類進化の系統に関する理解では、17 種以上の人類種が地球上に存在してきたとされている（河合 1999；諏訪 1999）（図 1）。ヒトの生物学的定義が直立二足歩行にあるため、人類の出現は、換言すれば直立二足歩行という運動様式の起源にほかならない。従って現在有力な人類出現に関するシナリオでは、比較的安定した環境下の熱帯アフリカの湿潤な森林環境に適応するため懸垂型の運動様式を獲得していた中新世類人猿の中から、その後地球規模で気候変動が激化し乾燥気候と季節変動の増幅の結果新しく形成された環境である東アフリカ大地溝帯地域のサバンナと疎林帯に適応するために、直立二足歩行という新たな運動様式を獲得した新種が誕生し、それがヒトとなったと説明されている。

このサバンナ仮説で説明される初期人類の適応放散は、疎林や森林の林縁とサバンナという新たに形成されたモザイク的環境下で、主に植物質食糧に依存する採食戦略を維持するために直立二足歩行という新しい運動様式を獲得したことになるが、ラミダス猿人からアファール猿人を経て 300 万年前のアウストラロピテクスも同様な適応放散を行っていた

と考えられる。アウストラロピテクスは、華奢型のアフリカヌス猿人と頑丈型のロブストス猿人に二分して理解するのが一般的であるが、巨大な顎の筋肉を支える矢状隆起を備えたロブストス猿人[5]は、果実・堅果類食に特殊化した人類と考えられ、100万年前まで残った。こうした意味で、猿人は、まさに「直立二足歩行するサル」という表現にふさわしい。

3　ヒト化への身体的適応の開始　－原人－

250万年前の最古のホモ属であるホモ・ハビリスの登場と共に石器の使用が開始されたというリーキーの説が今のところの公式的な理解である[6]。ホモ属は、華奢型のアフリカヌス猿人から、290－250万年前のどこかで系統分岐したと考えられており、頑丈型ロブストス猿人はホモ属と併存していたことになる。

(1) 大脳の巨大化

しかしながら、ホモ属の登場と共に起きた最も重要な変化は、大脳の巨大化の開始であろう（図2)。脳はきわめて高カロリーを必要とする器官であり、全代謝エネルギーの20%を消費する。大脳の巨大化は人類の特徴であるが、そのためにはそれまで主として依存してきた植物質食糧ではまかなうことが困難であるため、臨機的に行われてきた小動物狩猟等の肉食（または髄食）を増大させるような淘汰圧が働いたと考えられる。もっとも、直ちに動物狩猟の比率を増大させるには、狩猟戦略の構造的変化を必要とするため、初期に行われた適応行動はスカベンジング（屍肉あさり）と髄食を主体とし、後に狩猟の比率が徐々に増加していったと考えられる。いずれにせよ、肉食動物と競合するスカベンジングや狩猟の恒常化のためには、個体を単位としてきた植物質食糧の獲得戦略とは異なり、個体間を組織し統制する組織的な対処法を発達させねばならなかったと考えられる。狩猟やスカベンジング等の動物質資源の獲得戦略を発達させるためには、個体間にコミュニケーション・システムを発達させ、対象獣の行動生態や周囲の環境等の情報と個体間の社会的情報を、これまでとは比較にならないほどの規模で処理する必要性を生み出し、それが大脳の巨大化をさらに促進したと考えられている[7]。

(2) ネオテニー

一方大脳の巨大化は、要求（淘汰圧）があれば自由に達成可能というわけにはいかない。生物としての身体構造の枠の中で達成せねばならない変化なのである。元々哺乳類の出産形態には、一度に数匹の未熟な子を産み巣の中で育てるネコのような晩成性と、十分に成熟した子を一匹だけ産むウシやウマのよう早成性の二種類があるが、遺伝学上最も人間に近似するチンパンジーのような類人猿の例から推定して、ヒトは本来早成性であったと考えられている。しかしながら、大脳の巨大化を達成するために人類が選択した方法は、十分成熟しないうちに子を産み幼児期や年少期を延長させること（ネオテニー）によって大脳の巨大化を担保する方法であった。早成性を確保しながら頭の大きい子を産むために必要なヒトの妊娠期間は本来21ケ月と計算されるが、それでは頭が大きく成りすぎて、産道を通過することができない。産道を広げる方向に進化するためには腰幅が広くなることが必要だが、それは効率的な二足歩行が要求する腰幅の狭さという淘汰圧と正面から対決

することになるため、ヒトはこの両者に適合すべく、子宮内で9ケ月育てた胎児を出産し、そののち本来胎児段階にある 12 ケ月は、親が子を保育する戦略を採用した。うまれて 1 年間の乳児が、感覚器官は機能しているが歩行できず、動作の調節機能も不能に近く、親の保育がなければ直ちに死に至るのはこのためである。

(3) ホームベース論

ネオテニーによって大脳の巨大化と効率的直立二足歩行を確保した人類は、そのために長期にわたる子の保育・養育と肉食の確保を両立させねばならないというきわめて重い代償を背負うことになった。こうした問題群に対処すべく人類が採用した戦略として現在有力と考えられる仮説は、G. アイザックが主唱したホームベース論である（Issac1989)。アイザックは、二次的晩成性新生児の保育コスト削減戦略として、女親がホームベース（食物等の資源を持ち帰り分配又は消費する場所）にいて子を扶養し、男親が食物（特に高カロリーの肉や髄）を外部で獲得しホームベースに持ち帰るという行動戦略を考えた（図 3)。さらに、もしもこうした行動戦略が採用されていたとしたら、遺跡として考古学的に検証可能なはずであるから、行動モデルの構築とそれに基づく遺跡の解釈を積極的に押し進めた。アイザックが当初男親の資源獲得戦略の主要部を狩猟と考えたため、この仮説は人類進化の狩猟者仮説と呼ばれたが、ビンフォード等の遺跡形成論的批判（Binford1985；1988 等）等により、次第に初期人類における狩猟の役割は低下した[8]。しかしながら、スカベンジングの比率を増大させたとしても、この仮説の枠組みは有効であったため、Central Place Foraging 論として再構築されている。

ホームベース戦略の利点は、第一に、単独個体では消費しきれない資源の分配を可能とし、採食行動が分化していればより多様な資源を効率的に利用可能な点にある。第二に、ホームベースでの消費によって、その場で消費することにより肉食獣等の捕食者に襲われる危険を少しでも回避することができる。第三に、性別分業の存在は、増大する育児コストの回避戦略として有効である。ホームベース戦略の恒常的・普遍的採用は人類に特有な行動戦略であり、その後の人類社会の構造そのものの進化を規定したと考えられる（木村 1998）[9]。問題はいつから本格的に開始されたかということにある。

(4) 石器の使用と身体適応

ホームベース論の枠組で考えた場合最古の石器使用行動の意味は、肉食と関連づけて考えることができる。現生霊長類で観察されるように、本来植物質食糧の採食には石器のような cutting tool は必要とされないが、たとえ屍肉であったとしても、ホームベースに運び分配・消費するためには、通常肉を骨から切断する必要がある。敲石のような自然石の使用行動は、熱帯西アフリカのボッソウやタイのチンパンジーでも観察されている（山越 1999）ので、髄を叩き割るための敲石等はすでに持っていたものと推定されるが、cutting tool としての剥片石器は、ホームベースの本格的な利用に伴い出現したと考えられる。

考古学的に最古の石器インダストリーであるオルドワン（25O－120 万年前）は、アフリカの大地溝帯周辺に分布しホモ・ハビリスやホモ・ハイデルベルゲンシス等の原人が荷担者とされているが、長い間礫器インダストリーと理解されてきた。しかしながら、上記仮説の進展に伴い剥片インダストリーとしての性格も再評価されるようになり、現在では

剥片は肉食用又は木器製作用の cutting tool と考えられ、礫器は石核であるとともに骨髄破砕用の道具でもあると見なされている（Toth1985）。100 万年以上にわたって継続したオルドワンは、形態進化はそれほど明確ではなく、むしろ行動上の進化的側面が顕著に観察される。おおむね 180 万年前の鮮新世から更新世への過渡期を境として、遺跡数・石器数の増加、分布範囲の拡大、二次加工の出現、10－20km 程度離れた数種の石材の同時利用、石器と獣骨の共伴例の増加といった変化が現れており（図 4）、ホモ・エレクトス[10]の出現と一致するものと理解される（木村 1998）。1984 年ケニアのトゥルカナ湖畔で発見された“オリオコトメ・ボーイ”（150 万年前）は、全身骨格がほぼ回収された唯一のホモ・エレクトスとして、同様に全身骨格がほぼ回収された唯一のアウストラロピテクスである“ルーシー”（300 万年前）とともに著名である（ウォーカー・シップマン 2000）。アウストロラピテクスからホモ・エレクトスにかけての身体的変化は、この 2 例によって語られるのが普通である。オリオコトメ・ボーイの骨格からは、彼がすでにほっそりした身体構造を持ち熱帯適応（アレンの法則：長身、体毛消失、肌の黒化等）を果たしており、また直立二足歩行の能力は現代人並であることが知られている。従って、ネオテニーはすでに相当に進んだ状態にある[11]。このように驚くほど発達した身体適応と比較して、椎孔（脊椎を通る神経束の通り道）が現代人のほぼ半分しかないこと等から、手先はそれほど器用ではなく言葉が話せたとは考えられないと報告されているように、社会・文化的適応能力はいまだかなり限定されたレベルに留まっていたと考えられる。議論の余地は大きいが、石器等の道具に文化的特徴が付与され地域的差異と一定の時間的発展が観察されるようになる後期旧石器時代までは、人類の社会・文化的適応はかなり限定されていた可能性が高い。

（5）第一次アウトオブアフリカ

こうした形態進化がほとんど認められない石器インダストリーであるオルドワンが継続していたが、140 万年前になると突然両面体石器に特徴を有するアシューリアンが登場する。アフリカに登場したアシューリアンは、これまで東アフリカの大地溝帯地域にほぼ限られていた遺跡分布を急速に広げ、アフリカを脱して旧大陸の西半分に分布を広げた。この時期については、従来 100 万年前と推定されていたが、イスラエルのウベイディヤ遺跡の年代をより古く 140 万年前と考える説が提出されたり、カフカスのドマネシ遺跡の年代が 160 万年前とされ、また最近の中国・泥河湾遺跡群中の東谷　遺跡・小長梁遺跡等の年代が 100－190 万年前と報告されている例等から、より古く考える説が有力となっている（図 5）。

人類がアフリカから脱し旧大陸中へ分布を拡大した要因としては、生態学的な説明が可能である。バイオマスは、一次生産者とより上位の消費者（一次→二次・・・消費者）からなる連鎖構造として説明されるが、その場合より上位段階に向かうにつれて直下位のエネルギーの 10％しか利用することができないため、上位に行くほど個体数の削減か分布域の拡大によってバイオマスを調節しなければならない（「エルトンのピラミッド」）。肉食依存を増していたエレクトスの選択した戦略は、後者であった可能性が高い。なぜなら植物食依存戦略は、植生が気候・環境によって固定されているため急速な分布域の拡大は不可能であるが、動物質食糧依存戦略が重視されればされるほど一義的な環境要因による分布

域の限定を避けることが可能となるからである。例えば森林棲動物であろうと草原棲動物であろうと、植物食であることは共通する。

さらに肉食戦略の長所には、採食時間の短縮がある。体重 32kg（アウスラロピテクス程度）の草食動物に必要な採食時間は平均一日 6 時間程度であるが、同規模の肉食動物の場合には 2 時間と計算される。一日あたり 4 時間が節約され、この時間を社会的行動に費やすことが可能となる。このことは、ホームベース戦略を採用し社会的協調という適応行動を進化させ、そのための膨大な情報処理を行う大脳の巨大化を進展させてきた人類には、非常に有利に働いたに違いない。従って、生態学的説明によれば、150 万年前のオリオコトメ・ボーイがすでに現代人並の身体適応を果たしていたことから、アフリカ地溝帯外への分布の拡大は、200 万年前でも説明可能となる。

4　寒冷への身体適応　－ネアンデルタール－

（1）ホモ・エレクトスの適応

ホモ・エレクトスによって人類の分布は、世界の陸上面積の 3％から 25％へと拡大した（赤沢 2000）。身体能力の上ではすでに現代人並の直立二足歩行を達成し、スカベンジングにかなりのウエイトがあったとしても、肉食の比率はアウストラロピテクスに比較すれば飛躍的に増していたに違いない。そのための行動適応も進化していたと考えられる。

このように生物としてのヒトは、エレクトス段階で相当に進化していたと考えられるが、一方で現代人に特有な社会・文化的適応能力の開花はいまだ未発達のように思われる。例えば、アシューリアンには洗練されたハンドアックスが見られるが、その技術形態学的特徴は 30－20 万年前の末期段階を除いては旧大陸上で驚くほど共通し、時空間的な変化はほとんどない。ヨーロッパやアジア北部・日本で見られる小型剥片石器群も、そのほとんどはきわめて機能的であり、形態的な意味が付与されていないと考えざるをえないものが大多数を占めるようだ。中国等の東アジアの両面体石器群は、旧大陸西半部のハンドアックスとは大きく技術形態を異にするが、尖刃と平刃の二者からなるという西側のハンドアックスの機能的組成と一致している（佐藤 1999b）。総じて、機能に対応した形態分化が認められないのが、エレクトスの石器製作・使用行動の特徴と考えられる。

以上のことから、石器群に見られる特徴からは、道具使用に象徴行動がほとんどなく、文化的・社会的な集団行動や適応がいまだ未発達と考えられよう。集団適応戦略の実行は、もっぱら身体的・生物的側面が強調されていた。そして、各地のエレクトスから地域的に進化した古代型ホモ・サピエンスも、ネアンデルタール人に典型的に認められるように、身体適応を優先して地域環境に生物学的に適応した人類の適応放散が基本であった可能性が高い[12]。

（2）ネアンデルタールの適応行動

ネアンデルタール人の身体構造は、現代人と比べて以下のような差異がある（図 6）。

ネアンデルタール人は胴長短脚で頑丈な四肢と筋肉組織を有するが、それは寒冷気候への身体的な適応形態であろう。また前後に長く低平な頭蓋と現代人を越えた大きさを有する大脳も、発達した身体や筋肉組織を統御するためで知能とは無関係と考えられている。

巨大な鼻や突出した顔面も呼気を暖化したり体熱の発散防止の機能を有すると説明される。要するに、ネアンデルタールは、ヴュルム氷期前半のヨーロッパのツンドラ気候に身体的に適応した種であったと考えられているのである。

ネアンデルタール人の行動戦略と技術適応に関しては意見の相違が大きい。これは、現代人並の組織的狩猟を展開していたと推定されるような遺跡もある一方、スカベンジングや出会い頭の狩猟戦略に依存していたと考えざるを得ない遺跡が同じ地域に同時期に併存していた可能性が指摘されたり、土坑に死体を埋める行為は比較的多く観察されるが、これが現代人的な象徴性を有する埋葬とは様相を異にする場合が大多数を占めるといった事例が多く報告されているためである。つまりこうした事例に、不完全ながらも現代人的な象徴能力と創造性を読みとるか、あるいは一見現代人の行動に類似する例であったとしても意味が大きく異なっていたと理解するかによって、大きく解釈が分かれるからである。

筆者は、結論から言えば後者的な理解に近く、現代人的行動に類似する痕跡も、現代人の文化的構造要素に対する先適応ではないかと考えている。つまり、後期旧石器時代初頭の根本的な構造変動は、先行するネアンデルタールのような古代型ホモ・サピエンスの有していた行動戦略の各要素を技術的に利用し、その意味を根底から変更して再統合・構造化を達成したと考えている。従って、両者は表現型上よく類似するが、その社会文化的意味にはきわめて大きな格差があると思考される。

「創造力の爆発」と形容される後期旧石器革命の本質は、各要素の出現や起源にあるのではなく、技術・社会・文化・生活の全面にわたる構造変動にあった（図 7)。文化的適応の優先という新しい進化の形態を獲得したという意味で真のヒトは、現代人の出現以降と考えられよう。

なお、後期旧石器革命の意味については、別稿（佐藤 1998）を参照願いたい。

5　おわりに

今日の環境問題や社会問題の根元的・基本的要因を探る視点は、人間の進化的構造を形成し決定した先史狩猟採集時代の歴史的位相を分析することにある。人間は 400 万年の人類史の中で獲得してきた身体的･文化的な基盤構造から逃れることはできないからである。

註

1) 詳細は安斎編 1999；2000 の中の「最適捕食理論」「進化生態学」「文化生態学」「適応」「生態系」等の項目を参照されたい。

2) ドーキンスの「利己的遺伝子」のように、極端な場合生物の個体は、遺伝子を運ぶ格納庫のように理解された。

3) 以下の年代には全て「約」をつけるべきであるが、煩雑になるので全て省略する。

4) 人間の体質的構造も先史狩猟採集民時代に獲得されたものである。それは、臨機的な肉食と恒常的な植物食からなる粗食を基本とし、長い運動時間からなる生活環境への体質的適応であった。従って、古病理学の上からは、今日の人間に特有な成人病等の病理現象は、過去 1 万年の定住生活という短期間の急激な生活環境の変化へ体質が適応しきれていないことに起因する構造的問題であると指摘されている。グルメと飽食は、人間に基本的に適合しない生活スタイルなのである。

5) このためロブストス猿人の系統からは、大脳の巨大化が発達しえなかったと考えられる。

6) 1999 年に報告されたガルヒ猿人は 25O 万年前とされ、しかもカットマークのついた骨との共伴の可能性が暗示されたことで注目を集めている。従来ホモ属の登場と石器使用行動は一致すると理解されていたが、ガルヒ猿人がすでにこれを成し遂げていたとすると、少なくとも行動進化の方が、身体的な進化よりも優先することになるからである。

7) 狩猟が成人男性の専業でありかつ狩猟の組織化原理が社会のそれと同形であるという現生狩猟採集民社会で一般に観察される構造が形成された過程は、ヒトの起源とヒト化のプロセスにまで遡及することも可能であろう。

8) ホモ・エレクトスの歯の使用痕分析によれば、代表的なスカベンジング動物のハイエナの歯のそれに類似すると言われている。

9) ホームベース戦略の帰結として想起せねばならないのは、ヒト的な家族の起源に連なる可能性であろう。ホームベース戦略が直ちに今日的な家族に直結したとは考えられないが、その枠組みを作りだした可能性は考慮しておきたい。

10) アフリカに出現した初期のホモ・エレクトスを、ホモ・エルガステルという別種として理解する研究者も多い。

11) 直立二足歩行に適応して、身体形態も変化している（図 8)。エレクトスの体型はほっそりとした現代人的なものであったのに対し、アウストラロピテクスのそれはサル的な三角胴であったが、これは大腸の小型化に伴った変化と考えられる。植物食を基本とするサルは長い大腸が必要なのに対して、エレクトスは、大脳の巨大化により全身の基礎代謝率の関係で大腸が縮小したため、消化器官上も完全な植物食依存は不可能となっていた。

12) 1997 年元祖ネアンデルタール人骨から抽出されたコラーゲンの DNA 分析で、この人骨が 55～69 万年前に現代人の系統と分化したことが報告されたことによって、ネアンデルタール人から現代人が起源した可能性が最終的に否定され、現代人のアフリカ単一起源説がきわめて有力になった。この結果アジアにおいても、アフリカ起源の現代人との交代説が有力になったと言えよう。

引用参考文献

赤沢　毅　2000　『ネアンデルタール・ミッション』岩波書店

安斎正人編　1999　『現代考古学の方法と理論 1』同成社

安斎正人編　2000　『現代考古学の方法と理論 2』同成社

ウイルソン，E・O・1983－84 .『社会生物学』（全 5 巻）思索社

ウォーカー，A.・P. シップマン　2000　『人類進化の空白を探る』朝日新聞社

エルドリッジ，N. 1992　『大進化－適応と種分化のダイナミクス－』マグロウヒル

河合信和　1999　『ネアンデルタールと現代人－ヒトの 5OO 万年史』文芸春秋

木村有紀　1998　「食物分配の起源－ホームベース論の現状－」『動物考古学』11 号、23－52 頁

佐倉統　1997　『進化論の挑戦』角川書店

佐藤宏之　1998　「後期旧石器人の社会はどう変化したか」『科学』68 巻 4 号、337－344 頁

佐藤宏之　1999a　「考古学理論と旧石器時代研究」『石器文化研究』7 号、267－276 頁

佐藤宏之　1999b　「中国・朝鮮半島の旧石器時代と日本」『第 7 回岩宿フォーラム／シンポジウム予稿集』37－43 頁

諏訪　元　1999　「人類の成立－中新世化石人類からアウストラロピテクスの出現まで－」『科学』69 巻 4 号、333－340 頁

ピアンカ，E. R. 1980　『進化生態学』蒼樹書房

ブロイアー，G. 1988　『社会生物学論争－生物学は人間をどこまで説明できるか－』どうぶつ社

フオーリー，R. 1997　『ホミニッド：ヒトになれなかった人類たち』大月書店

フェイガン，B. M. 1994　『現代人の起源論争：人類二度目の旅路』どうぶつ社

リドレー，M. 2000　『徳の起源－他人を思いやる遺伝子』翔泳社

山越　言　1999　「野生チンパンジーの道具使用からみたヒトの物質文化の起源」『科学』69 巻 4 号、376－383 頁

Issac，B. 1989 The Archaeology of Human Origins:Papers by Glynn Issac.Cambridge University Press：Cambridge.

Binford，L.1985 Human Ancestors：Changing Views of Their Behavior. J.Anthropological Archaeolgy, 4：292－327.

Binford，L.1988 Hunting Hypothesis，Archaeological Methods，and the Past. Yearbook of Physical Anthropology,30：1－9.

Toth,N. 1985 The Oldwan Reassessed：A Close Look at Early Stone Artifacts. J.Archaeological Science,12：101－120

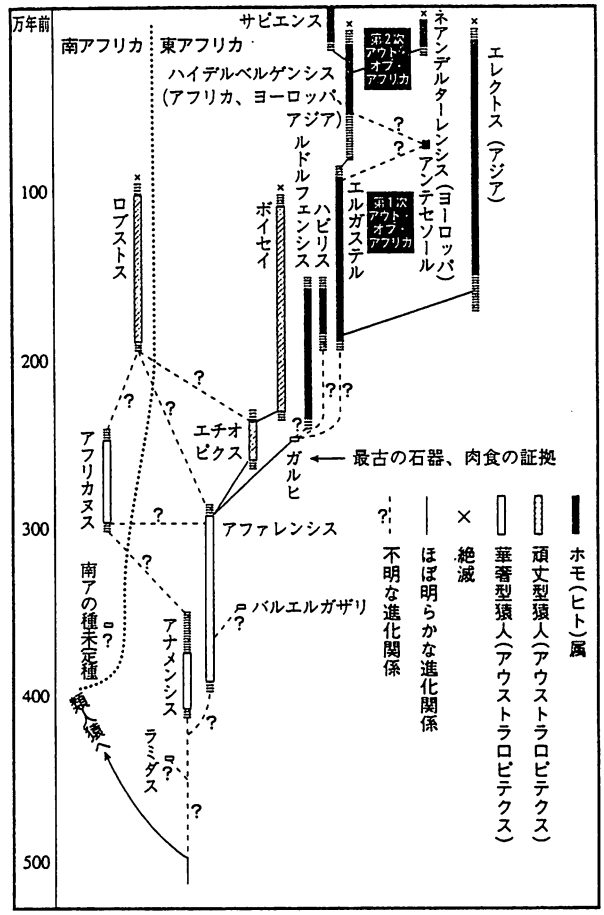
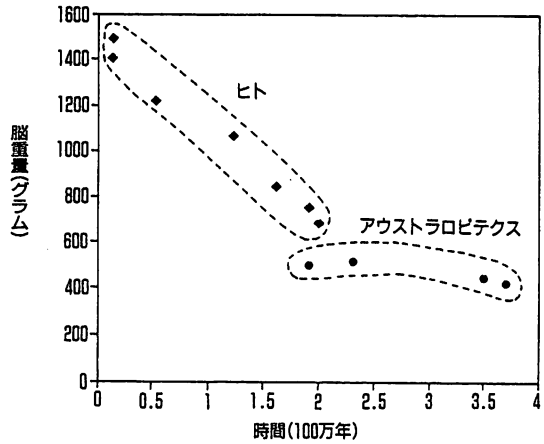


図1　最近の人類進化の系統図(河合1999より)



人類進化における脳容量増加のパタン．グラフ上の各点は，化石記録上，初めて登場した時期のホミニッド類各種の脳容量を示している．黒丸はアウストラロピテクス類，菱形はホモ属の各種を示している．

図2　初期人類の大脳の巨大化(フォーリー1997より)

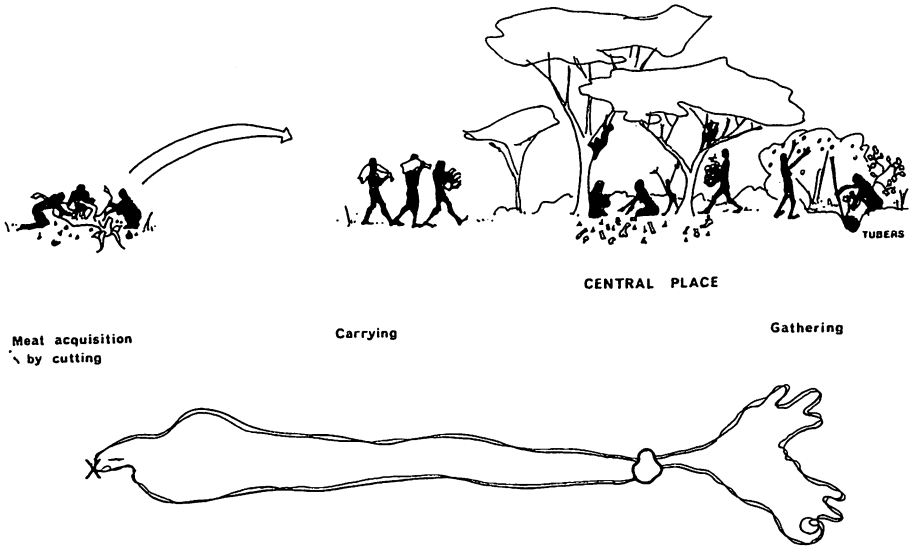


図3　ホームベース論(Issac1989より)

	鮮新世オルドワン期 （約２５０－１８０万年前）	更新世オルドワン期 （約１８０－１２０万年前）	アシューレアン期 （約１４０－15万年前）
ヒト	*P.aethiopicus, P.boisei, P.robustus*	*P.boisei, P.robustus,*	*H.erectus, archaic H.sapiens*
主な遺跡	ハダール、オモ、 西ツルカナ、センガ	メルカクントーレ、コービフォラ、オルドヴァイ、ステルクフォンテイン、スワルトクランス他	コンソ、オロルゲサイリエ、カランボフォールズ、トラルバ&アンブロナ他
遺跡分布の様相 1）分布 2）立地 3）堆積状況 4）遺跡数 5）規模	1）東アフリカ大地溝帯に限定 2）湖畔や川沿い 3）二次的堆積による遺跡多数 4）現在、４ケ所程度 5）石器数１０から５００点以下、歯骨数０の遺跡多数	1）東アフリカ大地溝帯及び南アフリカ石灰岩地帯 2）湖畔、川沿い、洞窟 3）大地溝帯からは良好な堆積状況の遺跡多数 4）現在１０ケ所程度 5）石器数２０００点以上、歯骨数３０００点以上の遺跡出現	1）アフリカ、ヨーロッパ、西南アジア、インドへと拡大 2）湖畔、海岸、泉等の水辺 3）二次的堆積による遺跡大多数のため年代確認不可能 4）表採確認地点が飛躍的に増大 5）石器数１万点以上の遺跡出現
遺物の様相 1）石器組成 2）製作技術 3）石材の種類 4）原材地からの運搬距離 5）石器と獣骨の共伴 6）獣骨組成 7）獣骨への人為的関与	1）人為的に運搬された自然石と、石核、剥片のみ 2）二次加工なし 3）火成岩かクウォーツのどちらか１種類のみ 4）数キロ以内 5）共伴は稀 6）共伴する場合、遊離歯多数 7）石器による切打痕等なし	1）自然石、石核、チョッパー類、二次加工のある剥片、剥片 2）二次加工の出現 3）数種類の石材使用 4）１０～２０キロ以内 5）石器と獣骨が頻繁に共伴 6）最小個体数５０以上の遺跡出現 7）石器による切打痕出現	1）定形的両面加工石器、剥片 2）形態の概念出現、大きな剥片剥離が可能 3）数種類の石材使用、石材選択 4）稀に１００キロ以上まで拡大 5）頻繁に共伴するが、原位置を失った遺跡が大多数 6）大形草食動物 7）遺跡の堆積状況が不良のため、分析例少ない

図4　前期旧石器時代遺跡の概要(木村1998より)

ホモ・エレクトスより前に出現したヒト科は、すべての種がアフリカ大陸に分布が限定されていた。ところが長い脚、大きな脳、強健な身体を持ったエレクトスは、旧世界全体に急速に拡大した。分布域の拡大は、この種が生態的地位を変化させた標識の一つだ。おそらくホモ・エレクトスは、能率のよい捕食者になったのだろう。(MYBPは「100万年前」という意味。)

図5　第一次アウトオブアフリカ(ウォーカー他2000より)

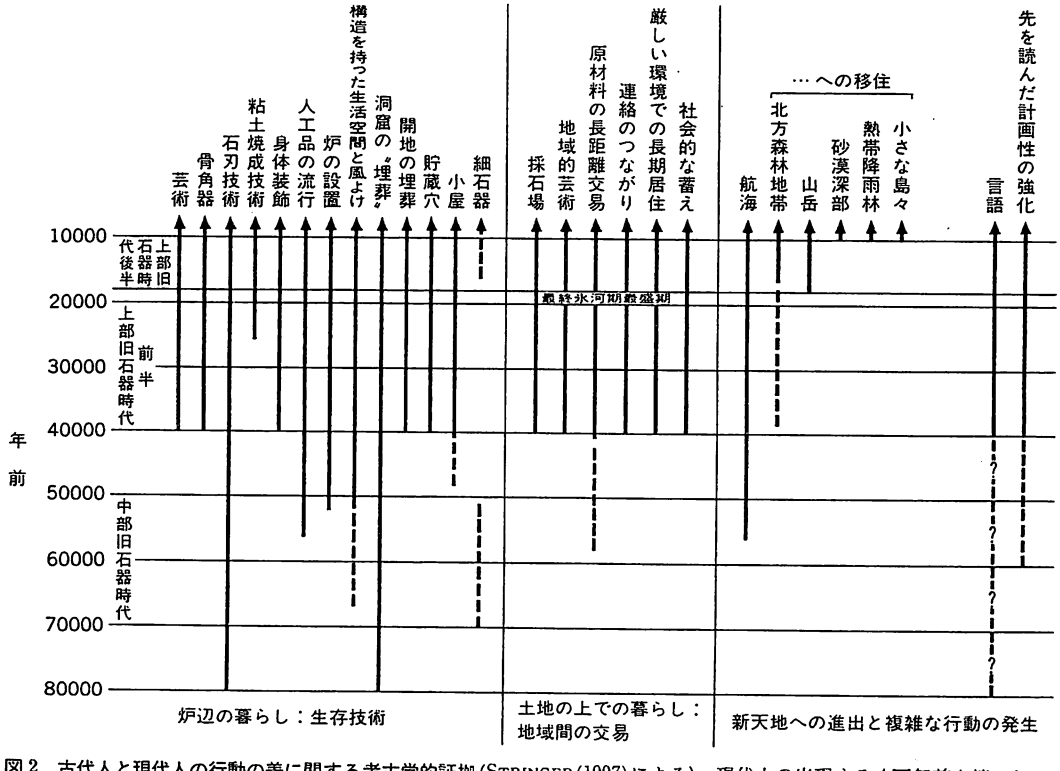


図2　古代人と現代人の行動の差に関する考古学的証拠(STRINGER(1997)による)．現代人の出現する4万年前を境にして，人類の行動上の質的な格差は非常に大きい．古代人は，寒冷な氷期の気候環境に頑健な身体で適応し，周囲の環境を場当たり的に利用する生存戦略に依存していたので，他の集団との社会的関係が薄かった．いっぽう，華奢な身体をもった現代人は，古代人とは異なり，劣悪な環境に対して好適環境間を計画的に移動する戦略を採用することで対処した．それには，無計画な移動がもたらす隣接集団との緊張を避けるため，集団間での社会的関係の構築が必要となる．遠距離交易品や異なる様式の遺物の存在は社会的交換網の存在を，身体装飾や独自の様式などは集団のアイデンティティーの出現を示す．また，周到に計画された行動戦略を確立するためには，発達した言語能力に始まる多くの革新的な技術を開発せねばならなかった．

図7　古代人と現代人の行動の差に関する考古学的証拠(佐藤1998より)

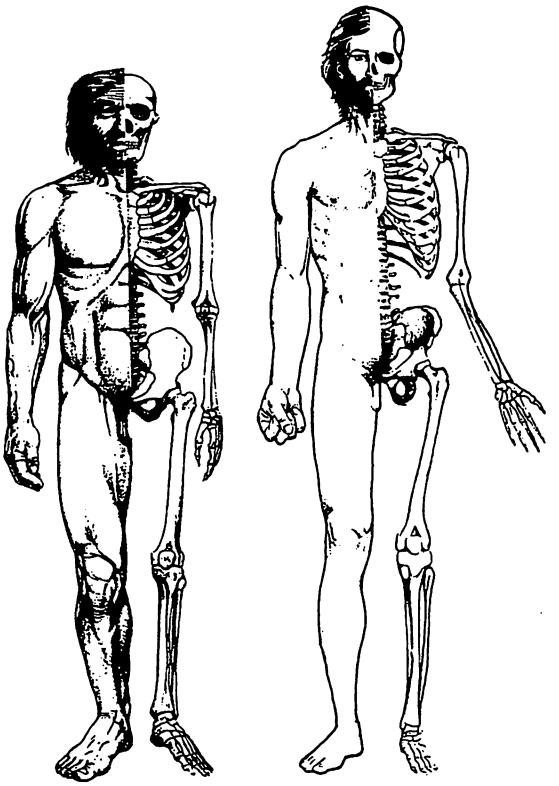
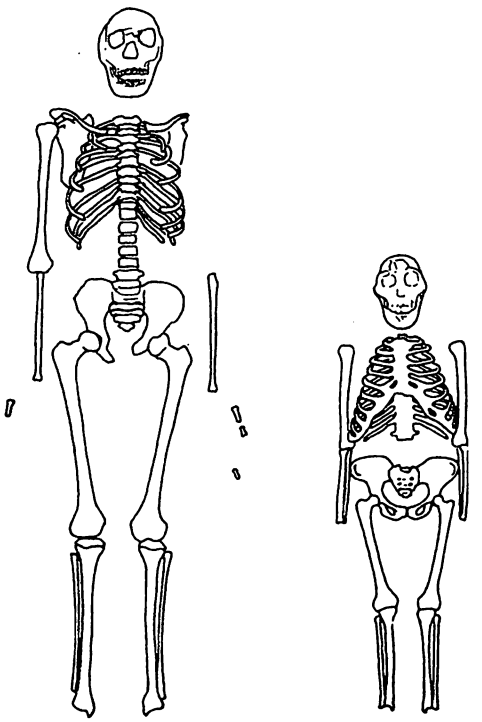


図6　ネアンデルタール人と現代人(フェイガン1994より)



雌のアウストラロピテクス・アファレンシスのルーシー部分骨格（右）は、彼女が類人猿のように太いウエストで、太鼓腹の姿をしていたことを示している。それと対照的にナリオコトメ・ボーイ（左）の胴体は細長く、腰幅も狭かった。これは、彼のウエストがはっきりとくびれ、体形が現代人のようであったことを暗示している。

図8　ルーシーとオリオコトメ・ボーイ(ウォーカー他2000より)

石材資源の利用行動

－　歩く人類の適応行動　－

野口　淳

1　はじめに：資源利用行動と石器石材研究

もっとも単純な資源利用行動のかたちは、まず対象が、「いつ」、「どこにあるのか」を認識、その場所へ移動し、利用することである。必要な資源が複数ヵ所にある場合には、それぞれの場所へ暫時移動することで、それらを獲得することができる。一方で、活動の根拠地を定めて、それぞれの場所で獲得した資源を運び込み、利用する方法もある。社会性昆虫や鳥類、肉食動物の一部に認められるホームベースである。この場合、資源の入手・獲得場所と時間は、利用の場所、時間と隔てられることになる。また、その場で逐次消費する場合と異なって、入手した資源の保管も容易になるが、一方で運搬方法が問題となる**（移動・運搬の課題）**。

さらに、ある資源を入手・獲得、運搬、利用するために、他の資源を利用する場合がある。この場合、目的とする一次資源の所在だけでなく、その利用のために二次的に用いられる資源の所在も認識されていなければならない。もっとも単純なのは、両者が同じ時、同じ場所にある場合で、手近にあるものをそのまま利用すればよいことになる。動物の道具使用は、ほとんどの場合、こうした現地性、逐次性の行動である。

一方、人類は、より複雑なかたちで道具を使用する。人類は、入手できる場所、時間の異なる資源を、複数組み合わせて、多様なかたちで利用する。各種資源を、必要に応じて、効率良く運用するためには、入手・獲得、運搬、維持・補充などに関して、相互に連動するよう、何らかの手段を講じなければならない。時には数百キロ離れた産地から石材を運搬し、加工し、利用する場合などは、端的な例である。それだけの距離と時間を経た後に、別の場所で機会を見計らって有効に利用するためには、先を見越した計画性、周到な準備が必要となる。場当たり的な対応では、必要とされる場所に到達するまでに資源を消費し尽くしてしまったり、あるいは必要とされる機会に充分な準備ができていなかったりすることになる。そのために、生計上不可欠な一次資源の獲得が滞ることになれば、生きのびてゆくことはできない**（逐次／時差消費と計画性の課題）**。

人類の利用する資源は、生存のために必要不可欠なもの＝一次資源と、一次資源の獲得のためなどに用いられるもの＝二次資源とに分けられる。動物質、植物質の各種食料資源、飲料水などが、一次資源の筆頭であり、石器石材は、二次資源に含まれる。二次資源は、その獲得・利用そのものが行動の目的なのではなく、あくまで二次的な使用に供することが目的となる資源である。

一次資源、とくに食料資源の所在は、生態環境の中に固有の位置をもっている。その多くは、気候条件などにもとづいて季節的に変化する場合があるし、さらに年単位での変動が起きる場合もあるだろう。二次資源の中でも、動物の骨や角、木材、動物質や植物質の

繊維などは、一次資源に付随して得られる。一方、石器石材の所在は、地質学的な過程により決定され、一時資源の分布とは相関しない。良質な石材の産地に、つねに豊富な食料資源があるわけではない。このため、石器石材の所在が一次資源から隔たっている場合には、事前に入手、獲得し、運搬する必要がある。

実際に考古遺跡から出土する石器石材は、石材原産地のような特殊な事例を除くと、「その場所」に産出するものではない。その距離は、数キロ程度から数百キロまでと幅があるが、基本的には、どこかから運ばれてきたものである。離れた場所にある産地から、出土地まで石器石材が運ばれることの背景には、当然、一次資源の獲得・利用行動に供するためという目的がある。「どこで」石器石材が利用され、廃棄され、考古資料として出土するかは、全般的な資源利用行動の中で決定づけられる。さらに、考古学的検討は、石器の製作＝石材の消費過程として、「どのように」石器石材を利用したのかを明らかにすることも可能である。

また、石器石材の産地については、岩石学的な手法、あるいは理化学的な手法により推定することが可能な場合がある。このため、「どこに」由来する資源が「どこで」使われたのかを具体的に検討することが可能になる。さらに、他の資源に関連するものよりも遺存の条件が良好な場合が多い。日本列島の旧石器時代遺跡に関しては、現状で取り扱うことができる資料は、ほとんど石器に限られている。このため、資源利用行動を検討する上で、石器石材はもっとも有効な対象資料となる。すでに、Isaac(1978)は、初期人類のホームベース仮説の提唱に際して、具体的な検証手段として石器石材の利用行動の解明を挙げている。その後、1990年代に入って、日本、及び海外ともに、石器石材について、その利用行動に焦点を絞った研究が増えつつあるのは、そうした有効性が認識されてのことと考えられるだろう。

ここでは、いくつかの研究事例を取り上げることで、石材資源の利用をめぐる人類の適応行動とその進化について見通すことにしたい。

2　チンパンジーの石材利用：選択と運搬に関する最適化行動

はじめに、比較のためにチンパンジーの資源利用行動を検討する。

野生チンパンジーは、現在ではアフリカの低緯度地帯の、乾燥したオープンランドから熱帯雨林までの広い範囲に生息している。各地域の個体群の遊動範囲はゴリラに比べて広く、一次資源の季節的変動（おもに良質な果実）に対して、広域の資源を利用することで対応している（山極　1999）。また、野生チンパンジーは多様な道具を使用する（McGrew／西田監訳　1996、Sugiyama　1997）。道具を使用する一次資源の獲得は、主要な食料資源の季節的変動を補うための、副次的な食料資源利用の場合に多いようである（山越 1999a）。

道具に用いられる二次資源は、小枝、葉のほか、石も利用される。ただし、基本的には現地性の利用である。西アフリカ・セネガルでは、シロアリ釣りは釣り棒に適した小枝が入手できる場所でよく行なわれる（McBeath &McGrew 1982）。道具が繰り返し利用されることはあるが、長距離の運搬は認められない。

同じく西アフリカのコートジボワール Täi 森林では、4種のナッツ割りに、石（花崗岩、石英ヒン岩、ラテライト）、木のハンマーと、木の根、石（花崗岩）の平坦部を利用した台

が用いられる。台には可搬性がないのでその場所までナッツを運ぶのだが、木の台へ運ぶ場合はほとんど 30m 以内のものが選択されるのに対して、硬いナッツ（*Panda oleosa*）に適した石の場合には 30m 以上離れていても選択される。ハンマーはしばしば持ち運ばれるが、その大半は 20m 以内の距離である。ただし石のハンマーは、硬いナッツを割る場合により遠くまで運ばれる傾向があり、最大で 500m以上の事例も認められる。しかし、運搬距離とハンマーの重量は相関しており、遠距離に運ばれるのは、実用に耐えうる中で軽いものである。

とくに硬いナッツの場合、木よりは石のハンマー、台を用いた方が明らかに打ち割りに要する打撃回数が少なくて済む。木のハンマーと台の組み合わせは、花崗岩のハンマーと台の組み合わせより 3 倍近い打撃回数が必要となり、よりエネルギーを消費することになる。しかし、森の中で容易に見つかるのは木であり、石に固執すると、探索、運搬にエネルギーを消費することになる。そこで、基本的には近場にある木を利用するのだが、硬いがカロリーの高いナッツを割る場合には、石の台を求めてナッツを運び、また石のハンマーを運んでくる。その際、長距離を運ぶ場合には、実用範囲の中でより軽いものを選択することで運搬にかかるエネルギーの消費を減らそうとしている（Boesch & Boesch 1983）。

このようにチンパンジーは、一次資源（ナッツ）と二次資源（とくに石のハンマーと台）の分布のずれに対して、それぞれを運搬して同じ場所に揃えて資源利用を行なっている。その行動は場当たり的なものではなく、移動、運搬には計画性が認められるという（Boesch & Boesch 1984, 2000）。ただし、運搬距離は小さく、一つの活動場所を大きく越えるものではない。四足歩行を基本とし、また物資運搬のための容器を用いないチンパンジーにとって、何かを抱えて長距離を移動することが困難なためであろうか。四足歩行は高速で移動することができ、捕食者を回避するのに有効であるが、二足歩行は長距離の安定した移動に適している（Rodman & McHenry 1980）。また二足歩行は前肢を自由にするので、両腕で保持しての物資の運搬に適している（Hews 1961）。McGrew（前掲）は、運搬距離の差は適応形態の違いに起因するものであって、行動の枠組み自体は人類のそれと大きく変わらないと主張している。

確かに、資源の所在に関する空間認識、場当たり的ではなく計画的な移動、運搬による対応、最適化 optimisation は、人類との比較の上で、その差異が質的なものではなく量的なものに過ぎないことを示唆しているように思われる。しかし、注意しなければならないのは、チンパンジーの行動は、基本的には個体を単位としていることである。母子間の資源の分配はともかく、石のハンマーの運搬が単位集団全体の採食に大きな影響をおよぼしているとは思われない。この点については、後にもう一度検討する。

3　初期人類の資源利用行動：時間と空間の複線的利用

先に見たチンパンジーの資源利用行動、または道具使用行動への積極的な評価に対して、初期人類の石器石材利用行動を検討した Stiles(1991,1998)は、両者の間には大きな差が認められることを主張している。

分析の対象資料は、タンザニア Olduvai 峡谷の遺跡群で、地質学的に Olduvai Bed Ⅱ中の、およそ 170 万年前に位置づけられる Tuff ⅡA 直上に包含されている。主要な比較は、MNK-Chart Factory Site（MNK-CFS）と、HWK East, Level 3 and 4（HWK E 3-4）の

2 地点間で行なわれている。湖成層中に含まれるチャート原石の産出地に位置する前者に対して、後者は旧河川の約 2km 上流に位置するので、遺跡出土のチャート製石器は基本的に搬入品として捉えられる。

チャート製石器の製作、とくに剥片剥離の技術は、2 地点間に共通性が認められる。しかし、礫面を残す剥片がチャート製石器全体に占める割合は、前者では 15.8%であるのに対して、後者ではわずか 4.7%に過ぎない。さらに、剥片の最大長と最大厚を比較すると、前者では微細なものが最も多く、またより大きなもの（最大長 10cm 以上、最大厚 5cm 以上）まで含むのに対して、後者では、最大長 3cm 前後、最大厚 1cm 前後のものを中心とした、限られた大きさのものに集中する。

つまり、MNK-CFS 地点では、チャートの打ち割りに関する一連の作業の産物がはっきりと残されていると理解される。礫面を残す剥片は原石からの打ち割りの初期段階の産物であるし、微細な資料は、打ち割りの際に生じる、道具としては利用されない石屑である。一方、HWK E 3-4 地点では、明らかに限られた形態、形状の資料だけが残されている。しかし、チャート以外の石器、石英や火山岩などは、多くの砕片や残核の破片などを含んでいるので、二次的な作用で微細な資料が失われた可能性は認められない。つまり、一連の打ち割り作業が行なわれた場所から、選別された一部の資料だけが持ち込まれていると理解されるのである。このような石器の運搬は、動物遺体の解体など一次資源の獲得と利用のために石器を準備する際に、必要なチャート原石が一次資源の獲得場所になかったための対応と考えられる。

また、2 地点間では、石材資源の獲得、打ち割り処理、選別、そして使用－廃棄に至る作業、行動がはっきりと区別されている。単に、その場にないチャートを利用することが目的なら、原石そのものを HWK E3-4 地点に搬入し、そこで打ち割り処理をすることも可能である。その場合、2 地点間の内容は、量的な際はともかく、礫面を残す剥片の比率など質的には共通するものとなるだろう。しかし実際には、そうした行動は選択されていない。

行動上区別される 2 地点間は、一方で、チャート原石の獲得→消費、石器の製作（準備）→廃棄（使用）といった、連続する行動によって結び付けられている。それぞれの地点での行動は、もう一方の地点での行動により補われることで、はじめて意味をもつ。時間的、空間的に隔たって行動を分割する一方、全体としての行動結果を統合しているのである。

先に検討したチンパンジーによる石のハンマーや台の利用では、結果としてその形状が変更されることはあっても、意図的な変形、道具としての形状の作り出しは認められない。しかし、飼育下のオランウータン（Wright 1975）、ピグミーチンパンジー（Toth et al. 1996）は、剥片石器の製作、使用を学習する能力を有する。この点については、「できない」のではなく「しない」のだと理解すべきだとされ、初期人類とチンパンジーとの間には、技術、行動の上で差異を見出すことは難しいとする見解がある（McGrew 前掲、Wynn &McGrew 1989）。

さらに McGrew は、しばしばヒト化の証拠の一つとして挙げられる物資の運搬について、チンパンジーと人類の間に根本的な差異はなく、運搬距離の量的な差に過ぎないと主張している。チンパンジーによる短距離の石の運搬行動が、長期間、ランダムに累積された場合に、直線距離にして数キロに及ぶ運搬が、結果として認められる可能性を指摘し、初期

人類の考古遺跡の状況も説明可能だというのである（McGrew　前掲：312-313）。

しかし、Olduvai BedⅡの事例は、そうした解釈の可能性を含まない。単に石材を運搬しているだけでなく、時間的－空間的広がりの中で順次行動を展開している。あらかじめ作業内容を計画し、遂行したことが想定される。生計上必要不可欠な資源を得るために、二次資源を、別の場所、別の時間に準備し、運搬するという、複線化、服装かした行動体系の出現である。さらに、チャート以外の石材、石英や火山岩については、遺跡内で打ち割り処理を行なっていた痕跡が残されている。所在や性質の異なる石材については、異なる対応が図られていたことを示している。

石材利用行動の検討は、少なくとも170万年前頃には、資源利用をめぐって大きな差異が生じていたことを明らかにした。たとえば、Oswaltの基準（Oswalt／加藤・禿訳　1986）をもとにした技術体系の複雑さの検討（McGrew／西田監訳　1996：204-221）には、今後、時間と空間に関する属性が付け加えられるべきであろう。そして先史考古学においては、石器石材資源の利用行動の検討が、もっとも有効になるはずである。

さらに、こうした石材資源の利用行動は、当時の集団-社会構成の中の、どのような単位で行なわれていたのかを検討してみよう。チンパンジーの事例では、ナッツの採取場所全体の利用は群れ単位で行なわれるが、個別の行動ごとの、利用する資源の選択、運搬に関する最適化は、個体のエネルギー収支問題として理解される。個体レベルの採食への適応行動である。一方、Olduvai BedⅡの事例では、直線距離にして2キロ離れた地点で、別の場所で使用するための石器を準備し、運搬している。歩行能力をどのように評価するか問題は残るが、現生人類型の二足歩行ならば往復に要するのは一時間程度、少なくとも「手の届く範囲」ではない。あらかじめ石器を準備していたのか、一次資源を獲得してから石器を準備したのか。チャート以外にも、産地の異なる石材が何種類か使用されているが、石材の違いは、個体ごとの行動の違いを示すのだろうか。石材ごとに、選択、搬出・搬入の有無、作業工程の分割と配置に斉一性、規格性が認められるのか、遺跡群を構成する複数の石器群で検討する必要がある。

また、サバンナ、疎林帯という開けた生態環境も考慮する必要がある。森林内に比べてより広い範囲を見渡せるので、離れた距離にある資源の所在を同時に認識することは容易だろうが、一方で、捕食者に対して我が身を晒していることにもなる。多くの草食動物やヒヒなどは、大きな群れを作ることで肉食動物の襲撃に対処している。初期人類にとって、開けた環境下、2キロの距離を個体単位で行動することが可能だったのだろうか。石材の選択、運搬、作業工程の分割と配置といった適応行動は、集団単位で行なわれていたと考えるべきなのだろうか。

Lovejoy(1980)が想定するような、子育てを軸に結びついた異性間の分業、食料資源の獲得と運搬、分配（Isaac 1978も参照）が行なわれる集団構成を前提とするなら、Olduvai BedⅡの事例で認められた石材資源の利用行動は、食料資源の獲得行動と結びついて、集団単位の適応行動として理解されることになるだろう。今後、先史考古学による居住形態復元の試みとともに、類人猿との比較社会生態研究（山極　1999）も必要となってくるだろう。

4　中期～後期旧石器時代の石材利用行動：集団単位の適応行動とその広がり

初期人類からはじまって後期旧石器時代に至るまでの各時点で、人類の行動がどのくら

い複雑になっていったのか、あるいは単純なままであったのかについては、さまざまな議論が展開されている。しかし、少なくとも中期旧石器時代のヨーロッパでは、直線距離にして200kmに及ぶ遠隔地の石材を利用する事例が認められる（Feblót- Augstin 1993）。平坦地を直線的に進んだとしても1日で往復できる距離ではなく、一次資源の所在を確認し、利用可能性が現実化してからの対処的な行動であったとは考えられない。

また長距離の運搬は、単に遠くにあるものを運んできているだけではない。Feblót-Augstinは、遺跡における石材・母岩単位の組成を、遺跡内に残されている石器製作の作業工程の内容に関連して8つのモードに分類して検討した結果、作業内容と石材産地からの距離が相関することを明らかにした。遠隔地の石材は、完成された石器のみ(mode 8)、もしくはそれに準じるかたちで残されており、原石からの打ち割りを示す状況はほとんど認められない。一方、原石からの打ち割りを示す状況は、基本的に近距離の産地からもたらされている（Gamble 1999参照）。Olduvai BedⅡの事例から150万年以上を経て、移動・運搬距離が飛躍的に伸びただけでなく、行動の複線化、複層化はますます著しくなったことを示す。

より遠い産地の石材の搬入石器と、より近い産地の石材の遺跡内製作石器の組み合わせが形成される過程としては、以下の二つの可能性を考えることができる。まず、時間的に先行する段階に製作された石器がそのまま保持され、複数地点の移動を経た後に廃棄される一方で、必要に応じて近くの産地で新たに入手した石材により石器の補充製作が行なわれた場合である。出土状況＝modeは、特定の産地・石材と結びつくのではなく、各遺跡からの相対的な距離に応じて変わるだろう。必要とする資源の所在地近辺に順次移動する居住形態の場合、このような状況が生じると考えられる。

一方、一次資源の所在などに対応して生活の拠点が定められる一方、特定産地の石材など、根拠地近辺では得られないが必要とされる資源については、その所在地へ赴いて入手、獲得し、根拠地へ持ち運んで利用する場合も考えられる（二つの居住形態については、Binford 1980を参照）。石器製作作業に際しては、多量に必要とされ質はあまり問われない道具の原料として容易に入手できる近距離の石材を選択する一方、特定の機能などに対応して特定産地の良質な石材が必要とされる場合、産地－遺跡間距離が大きければ、あらかじめ素材や完成形態として運搬重量を軽減するなどの対応が図られる。その結果、遠隔地産と近距離産の石材との間で、異なった出土状況が認められることとなる。なお、この場合の石材選択、使い分け、作りわけは、遺跡からの相対的な距離とは関係なく発現する。

以上の二つの可能性を検討するためには、複数の遺跡、とくに工程の分割配置と統合の観点から「遺跡群」を形成している遺跡間での比較検討が必要である。具体的な事例として、日本列島の後期旧石器時代を対象とした分析をみてみよう。

まず、顕著な事例として、近畿地方における二上山産サヌカイトの利用行動が挙げられる。産地が限定されるサヌカイトの利用に際して、石材産地、および隣接地での集中的な打ち割り処理が行なわれる一方、産地の外へは、完成形態の石器、あるいは分割された素材＝石核が運び出される。とくに、原石の分割が石器製作の作業工程に組み込まれていることが重要である。これは、運搬距離に対して重量を軽減してコストを削減する適応行動と連動しており、また完成形態だけでなく分割素材も運搬することは、不時の消耗分に対して追加製作を可能にするための「保険」としての役割も果たしていると考えられる（山

口　1983,1988,1991a,1994,1998)。

ここでは、原産地周辺では作業工程のほぼ全体が認められる。一方、それ以外の場所では、途中から派生した工程が遂行されている。一つの原石が分割され複数の作業工程が生じることに対応するように、個別の遺跡、地点に工程が分割して配置されている。分割された工程が配置されている遺跡は石材産地から80km離れている場合（兵庫県板井寺ヶ谷遺跡：山口 1991b）もあれば、隣接地の場合（国府遺跡第3地点など：一瀬ほか　1990）もある。いずれも、遺跡規模は大きくなく、石器組成も原産地とは異なる。それらの遺跡、地点は、原石の入手と分割について他所に依存しているため、原石の消耗分については再び工程の全体が行なわれている場所に戻って補充しなければならない。つまり石材産地周辺を軸に、遺跡の移動、石器製作、搬出・搬入などに関連する行動が統合されているのである。

一方、関東平野南部の立川ロームⅣ下・Ⅴ上層段階では、石材産地とは関係なく、大規模遺跡を軸に工程の分割配置が認められる（野口 1995)。ここでは「瀬戸内技法」ほど顕著な技術適応は認められないが、やはり原石の分割や素材の切断などを介在して作業工程が分割され、その一部が、中・小規模遺跡に派生するかたちとなっている。いったん拠点に石材を集め、打ち割り処理を行ない、必要に応じて別の場所は素材や石器を持ち出し利用していることを示しており、石器を利用して得た資源も拠点に集められ、そこで消費されていたのではないかと想定される。関東平野一帯では、同様な行動型が後期旧石器時代の前半から認められ、時期によって、石材産地との結びつきや遺跡の構成などが変化している（矢島ほか　1998、吉川　1998)。

動物遺体の検討によると、屠殺場、解体場などの作業場所の区分、拠点への搬入などは、すでに中期旧石器時代から認められる。石材資源の獲得や石器製作も関連して、時間－空間的に区分されていた可能性がある。この場合、根拠地外の作業場所へ集団全体で移動したとは考えがたい。性別、年齢階梯などにもとづいて特定の行動のため分遣集団 task group が編成されたとかんがえることが妥当である。根拠地に対する作業場所の遺跡規模の小ささは、その傍証になる。今後、さらに詳しい居住形態の検討を加える必要がある。

チンパンジーに見られる個体単位の行動では、同時に利用できる資源の範囲は、あくまで個体単位の移動能力に制約される。しかし、集団内で分業と統合が行なわれれば、より広域の資源を結びつけて利用することが可能になる。特定の活動の場へは、作業を行なうための分遣集団が赴き、最終的な資源の利用は拠点で行なわれる。複線化、複層化した行動体系は、時間－空間上でさらに広がり、深まりをもつとともに、組織化されて展開している。

チンパンジーから初期人類へ、移動・運搬能力の変化だけでなく、時間－空間の隔たりをこえて連続する作業を分割、統合するという適応行動の変化が認められる。さらに、初期人類以降、個体単位の行動から集団単位の行動への適応がみられ、あわせて広域の資源利用が展開されることとなった。事例分析と検討は今後もさらに必要だが、現時点で以上のような見通しを立てることは可能である。

5　石材利用をめぐる集団間－社会的適応行動

それでは、遠隔地産石材資源の獲得が、使用者自らの直接採取であったのか、それとも、

他者が獲得したものを二次的に入手したのであろうか。その検討に際しては、人口密度が一つの基準となり得る。散在する資源の所在地を全て包括する広い範囲を、ある集団だけが開発利用しているのなら、二次的な入手はあり得ない。いくつかの資源の所在地が複数集団の活動範囲に分かたれている場合でも、相互に自由利用が可能な状態ならば、資源の供給を他者に頼るよりも、自ら獲得することが選択されるだろうか。資源利用の排他性、領域の専有、他集団との相互関係の強度などと関わってくるだろう。それらの要素は、人口密度、つまり一定の範囲内に資源利用をめぐって競合する他者がいるのかどうかと密接に結びついている。

ヨーロッパ中期旧石器時代の主人公であるネアンデルタール人類については、広域におよぶ集団関係は想定できないとする立場が強い（Stringer & Gamble 1992）。遺跡分布の密度が高い南西フランスでは、比較的近距離の石材が利用される一方、遺跡数の少ない中部ヨーロッパでは遠隔地の石材利用もみとめられることは、人口密度に比例した行動範囲の広がりを示しているように思われる（Gamble　1999）。

一方、現代人が広く旧世界全体に進出した後期旧石器時代には、空間利用をめぐる枠組みに大きな変化が生じたとされる。たとえば資源利用について、自らの行動による適応だけでなく、他者との関係にも依存する適応も選択されるようになった。生計活動とは一見無関係な物品、それが保持する情報の共有によって広域の集団が結ばれ（Gamble 1983）、その結びつきを通じて、自らの活動範囲外の遠隔地からも資源を入手し利用する枠組みである（Gamble 1986,1996、Gillman 1986）。

しかし、日本列島の後期旧石器時代には、遠隔地の資源(石材)利用の証拠は多くあるが、集団の結びつきを示すような物品は乏しい。特定の石器形態(＝型式)に、集団を結びつける情報の共有を指摘する見解もある（田村　1992b）。しかし、縄文時代の土器の場合と異なり、原料レベルで異なる地域性を示す資料の搬入の現象はほとんど認められない。関東平野一帯で出土する「国府型ナイフ形石器」は、すべて「地元の」石材製である。縄文時代には、はっきりと型式の分布圏が分かれている中、その境界を越えて持ち運ばれる土器があり、また黒耀石などの特定の石材資源も持ち運ばれる。時には、その運搬距離は三百km 以上に及ぶ。

土器型式の分布圏に示されるような領域がはっきりと分かれる背景としては、一定の系譜上に一定の領域が維持されるような社会が想定される。民族誌例から導かれる理論的なモデル（Gamble 1986 参照）によれば、父方居住の社会では、集団の領域専有の傾向が強くなる。結果として、自らの領域内の資源については排他的に利用できることになるが、偏在する資源については、他者の領域にそれを求めなければならない状況が生じる。安定供給を図るためには、その他者と、安定した関係を維持しなければならない。日常的な訪問、互酬的交換、さらに婚姻関係による社会的な結びつきを重視し、そのつながりを通じて、必要な物資が動く。つながりの内側では、それを維持するためにさまざまな方策がとられる。しかし、そうしたつながりの外側、他者に対しては、著しい拒否、排撃といった対応がとられる。縄文時代、遅くとも前期以降の社会は、まさにこのような枠組みで理解できる。地下に包含される黒耀石原石の集約的な採掘をはじめとする行動は、集団内での個体の分業と統合を越えた、集団間での分業、間集団（たとえば地域社会）での統合を示していると考えられる。

集団間での資源利用をめぐる社会的な行動の発達は、それまでの適応行動の進化の方向性から見ると、大きな変換点として捉えられる。時間－空間認識の深化、行動の複線化、複層化による広域の資源利用は、一方では、二足歩行による移動能力を駆使して、「自ら取りに行く」適応行動である。それが、自らは一定の領域内にとどまっているが、社会的なつながりを通じて必要な物資が動くようになったのである。

このような大きな変化が、日本列島ではいつ起こったのか。縄文時代草創期後半、多縄文系土器群の段階の中部高地では、黒耀石石器の製作について、産地を中心に工程の分配配置がはっきり認められるが（横山　2000)、場外経の黒耀石の運搬は余り顕著ではないようである。後期旧石器時代からの連続を示すのか、縄文時代社会の確立に向かう時期の一時的な変動なのか検討を要する。今後、旧石器時代社会について、日本列島の事例の検討、お呼びヨーロッパとの比較を通して、縄文時代社会との対比可能なモデルを構築する必要がある。しかし、いずれにしても、現状では石材資源の利用行動が主要な検討対象となることは間違いない。

謝　辞

チンパンジーの道具使用行動について、山越言さんに多大なご教示をいただき、また、小田亮さんにもご協力いただきました。シリアの中期石器時代遺跡の事例、とくに動物遺存体については、Christophe Griggo さんにご教示いただきました。ありがとうございます。

（2000 年葉月大阪～イスタンブール～アフリン）

引用文献

一瀬和夫ほか　1990　『南河内における遺跡の調査Ⅰ　旧石器時代基礎資料編Ⅰ』、大阪府教育委員会

田村 隆　1992「遠い山・黒い石―武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察―」『先史考古学論集』第 2 集

野口　淳　1995　「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群―石器製作の工程配置と連鎖の体系―」『旧石器考古学』第 51 号

野口　淳　1996　「「石器文化」の再検討―旧石器時代「居住構造」試論―」『文学研究科論集』第 5 号、明治大学大学院文学研究科

野口　淳　1997　「遺跡における石器組成　－石器の「製作－廃棄連鎖」の検討－」『旧石器考古学』第 54 号

矢島國雄・野口　淳・門内政広・吉川耕太郎　1997　「相模野第Ⅱ期をめぐる諸問題(一)」『綾瀬市史研究』第 4 号

矢島國雄・野口　淳・門内政広・吉川耕太郎　1998　「相模野第Ⅱ期をめぐる諸問題(二)」『綾瀬市史研究』第 5 号

山口卓也　1983　「先土器時代における『移動』について」『ヒストリア』第 101 号

山口卓也　1988　「旧石器時代集落の周辺(Ⅰ)－郡家今城遺跡の集落環境－」『網干善教先生華甲記念考古学論集』

山口卓也　1991a　「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地－遺跡立地の差と地域性

の発生について－」『関西大学考古学資料室紀要』第8号
山口卓也　1991b『板井寺ヶ谷遺跡―旧石器時代の調査―』
山口卓也　1994　「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』、中・四国旧石器文化談話会
山口卓也　1998　「板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の横長剥片剥離技術」『旧石器考古学』第56号
山極寿一　1999　「類人猿の行動と文化の多様性－特集にあたって－」『遺伝』第53巻1号
山越　言　1999　「野生チンパンジーの道具使用からみたヒトの物質文化の起源」『科学』第69巻4号
山科　哲・岡田憲一・庄司雅子・横山　真　1999　「デデリエ・ネアンデルタール人の石器について」『公開シンポジウム「デデリエ・ネアンデルタール」予稿集』
横山　真（印刷中）「縄文時代草創期後半における黒耀石石器の生産形態－中部高地を例に－」『鷹山遺跡Ⅳ』鷹山遺跡調査団・長門町教育委員会
吉川耕太郎　1998　「後期旧石器時代における石器原料の消費過程と遺跡のつながり―南関東立川ロームⅥ層段階を事例に―」『旧石器考古学』第56号
Binford, L. 1980 Willow Smoke and Dog's Tail: hunter-gatherer settlement system and archaeological site formation, *American Antiquity*, **45**
Boesch, C. & Boesch, H. 1983 Optimisation of nut-cracking with natural hammers by wild chimpanzees: a preliminary report, *Behaviour*, **83**
Boesch, C. & Boesch, H. 1984 Mental map in wild chimpanzees: an analysis of natural hammer transports for nut cracking. *Primates*, **25**
Boesch, C. & Boesch, H. 2000 *Chimpanzees in Tai Forest*. Cambridge University Press
Féblot-Augustins, J. 1993 Mobility strategy in the late Middle Palaeolithic of central France, *Journal of Anthropological Archaeology*, **12**
Gamble, C. 1986 *Palaeolithic Settlement of Europe*, Cambridge University Press
Gamble, C. 1999 Culture and society in the upper palaeolithic of Europe *Hunter and Gatherer Economy in Prehistory*, Cambridge University Press
Gilman, A. 1984 Expaining the upper Palaeolithic revolution, *Marxist Perspective in Archaeology*, Cambridge University Press
Hews, G. 1961 Food transportation and the origin of human bipedalism, *American Anthropologist*, **63**
Isaac, G. 1978 Food Sharing and human evolution: archaeological evidence from the Plio-Pleistocene of East Africa. *Journal of Anthropological Research*, **34**
Lovejoy, O. 1981 The origin of Man, *Science*, **211**
McBeath, N.M. & McGrew, W.C. 1982 Tools used by wild chimpanzees to obtain termites at Mt. Assirik, Senegal: the influence of habitat, *Journal of Human Evolution*, **11**
McGrew, W.C.／西田利貞監訳・足立薫・鈴木滋訳　1996　『文化の起源を探る　チン

パンジーの物質文化』、中山書店（原著：McGrew W.C. 1992 *Chimpanzee Material Culture: Implication for Human Evolution.* Cambridge University Press）

Oswalt, W.H.／加藤晋平・禿秀志訳　1986　『食料獲得の技術誌』、法政大学出版局（原著：Oswalt, W.H. 1976 *An Anthropological Analysis of Food-Getting Technology*, John Wiley）

Stiles, D. 1991 Early hominid behaviour and culture tradition: raw material studies in Bed Ⅱ, Olduvai Gorge, *The African Archaeological Review*, **9**

Stiles, D. 1998 Raw material as evidence for human behaviour in the Lower Pleistocene: the Olduvai case, *Global context of early human behaviour*, Cambridge University Press

Sugiyama, Y. 1997 Social tradition and the use of tool-composites by wild chimpanzees, *Evolutional Anthropology*,**6**

Stringer, C. & Gamble, C. 1992 *In Search of Neanderthals*,

Toth, N. 1985 Oldowan reassessed: a close look at early stone artefacts, *Journal of Archarological Science*, **12**

Toth, N., Schick, K., Savage-Rumbaugh, E.S., Sevick, R. & Rumbaugh, D. 1993 *Pan* the tool-maker: investigations into the stone tool-making and tool-using capabilities of a bonobo (*Pan Paniscus*), *Journal of Archaeological Science*, **20**

Wright, R.V.A. 1972 Imitative learning of a flaked stone technology –the case of an orangutan–, *Mankind*, **8**

Wynn, T. & McGrew, W.C. 1989 An ape's view of the Oldwan, *Man*, **24**

環境と人類

― 相互作用論と適応の構造 ―

東京都立大学
小野　昭

1

一般的に環境と生物という問題の立てかたからすると、環境と人類という場合は当然ではあるが、ヒト hominidd(s) という、化石種をふくめて進化史で類人猿と分岐した人類の単系統群に属する動物の生物学的総称を対象とする。生物一般ではなく人類という粋がはめられているが、それでは生物一般として説明できる共通性と、人類の固有の質的差は何かがすぐ問題となる。

環境と人類の関係を説明する装置として相互作用論がもっとも一般に使われ、この相互作用を通じて人類が環境に適応してきたと説明される。たしかにその通りで間違いではないが、相互作用論に一歩踏み込んでその内容を明らかにしようとすると、さらに解決しなければならない課題がいくつかある。この報告の目的は、この相互作用論を再検討することにある。

2

この課題に迫ろうとする際に、適合する遺跡は多くない。ここでは、年代的にも約 400ka 前後で、発達した Homo erectus の頭骨の破片も発見され、石器以外の骨器や木器など有機質の遺物が豊富に残されていた、ハンガリーのヴェルテシュセレーシュ遺跡とドイツのビルツィンクスレーペン遺跡を例とし、それをさらに補うものとしてドイツのシェーニンゲン　遺跡をとりあげる。相互作用を具体的に考える際には、やはり道具から迫るのが考古学として最も正当であり、また展開の筋を追いやすい。石器・骨器・木器（木槍）にどのような機能があり、相互にどのような関係になっていたと推定できるのか。

3

ハンガリーのヴェルテシュセレーシュ遺跡や、ビルツィンクスレーペン遺跡では石器の組成にハンドアックスが無く、石器は小形である点である。かつてチェコの J. スヴォボダは、フランスのアラゴ洞穴、ヴェルテシュセレーシュ、ピルツィンクスレーペン遺跡出土の石器群を相互に比較した際に、この 3 遺跡、そのうちの特にヴェルテシュセレーシュとピルツィンクスレーベン遺跡の石器が大変小形である点をとらえて、石器群の適応は地方的な性格で、保守的で世界的な進化の傾向からは孤立した性格のものであると結論している（Svoboda1987）。環境との関係では、温暖で森林の発達した地域にこうした非ハンドアックス系の小形の石器群が適応し、森林の樹木を利用した木などの有機質の資料が大形の石器の代わりに機能したのではないかと問題を提起した。保守的で進化の系列からは孤立したという前半の評価と後半が整合していないのは、アシュール文化を評価の規準に

おいてそれよりも小形で不整形な石器群を低く評価するという観点が強く影響している。間氷期（温暖期）と小形石器という対応も、逆に氷期（寒冷期）であれば大形石器であるということが明らかになっていないので、場当たり的な解釈に流れている。有機質の資料との相補関係を指摘している点は評価できるが、むしろそれに加えて、石器については石材をめぐる素材の環境条件が重要である。

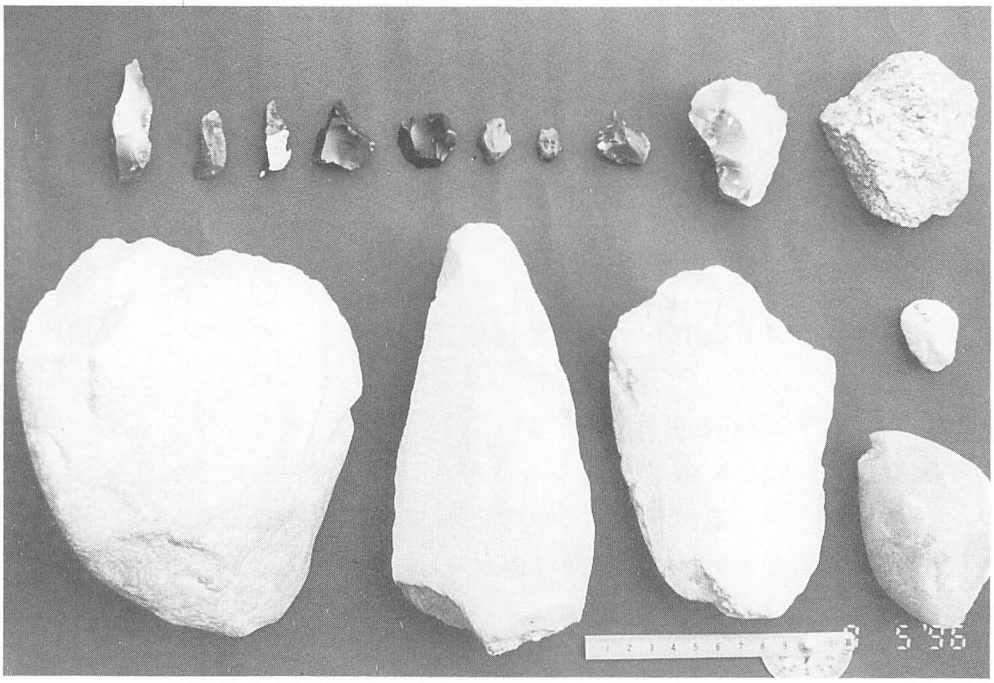
だが、これには環境条件に規定されている面と、それだけでは理解できない面との二面がある。つまり、ピルツィンクスレーベン遺跡では、大形の骨器が作られるが、それとは逆にフリント製の石器はきわめて小形である。それは石器素材を供給する氷堆石（モレーン）上層に産するフリント原石が小形であるからで、下層の大形の原石を採掘することができなかった限界があるからであるといわれている。いっぽう、同じ時期のハンガリーのヴェルテシュセレーシュ遺跡では、骨器は同様にアンティクウスゾウの素材を使った大形であり、石器もまた同様に小形である。しかしそこには石器製作に最適と思われる大形の扁平礫はいくらでもある。にもかかわらず、チョッパーやチョッピングツールなどの礫石器をはじめ剥片石器も、直径 3cm 前後の小形の円礫に徹底的にこだわって素材を選択している。

4

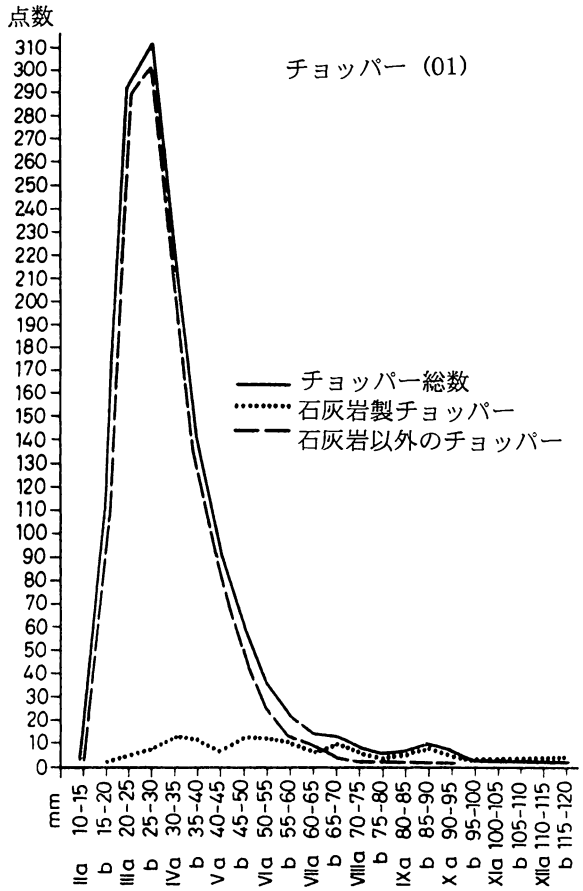
環境条件との相互作用からは説明できない石器製作技法の相対的独自性と、われわれにはまだ解析できない、ホモエレクトゥスの素材選択性の意思が強く働いている。生物主導論あるいは自己運動論の視点が資料に即して深められる必要がある。

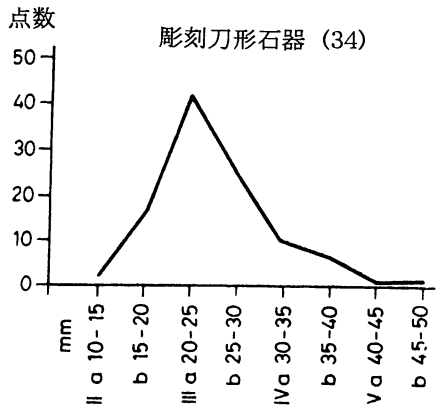
引用参考文献

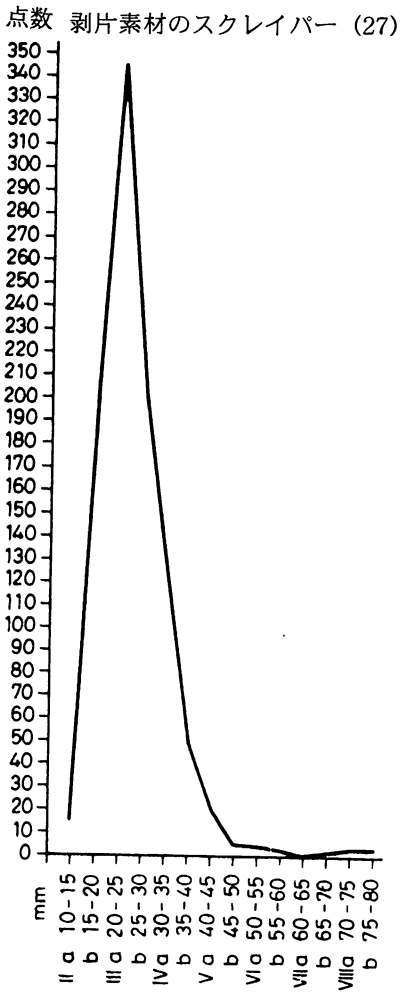
Svoboda, J. 1987 Lithic Industries of the Arago, Vértesszölös, and Bilzingsleben hominids: comparison and evolutionary interpretation. *Current Anthropology* 28(2): 219-227.

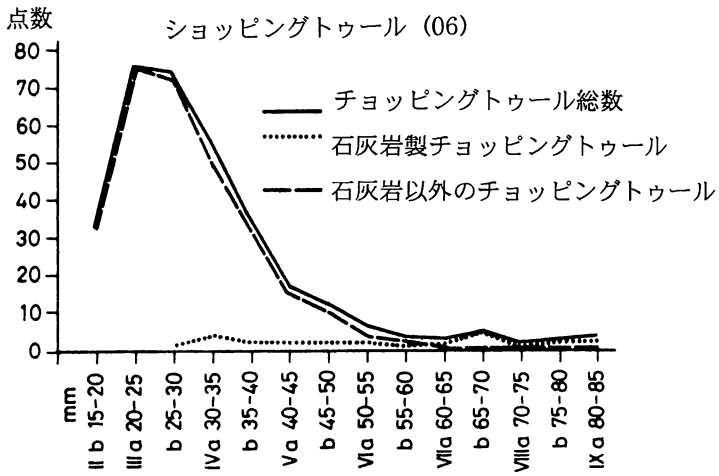


ピルツィンクスレーベン遺跡の大形打製骨器（下段左から 2.・3 番目）、
大形石製チョッパー（下段左端）、フリント製小形剥片石器（上段）　筆者撮影









ヴェルテシュセレーシュ遺跡の石器の大きさの分布　（Dobosi 1990一部省略）

Dobosi, V. T. 1990 Description of the archaeological material. In *Vértesszölös - Man, site and culture,* Kretzoi, M. and Dobosi, V. T. (eds.), pp. 311-395., Académiai Kiadó,Budapest.

寒冷環境への適応

島根県立大学北東アジア研究センター
加藤　博文

はじめに

適応とは、ラテン語の to を示す *ad*、と fit を示す *aptus* に由来する語であり、生物学的および人類学的には、１）進化論においては、際立った生態条件において生き残るために促進された特徴の選択の結果、時間軸を通じて残された諸組織によって示される種の変化過程である。２）考古学的には、過去の特殊な時期の間の環境を生き延びた人類が示す行動過程や文化的特徴の考古学的記録において提示される影響をさす。さらに３）として人類全般の生業や経済戦略の特殊な形式に基づく生態学的パターンや生活様式を指す；これは hunting-gathering adaptation, maritime adaptation, village agricultural adaptation として用いられる(以上 Dictionary of concepts in Archaeology, M.R.Mignon,1993 より要旨のみ引用)。

寒冷環境の適応(cold-climate adaptation)は、あえてその人類史上の意義を示せば、特に気候変動による環境変化に伴う人類進化論的諸問題や人類文化と環境の相関性を論じることになる。さらに地球上における人類の生活領域の拡大という広大なストーリーを検討する上で重要な基礎的部分であると位置付けることができる。本報告の具体的な対象は、いつ、そしてどのように人類が高緯度地帯に進出したのか、さらに寒冷環境への適応に際して検証必要な問題群の提示とその解釈となろう。

1　冷環境への適応に関わる諸問題

近年の旧石器考古学研究の動向および生理人類学的・進化人類学的研究においては、下記のような諸問題が指摘されている。

a) 前期および中期旧石器時代に属する遺跡の高緯度地域における発見
b) Neanderthals における人類学的・考古学的内的進化(the idea of in situ evolution of Neanderthals)の問題
c) 寒冷環境適応に適応行動と先史集団の生活様式および社会組織の問題
d) 気候変動と人類文化の変遷との相関性

などが指摘できる。なかでも現状では、過去の気候変動の地質学的、古地理学的、古気候学的研究を考古学的多層位遺跡の調査と共同して行うことによる学際的な古生態学的研究が重要な役割を占めてきている。各項目間の相関関係を見ても明らかなように、a)の問題は、前期および中期旧石器時代の人類遺跡がいかなる自然環境下において残されたのかという問題が重要であり、遺跡における古環境の復元と気候変遷との対比が不可欠である。

b)の問題は、Neanderthals 自体の形質の進化史、Modern human の起源とのかかわりでたびたび言及される問題である。特に Neanderthals の形質人類学特徴に寒冷地適応の特徴を指摘する(Steegman 1972, Rolland 1990 et al.)問題や人口増加や狩猟技術の向上、一般的な行動形態について、さらには心性の変化といった中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行期の問題としても取り上げられる(Mithen 1995 et al.)。これはこれらの変化が人類史上のどの時点で生じたのか、それと大きく関係する作用、特に自然作用としての気候変動との関係が注目される。

c）の問題としては、近年食性(diatary shfts)に注目した論文を Cachel が示し注目されているが(Cachel 1997)、食性の問題は、当然そのほかの生活様式や社会組織と強く結びつくことから考古学資料との地域ごとの対比が必要である。Cachel が指摘するように先史人類の食性の問題は、人間の生理組織に大きな影響を与えるため寒冷環境に適応を考察する上で大きな示唆を与えてくれるものである。アイソトープ分析法による成果があがりつつあるなかで、中期旧石器時代と後期旧石器時代間の食性の変化については今後大きく注目されるであろうし、この分析データと考古学的資料との対比と検討がなされる必要がある。

2　アジアにおける寒冷環境への適応

アジアにおける人類の寒冷環境への適応に関しては、いつ北アジアの高緯度地域へ人類が進出したのかという問題であるが長く関心をもたれてきた。近年の研究の動向から見ると高緯度地帯の環境への人類の適応行動は、前期旧石器時代、中期旧石器段階そして後期旧石器段階の三段階が指摘できる。

1）前期旧石器時代に遡る段階としては、人類遺跡として注目されたサハ共和国(ヤクーツク)で発見された Diring-Yuliakh 遺跡をめぐる議論がある。当初は北部ユーラシアにおける人類起源地説が Mochanov,Yu.によって唱えられ(1988a,b)、19 世紀末の Quatrefage 理論の再来を彷彿させ議論を呼んだ。しかし、現在ではその年代について 26 万年前を遡るという石器群という評価で落ち着いている(Derevyanko 1998, Waters,Forman and Pierson 1997)。いずれにせよ、高緯度地域への人類の進出として評価されるが、中部更新世の Tobol inter glacial(OIS 7)の温暖期における森林ステップやパークランドステップ環境における人類の進出であり、後に述べるようにその先史人類集団の行動形態や当時の古環境の問題をあわせて考えるならば、寒冷環境への適応の先例とは想定されない。

2）現在、北アジア地域において議論となっているのは、中期旧石器時代段階の人類の高緯度地域進出と適応であり、さらにいかにして後期旧石器文化の担い手がこの地域に出現するのかという中期から後期旧石器時代にかけての移行期の問題である。この議論は、古人骨資料が欠如しているため石器群に基づく分析となっている。しかし議論の傾向としては、アルタイムステリアンからカラ・ボム様相石器群とよばれる石刃を安定して伴う移行石器群が連続して後期旧石器石器群を成立させていくという内的進化(in situ evolution)を意見が主流となっている。一方この問題は寒冷環境への適応という視点からは大きな問題を持つ。それは Neanderthals 集団自体が寒冷環境へ適応していたか否かというヨーロッパで展開されている議論とも相関する問題であるからである。特に北アジアにおいては Kazantsevo interglacial(OIS 5)から Zyriansk Glacial(OIS 4)の間氷期から氷期への気候・自然環境の変化のなかで人類集団とその文化に何が生じたのかが議論となろ

う。形質人類学的研究と考古学的資料さらに古環境研究を加えた総合的議論は、Neanderthals から Modern human へという進化史上の問題と中期旧石器石器群から後期旧石器石器群への移行という技術史的問題を統合し、そこに先史人類の心性の問題や社会組織に問題も加えて今後議論が進んでいくであろう。

3）後期旧石器時代段階に関しては、最終氷期最寒冷期(LGM)に遭遇した先史集団の適応行動と形質の変化の問題がある。CLIMAP プロジェクト(CLIMAP 1976; 1981, Gates 1976; van Andel 1990)によって、間氷期と氷期の気候の長期的変動が明らかになった。特に 125000BP の最終間氷期から 9000-6000BP に位置付けられる完新世温暖期にいたる長期的変動と人類の適応行動についての研究が注目されている(Soffer and Gamble 1990)。北アジアにおいては、LGM はサルタン氷期(OIS 2)に位置付けられるが、陸上の堆積物の変化では海底コアの酸素同位体ステージよりも細かい気候変動が観察されおり、考古遺物を通じた人類文化の変化との対比が可能である。具体的には遺跡数の増加と生活領域の拡大、食性の変化、生活技術の向上と社会組織の複雑化が導かれ精神文化や精神世界の深化が窺える。

このように高緯度地域における適応行動だけでも上記の三段階が指摘できる。この中で寒冷環境への適応として検討の対象となるのは、気候変動のデータとの相関から１）段階と２）段階とすることができる。

3　寒冷環境への適応条件

3-1 行動形態

高緯度地帯への人類の適応といっても、様々な段階が想定される。Gamble, C. (1994)は、異なる生活環境への移住に際しての行動形態を連続性や計画性、長期的な時間幅の移動か否で区分している。Gamble, C による定義は、1)Migration、2)Dispersal、3)Colonization であるが、特に長期的時間幅での高緯度への進出行動であったかどうかが、環境の変化による人類の形質的特徴の変化(the Bergmann rule および the Allen rule)および文化的形質の変化の確認にとって重要な指標となる。

3-2 食性の変化

Cachel, S. (1997)は、極北圏の寒冷環境で生活する狩猟・採集民の食性の分析から寒冷環境への人類の適応には安定した脂肪および蛋白質の供給が不可欠であるとし、中期旧石器時代から後期旧石器時代への食性の変化を検討している。Cachel の注目した点は、a)安定した脂肪分の供給は骨中のカルシウム損失を防ぐために不可欠という点からみた古人骨に現れる飢餓的状況。b)骨中の安定同位体分析による Neanderthals のデータである。Cachel は、食性変化を三段階に分けて以下のように提示した：第一段階(中期旧石器)－陸獣に依存した肉と脂肪を主とする食性、第二段階(後期旧石器初頭)－脂肪への依存か増加する段階、第三段階(後期旧石器後半)－食料基盤の拡大、炭水化物食料の摂取、特定種の動物に特化した狩猟、である。食性の変化は中期旧石器段階と後期旧石器段階との間に生じたのではなく、後期旧石器段階内において生じた結論付けている。

高緯度地帯の寒冷環境に適応するためには、食料過多が招く季節的ストレスに対応する

ための脂肪、蛋白質、炭水化物の安定した摂取が必要である。高緯度地帯においては寒さへの対処として中緯度や低緯度地帯よりも高いカロリー摂取が必要とされる。しかし一方で炭水化物は高緯度地域においては、稀か季節的に存在しないという状況も生じる。よって脂肪分の確保、貯蔵、移送が生存戦略として重要となる。このためそれに見合った施設が遺跡において確認されるようになるのである。また食性における変化は、遺跡出土の動物依存体からの推定も可能である。安定した脂肪摂取を可能にしたことが人口の増加、社会組織の複雑化、定住化などを導いたと推測され、人類史における大きな転機を示す指標として注目されている。

3-3 技術革新

Modern human の起源に関する近年の考古学資料の提示する様相は、緩やかな中期旧石器から後期旧石器段階への移行を示している。北アジアにおいては、石刃製作技術がいつ出現したかという視点から中期旧石器石器群の中からいかに出現するかという視点に研究の関心がシフトしてきている。寒冷環境への適応行動が生活技術に何かしらの影響をあたえたとすると、繰り返される温暖期の寒冷期の中で出現する新しい石器製作技術や新たな道具の出現は大きな意味を持ってくる。一方この視点に立てば、先に触れた前期旧石器段階に遡るとされた石器群の器種構成や型式学的特徴における中緯度や低緯度との間の類似性は、集団の生活に変異を及ぼす時間的に長期的かつ安定し連続した進出ではなかったとみなしうる。

高緯度地帯の寒冷環境に適応という意味では、食性の変化との関わりを看過できない。高緯度特有の食料過多が招く季節的ストレスに対応するための脂肪、蛋白質、炭水化物の安定した摂取が必要である。特に寒さへの対処として中緯度や低緯度地帯よりも高いカロリー摂取が必要とされる。しかし一方で炭水化物は高緯度地域においては、稀か季節的に存在しないという状況も生じる。これに対処するために脂肪分の確保、貯蔵、移送が生存戦略として重要となり、生活施設の充実が図られるのである。

寒冷環境に適応するなかで出現した技術には、新たな石器製作技術のほかに、a)燃料としての骨の利用、b)暗い冬を乗り越えるための油や石炭の利用、c)高緯度地帯特有のビタミン質が豊富なベリー類や堅果類、キノコなどの植物食の開発があり、生活施設としてはd)保温性の高い衣服、c)長期滞在可能な住居と食料貯蔵施設が指摘できる。

3-4 社会組織・精神文化

食性の変化において示された脂肪分の安定した摂取には、狩猟活動における変化、新たな狩猟具、狩猟方法の確立も不可欠である。中期旧石器段階の狩猟活動は、広い領域に拡散し地域内での狩猟(10 数種の動物種の中の 1～3 種を対象獣とする)が想定される。一方後期旧石器段階の狩猟活動は、特定種に特化した狩猟活動が特徴として指摘されている。さらにこの時期の狩猟対象獣に見られる重要な要素は、群棲でかつ季節的に移動する動物種に大きく依存する点にある。代表的な狩猟対象獣として指摘されるトナカイやヘラジカでは、季節的に(繁殖期直前)に脂肪分が増加する特徴を持ち、この時期を狙った狩猟活動が民族誌においても知られている。季節的な領域の移動も特徴的でありこの時期に照準を合わせた狩猟活動も広く知られている通りである。このような狩猟対象獣の生態的特徴と

狩猟対象の特定化、さらに安定した脂肪分の確保という条件下において追い込み猟、渡河猟などの集団を組織する必要のある集団猟が確立していった。集団統合(aggragation)も領域に生活する集団間のリスク回避の手段として出現したとみなせる。

季節的変異の大きさや回遊性の食料資源への恒常的な依存は、心性の側面にも大きな影響を及ぼしたと見なせる。後期旧石器段階の特徴的な墓の出現は、生存している者と死者との明確な区別を確立した証拠として提示できる。さらに副葬品に回帰性の水鳥や生存していた時の同様の生活用具を副葬する傾向は、宇宙観の確立を読み取る可能性を有している。

4 北アジアにおける寒冷環境への適応

寒冷環境への適応の問題点、さらに寒冷環境への適応条件を検討して結果北アジアにおける寒冷環境への適応は、二つの段階として理解できる。第一段階は、中期旧石器段階後半に位置付けられる中部更新世末から後期更新世初頭にかけての寒冷期と温暖期の繰り返しの中で生じた文化的形質の変化である。北アジアにおいては、カラ・ボム様相の石器群に代表されるような連続した石器群の変遷を辿ることができる。そこには中期旧石器的石器群の担い手から後期旧石器石器群への寒冷環境への適応に伴う形質人類学的変化も生じた可能性がある。しかし、これに関しては古人骨資料による確認が必要である。

第二段階の寒冷環境への適応は、後期旧石器段階に生じた技術、社会組織、心性の側面におけるものである。これには食性の変化、具体的には狩猟対象獣や狩猟具そして狩猟方法に現れる生業活動上での変化が認められる。特に集団猟に見られる狩猟方法の変化には集団規模の増加そして全体的な人口の増加が背景にあり、それは食性の変化とも連動した安定した脂肪分の確保があった。この傾向は北アジアにおいては、Karginsk interstagial(OIS3 末期)移行の気候の寒冷化に向かう中でトナカイなどのシカ類に大きく依存する状況に見て取れる。北アジアにおいては埋葬例の検出もギダン寒冷期(OIS2 初頭)に出現し、マリタに代表される集落遺跡も確認されるようになる。この段階で基本的な寒冷環境への適応が確立したと見ることができよう。

引用参考文献

Cachel ,S. 1997 Dietaly Shifts and the European Upper Paleolithic Transition, *Current Anthropology* vol.38, pp.579-603.

Derevyanko ,A.P. 1998 *The Paleolithic of Siberia*. University of Illinoi Press

Drozdov,N.,Chlachula,J.,Chekha.V. 1999 Pleistocene environments and Paleolithic occupation of the Northern Minusinsk basin, southern Krasnoyarsk region. In J.Chlachula,R.A.Kemp and J.Tyrá ek(eds),*Quaternary of Siberia*, Sborník geologických v d Journal of Geological Sciences 23, Prague.

Gamble,C. 1994 *TIMEWALKERS*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

Gamble,C and O.Soffer 1990 Plistocene polyphony: the diversity of human adaptations at the LGM, in Gamble,C and O.Soffer (eds), *The World at 1800 BP*, vol.High Latitudes, Unwin Hyman Ltd,London.

Mignon,M.R. 1993 *Dictionary of concepts in Archaeology*, Greewood Press,Wesport,Conneticut.

Waters,M,R.,S.L.Forman and J.Pierson 1997 Diring Yuriakh: A Lower Paleolithic site Central Siberia, *Science* 275, pp.1281-1284.

ミズン S. 1998 『心の先史時代』(*The Prehistory of the Mind*, London, Thames and Hudson,1995)、青土社

	Alpine Glacial Stage	Siberian Glacial stage	Age Kyr	$\delta^{18}0$ stage	Environment	レス・古土壌
Holocene			<10ka	1	パークランドステップ	チェルノーゼム
Late Pleistocene	Würm	サルタン氷期	22-10ka	2	ツンドラステップ	グレイソイル・レス
		カルギンスク亜間氷期	55-22ka	3	森林ステップ・タイガ	チェルノーゼム
		ズィリャンカ氷期	110/73-55ka	4	ツンドラステップ・森林ツンドラ	グレイソイル・レス
	Riss-Würm	カザンツェヴォ間氷期	130-110/73ka	5	森林ツンドラ・森林ステップ・ステップ	チェルノーゼム
Middle Pleisto-cene	Riss	タゾフ氷期	180-130ka	6	ツンドラステップ・森林ツンドラ	レス
		シルチン間氷期	200-180ka	7		チェルノーゼム
		サマロフ氷期	260-200ka	8		レス
	Mindel-Riss	トボル間氷期	390-270ka	9	森林ステップ・パークランドステップ・ステップ	チェルノーゼム

*Zykina,V.1999 and Drozdov,N et al. 1999に基づき作成

第1図 シベリアにおける氷期編年と古環境

	Siberian Glacial stage	Climatical-Stratigraphical stage	Age Kyr	$\delta^{18}0$ stage	archaeological site
Holocene			<10ka	1	
Late Pleistocene	サルタン氷期 (22-10ka)	ノリリスク寒冷期	11.4-10.3ka	2	Maina(3L),Sukhotino4(U),Oshurkovo, Ushki 5
		タイミール温暖期	11.8-11.4ka		Novoselovo6,Aeshka, Studenoe1, Listovyanka (1-4L)
		寒冷期	12.2-11.8		Tashtyk1(1L),SpostokiKokorevo3,4
		ココレヴォ温暖期	13-12.2ka		Gorbaya1(3L),Ui2(3L),Maina(2L), Kokorevo1(2L), Verkholensk Gora
		ニャパン寒冷期	15-13ka		Listovyanka(7L),Ushki 7,Krasnyj Yar(U), Dyuktaj cave(U), Tashtyk4,Kokorevo1(3L),Kokorevo4(L), Akhontova Gora2(5-7L) , Kokorevo1(3L)
		休止期	16-15ka		Majna(1L),Novoserovo7,Kokorevo4(L),Akhontva Gora2(4L)
		ギダン寒冷期	22-16ka		Akhontva Gore2, Shrenka, Uj2(2L),Tomsk, Usti-Karakol(2L),Nizhnij Inzder 1
	カルギンスク亜間氷期 (50-22ka)	リポフスク・ノヴォセロヴォ温暖期	30-22ka	3	Ust'-Kova(L), Kurtak4,Kurla2, Igetej Gora, Mal'ta, Bulet', Kashtanka, Sabanikha Novoserovo13
		コノシェリスク寒冷期	33-30ka		Malaya Syya, Kamennyj Log, Sosnovyj Bor(6L), Kara-Bom(U), Torbaga , Ust'-Karakol (3L), Varvarina Gora,
		マロヘトスク温暖期	43-33ka		Okladnikov Cave(3L), Denisova Cave(21),
		初期寒冷期	45ka		Kara-Bom, Okladnikov Cave
		初期温暖期	50-45ka		Anyj1,Kara-Bom, Ust'-Kan cave ,Makarovo4,
	ズィリャンカ氷期 (100/73-50ka)	ムルクチン氷期	100-50ka	4	Kamennyj Log2, Ust'-Karakol1(4L),Denisova cave(22L),Kara-Bom(L)

第2図 シベリアにおける後期更新世の気候変遷と主要遺跡

シェーン・オペラトワールと技術組織

東京大学総合研究博物館
西秋　良宏

1　はじめに

フランスを中心とした最近の石器研究に登場する用語のひとつに、シェーン・オペラトワール（chaine operatoire）がある。本発表では、その定義、背景、適用例について概観し、その有効性を検討する。この概念としばしば比較されるのが主として米国考古学で発展させられた技術的組織論である。両者の関係についてもふれてみる。

2　シェーン・オペトワールとは

何らかの行動を構成する一連の動作ないし行為をいう。個々の動作の様態が社会や文化にもとづいた選択の結果であるとすると、複数の動作の産物である考古遺物には、当該社会や文化に固有な選択肢が幾重にも反映されているはずである。シェーン・オペラトワール分析は、遺物に関与したそのような社会的・文化的選択を時系列にそって解き明かすためのモデルを提供する。

このような見方は、技術のもつ社会性を最初に指摘したマルセル・モース（1872 - 1950）の業績をふまえ、アンドレ・ルロワ＝グーラン（1911 - 1986）が提示したものである。

3　シェーン・オペラトワールがなぜ注目されているか

「技術」に対する見方がここ 20 年ほどで大きく変化してきたことに由来している。すなわち、かつてのプロセス考古学では、技術は環境適応の手段である、あるいはどのような技術が採用されるかは環境への適応度によって決まる、といった視点がさかんに強調された。それに対する揺り戻しとして、技術がもつ、環境とは無関係な社会的・文化的側面の再評価がなされはじめたということでろう。

この分析によって、人の知能進化、教育システム、シェンダー、あるいはさらに包括的な集団の社会構造など、環境適応という観点の分析では論究が困難であったテーマへのアプローチが可能になりつつある。

4　打製石器のシェーン・オペラトワール

打製石器とは、原材の入手にはじまり、粗割り、石核調整、剥片剥離、失敗の修正、二次加工など一連の動作の産物であり、シェーン・オペラトワール分析の格好の素材となりうる。各段階でどんな技術や動作を採用するかについては複数の選択肢があったはずである。その選択肢を明らかにしていくことで、当該社会ないし集団がもつ技術の伝統や規範を解明することができる。

分析は、特にフランスや西アジアの旧石器・新石器について積み重ねられている。なか

には、シェーン・オペラトワール的視点を採用することによって、同一のデータから全く異なる結論が引き出された事例もある。

5　シェーン・オペラトワールと技術組織

近年の分析事例をみると、シェーン・オペラトワールが道具の「生活史」(life history)と同一視され、意義が矮小化されていることが少なくない。また、物的条件に対処するためにどう技術が組織されたか、そのシステムがいかに効率的に適応したかを問題とする技術的組織論と混同している事例も見受けられる。両者は分析手続きは類似しているかも知れないが、理論的基盤は別ものであることを理解すべきであろう。

参考文献

Dobres,M-A　2000　Technology and Social Agency. Oxford:Blacwell.

Nishiaki, Y.　2000　Lithic technology of Neolithic Syna. Oxford:Archaeopress.

西秋良宏　1988　石器製作技術の研究と動作連鎖」『石器研究入門』所収解説、
M,-L. lnizan,H.Roche and J,Tixier　大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保　訳
クバプロ

西秋良宏　2000　「シェーン・オペトワール」『現代考古学の方法と理論（Ⅲ）』
安斎正人編、同成社。

適応・進化・認知

― 認知考古学の役割 ―

松本　直子

1　はじめに

認知考古学という言葉が盛んに口にされるようになって 10 年ほどになる。初めは捉えどころのない存在であったが，現在では『MIT 認知科学事典』の中でも項目として取り上げられ，学際的な性格の分野として確立しつつある（Wilson and Keil, 1999）。それでもなお，認知考古学とはどういうものかについて，それほどはっきりと同意が得られているわけではない。『MIT 認知科学辞典』の「認知考古学」の項目で，スティーブン・ミズンは，認知考古学と呼ばれるものを，次の 3 つに分類している。

① ポストプロセス考古学
② 認知プロセス考古学
③ 人類の認知進化の研究

①のポストプロセス考古学は，象徴や意味の重要性を主張した学派で，認知考古学が誕生するきっかけを作ったといえる。物質文化の役割や積極的な個人の行為に着目する視点など，多くの重要な指摘を行ったが，人文主義的・相対主義的立場から，機能主義的考え方や進化論を文化に対して適応することについては批判的である。それに対して②の認知プロセス考古学は，過去の認知を論じるにあたって，なんらかの科学的足がかりを重視するため，コンピュータ・シミュレーションや数学的モデル化も行い，認知科学のさまざまな概念を導入することにも積極的である。③の人類の認知進化に関する研究は，大きく分ければ②の認知プロセス考古学の中に包摂されるものであるが，文字通りヒトの認知能力が進化してきた過程を研究するものである。今回のシンポジウムのテーマである「人類の適応行動と認知構造」の鍵である「適応」と「進化」という考え方に対する態度において，①と②・③との間には大きな隔たりがある。

とくに③は，適応・進化という要因を中心に据えている。そこで，非常に学際性が強いこの分野に焦点をあてて，考古学における適応・進化・認知という概念の意義について考えてみたい。

2　心の捉え方

従来の心身二元論的な枠組みにおいては，心と環境や適応などの概念は相容れないものとみる考え方が優勢であった。環境適応を主眼においた北米のプロセス考古学が，認知や意味の問題を軽視・無視してきた，という批判もそうした状況を示している。しかし，「進化」という視点を適切なやり方で導入することによって，心と環境・適応は，じつは分か

ちがたく結びついていることが改めて注目されつつある。

考古学者を含む自分・社会科学の研究者は，人の心とは元来白いキャンバスのようなもので，成長の過程でそれが固有の文化や社会の間でさまざまに塗りつぶされて行くというふうに考えがちであった。つまり，人はごく基本的・一般的な「思考力」や「記憶力」というものはもって生まれてくるが，それは最低限の能力を保証するに過ぎず，それがどのような内容に発達するかは，まったく後天的な経験によって決まる，というわけである。

このような枠組みは，考古学者の間でも，広く共有されているといえよう。しかし，この枠組みは，考古学者にとっては致命的なものである。過去の人々の認知に言及しようとする認知考古学に限らず，行動パターンや生業を復元しようとする場合でも，過去の人々の意思決定や価値観などについての，何らかの推測が伴う。人類の思考の共通性はわずかなもので，具体的内容は個々の文化に属する人々の行動や生活様式をつぶさに観察したり，直接話をしたりしなければ分からない，ということでは，考古学者は常に危なっかしい当て推量をしている，といわれかねない。しかし，これはほんとうに正しいのだろうか。

ここでは，進化と認知をめぐる最近の議論を取り上げ，考古学的視点からみた問題点や可能性についての筆者の考えを示したい。まず，「進化」という視点から人間の認知構造を考えていこうとするものとして，近年台頭してきた進化心理学の主張をとりあげ，適応・進化・認知の関係について整理する。それから，認知科学の成果と考古学の成果を結びつけたミズンの認知進化論について概観し，認知考古学の役割と可能性について考察することにする。

3　進化心理学の登場

進化心理学というのは，ここ 10 年ほどの間に非常に盛んになってきた分野で，ヒトという種が，物を見たり，聞いたり，考えたりするやり方には，ある種のクセ（構造）がある。このクセの由来や性質を「それは進化によって形成されたのだ」と前提して研究しようとするものである。その基本的な考え方は，人間の心は自然選択という進化の過程によってのみ生じうる複合的・機能的な構造をもっている，ということである。心は，それぞれ独自の記憶形態や推論過程が埋め込まれた複数のモジュールを備え，個々の問題解決にあたっている。このようなモジュールが発達したのは，人類の祖先が生き延びるためには，さまざまな状況に即した，個別で速い推論システムが必要だったからでる，というわけである。

内容ごとに特化した認知的モジュールとしては，顔認識モジュール，空間的関係モジュール，剛体力学モジュール，道具使用モジュール，恐怖モジュール，社会的やり取りモジュール，情動知覚モジュール，血縁指向動機付けモジュール，力の配分および再設定モジュール，社会的推論モジュール，友情モジュール，文法獲得モジュール，心の理論モジュールなどが想定されている。それぞれ，人類の祖先が社会生活を営みつつ生き残っていく上で重要な問題に対処できるようになっている。これと類似したもので，領域固有性という概念もある。たとえば，生物に関する領域と人工物に関する領域では認知の様式が異なることが心理学で明らかにされている。

4　進化心理学の主張

進化心理学を提唱したL.コスマイズとJ.トゥービーは，現在の社会科学が使用しているモデルに根本的な誤りがあると指摘する（Tooby and Cosmides, 1992）。そのモデルとは，成人の心理構造は後天的に形成されるもので，生まれつき備えているのは，ごく基本的で一般的な推論・記憶能力に過ぎないというモデルである。個人は社会の産物であり，社会は個人の産物ではない，というわけである。しかしそれでは文化や社会はいったい何によって作られるのか，とコスマイズとトゥービーは問う。また，この「基本的社会科学モデル」が100年近く概念的な基盤として，社会科学における諸分野間の孤立主義を保証してきたと批判する。すなわち，社会学，心理学，人類学などの分野の間で，他の分野ですでに誤りと判明しているような理論を平気で使いつづけることが許容されるような分野間の断絶があるというのである。

人文社会科学においても，たしかに分野間の連携や学際的研究は必要であろう。認知考古学は，そうした試みのひとつに位置付けられる。ここで注目する人類の認知進化の問題は，とくに学際性が高い性格であるといえよう。ここでとりあげる諸分野の間の関係について簡単にあらわすと，図1のようになろう。

こうした現行モデルに対する批判と，ここ数10年来のさまざまな分野（進化生物学・認知科学・行動生態学・心理学・狩猟採集社会に関する研究・社会人類学・生物人類学・類人猿研究・神経生物学など）における発達に基づいて，より学際的な「統合因果モデル（ICM）」を提示している（ibid.）。

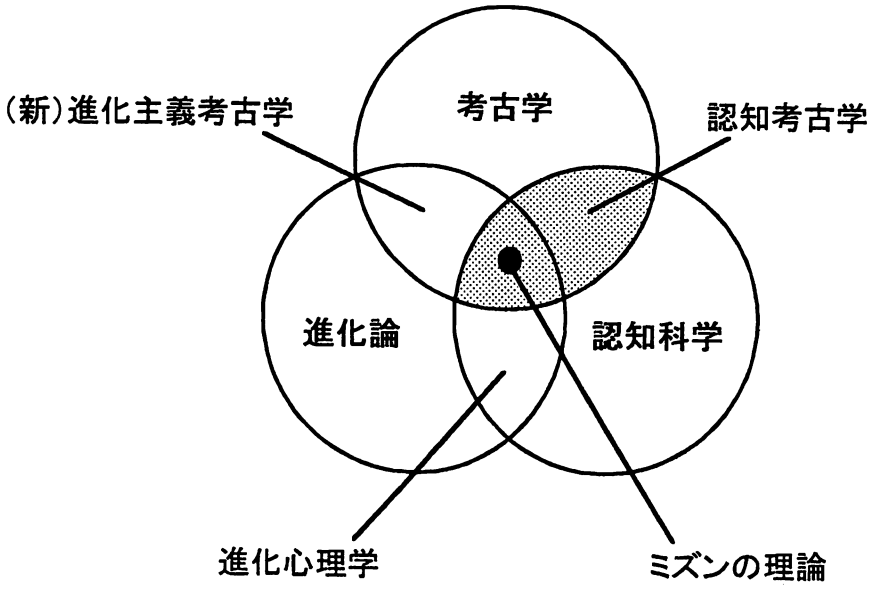


図1　認知考古学をめぐる学際的関係

統合因果モデルに基づくと，ヒトの心と文化について次のような学際的なモデルが立てられる。

a. ヒトの心は，進化した情報処理メカニズムのセットからなる。
b. このメカニズムを生み出した発達プログラムは，祖先が経験した環境において，進化的時間の中で進行した自然淘汰による適応である。
c. これらのメカニズムの多くは，配偶者選択，言語獲得，家族関係，協力，などの特定の適応的問題を解決する行動ができるように，機能的に特殊化している。
d. 機能的に特殊化するために，これらのメカニズムの多くは内容によって豊かに構造化されている。
e. 内容特定的情報処理メカニズムは，人間の文化における特定の内容のいくつかを生成する。それには，ある種の行動，人工物，言語によって伝達される表象が含まれる。
f. これらや他のメカニズムによって生成された文化的内容は，集団の他のメンバーがもつ心理学的メカニズムによって採用されたり変容されたりする。
g. これが疫病学的・歴史的な集団レベルのプロセスをセットアップする。
h. これらのプロセスは，特定の生態学的・経済的・人口学的，そして集団間の社会的コンテクストや環境の中に位置付けられている。 (ibid. : 24)

このような視点にたつと，これまで限りなく多様であると考えられがちであった文化の内容についても，その多様性をうみだす基盤となっている，人間という種に固有かつ普遍的な特性があると考えられる。それをメタ・カルチャーと呼ぶ。メタ・カルチャーは，次の（1）～（4）によって確立・構成される普遍的・再帰的関係のシステムであるとされる。

（1） 種に固有かつ普遍的な心理学的・生理学的構造
（2） 集団の中でのこれらの構造間のインターアクション
（3） 上記と，自然・文化環境の再帰的構造とのインターアクション
（4） 上記が，人間の現象に対して与えるパターン化した基本的インパクト
(ibid. : 91)

以下に若干の事例に触れながらこのモデルについて検討してみる。
人に固有かつ普遍的な内容特定的モジュールの存在を示す例として，コスマイズらは社会的交換という行為を支える認知メカニズムに注目している（Cosmides and Tooby, 1992）。一連の心理学的実験結果が示すところでは，人はルール違反を検出する一般的能力というより，「社会的契約を破るやつ cheater」を見つけ出すという内容特定的メカニズムを備えているらしい。これは，ギブ・アンド・テイクの関係を公正に保てるかどうか，という問題に直接かかわるものである。

心理学と人類学の統合に基づくこの仮説は，狩猟採集社会を対象とする考古学で注目される Optimal foraging と深く関連している。進化心理学の視点からは，「食料の獲得と共有は長い進化の歴史をもつ複雑な適応上の問題なので，そのために高度に構造化された領域固有の心理学的メカニズムを進化させてこなかったとは考えにくい」ということになる。このような初期人類の生活様式に関する推測と，いくつかの民族誌の事例から，コスマイ

ズらは，人は食料供給の変異性（いつでも手に入るものか，限られた場所や機会でのみ入手できるものか）についての情報が，「食料の共有」に関する認知メカニズムにおける異なる行為モードのスイッチを入れたり切ったりするのだ，という仮説を立てている。

パラグアイの Ache 族は，変異性において異なる食料を，異なるやり方で共有している。変異性の高い（いつも手に入るわけではない）肉についてはバンドレベルで共有するのに対して，変異性の低い（いつでも入手できる）植物質食料は核家族のレベルで消費し，バンドレベルでは共有しない。彼らは「誰が一番狩が上手いか」とたずねられると，不愉快に感じる。それは，狩猟能力に優劣があることを認めることは，狩が下手なものはギブ・アンド・テイクの関係において「ごまかし」をしているということを認めることになるからであると解釈される。

このように，食料の共有に関する認知メカニズムがあって，それが食料の供給状況に応じて異なる対応を生み出していると考えると，たとえ集団間に情報伝達がなくても，類似した環境においては，少なくとも食料の共有については類似した規範や習慣がそれぞれ成立してくる可能性があるのである。このような社会的交換に関するメカニズムを基盤として，限定されたパートナー同士の贈与品の儀礼的交換や，異なる資源の原産地間の交換なども生じてくるとコスマイズらは考えている。さらに，現存する狩猟採集民が概して平等主義的で権威的な社会関係がみられないのは，おそらく農耕民によって，食料の変異性が高い周辺領域に追いやられたことの副産物であるとも考えられる。つまり，食料が安定して供給されるような状況であれば，狩猟採集民であっても共有のメカニズムが働かず，富の蓄積が起こる可能性があるともいえる。この例として北アメリカの西北海岸インディアンの階層社会があげられている（ibid.: 215-17）。

5　進化心理学の利点と問題点

進化心理学のような考え方に対しては，次のような批判が出るかもしれない。すなわち，このような見方は決定論的・運命論的で，人間社会の豊かな多様性とは相容れない，というものである。人の運命は固定されていて変えられないというのは，人文社会科学の思想と反するという意見もあろう。

しかし，人間の認知構造が，いくつもの進化したモジュールによって成り立っているということは，必ずしも人間や社会のあり方が普遍であるとか，運命が決まっているということにはならない。たとえば，コンピュータによるシミュレーションなどにおいても，ちょっとした設定や入力するデータの違いで結果が大きく変わってくる。ましてや，基本的なメカニズムは共通しているとはいえ，非常に複雑な人間の認知においては，環境や社会状況などの諸要因によって，その発達の仕方や行為に表れる結果などはすいぶんと変わってくるはずである。むしろ，現代社会の抱えるさまざまな問題に対して具体的な解決案を提示するためにも，その原因の一翼をになう人間の認知メカニズムを知ることが必要であると，コスマイズらは言う（Tooby and Cosmides, 1992 : 39-40）。

また，このような見方はあまりに機能主義的で合理主義的だ，という批判があるかもしれない。しかし，現代人の心理学的構造は，人類が進化してきた旧石器時代洪積世の生活に適応している，というのが基本的な主張である。つまり，適応といっても，つねに人の認知能力がそのときの環境に最もよく適応しているということではない。自然選択という

過程による進化には，大変長い時間がかかるため，そこにはつねにタイムラグが存在する。つまり，旧石器時代のフォレジャーにとっては非常に適応的だった認知構造が，現代社会においてはあまり適応的でなかったり，むしろデメリットがあったりすることも考えられる。したがって，この枠組みは単純な機能主義とは異なっている。

ほんとうにこのようにすべてが割り切れるものかどうかはまだ分からない。しかし，彼らのモデルにも一定の有効性があるとすると，過去の狩猟採集民の社会構造を復元するうえで強力なサポートとなることは間違いない。環境と生業の復元から，社会構造の復元にアプローチしやすくなるからである。

進化心理学が提示する諸理論は，以上のように考古学にとって魅力的な側面を備えているが，一方で考古学者の側から批判的に検討しなければならないところも多い。進化心理学のモデルの確実性は，先史時代（特に長い旧石器時代）の人が遭遇したさまざまな状況や直面したであろう問題をいかに正しく把握できるかにかかっているのである。ここが間違っていたら，正しい推測を導くことはできない。したがって，考古学の立場から，彼らの推測や問題設定が，実際の考古学的データに照らして妥当なものかどうかを検証することが必要となるのである。

上で述べたように，適応と認知の問題は，学際的な課題として非常に注目を集めている。言い換えれば，この問題は学際的なアプローチによってのみ明らかにされうる問題であるとも言えよう。そこで考古学も重要な役割を果たす立場にあるといえる。しかし，現時点では考古学と進化心理学をはじめとする諸分野の間に十分な連携があるとはいいがたい。その問題点は，ミズンも指摘している。すなわち，考古学的にすでにデータが得られているにもかかわらず，それに反するような説が堂々と提示されていたりするのである。

実際にどのような過程で人類の認知が進化してきたのかは，考古学的データを抜きにして語ることはできない。それでは，これまで述べてきたような進化心理学の成果をふまえた上で，考古学的な資料に基づいて人類の認知進化の過程を復元するとどのようになるのか。ミズンが提示した認知進化に関するモデルは，真に学際的な性格を備えたものとして評価される。それは，認知心理学の成果として出てきたモジュール理論と，考古資料の様相をともに踏まえたものである。以下にそのモデルを中心にして，認知考古学からみた人類の認知進化の問題についてみてみよう。

6　ヒトの認知発達

現在，現代人の祖先は 20～10 万年前のアフリカで誕生し，そこから徐々に他の種類のヒトにとってかわりながら世界中に拡散したとするのが有力な仮説である。このような拡散を可能にしたのは，肉体的な強さの差異ではなく，現代人の祖先は環境利用がよりうまく，厳しい環境にもより適応でき，よりフレキシブルな社会行動ができたからであると考えられる。これは，その他の種類のヒトとは根本的に異なるやり方で物質文化を利用できたことに一部起因するであろう。つまり，物質文化の利用によって，社会・自然環境との相互関係を能動的に構築することが可能になったことがそれまでより有意に有利な環境適応につながったといえよう。この新しい適応の仕方は，単に，あるグループがそれまで気づかなかったやり方を発見したというより，言語能力および創造的知能においてより発達したヒトが登場したことによるとする説が有力である。

過去の人類がどのように思考していたかを知る方法として，これまで次のようなものがある。ひとつは，人類の認知発達を，現代人の個体の認知発達と重ね合わせて考えるものである。この方法においては，ピアジェなどの発達心理学の理論を援用して過去の人類の認知能力について推察する。つまり，旧石器時代人の認知は現代人の子供の認知と比較されるのである。ふたつ目は，比較心理学に注目して，現生類人猿の認知能力を参考にして初期人類の認知能力を推定しようとするものである。三つ目は，先にあげた進化心理学や認知心理学の成果を統合した，認知考古学の③の分野である。

従来は，ひとつめの発達心理学を援用する研究が主流であった。その例としては，国内では上野佳也によるものがある（上野，1985）。海外では，トマス・ウィンが，アシュール型握斧の製作に必要とされる認知能力から，ピアジェの理論を引用して，その製作者は現代人と変わらぬ認知能力をもっていたと推定した研究が有名である（Wynn, 1979）。

ピアジェの理論においては，心はコンピューターのようなもので，少数の汎用プログラムによって一連の発達段階を通過するものとしてとらえられている。この発達段階は 12 歳ごろに，形式的操作知能が可能となる最終段階に達する。これは仮設的な対象や事象について考えることが可能となることを意味する。握斧の製作には，左右対称などの抽象的な概念操作が不可欠であることから，それらを製作したひとびとはピアジェの理論における認知発達の最終段階に達しており，すなわち現代人の成人と同じような心をもっていた，と結論付けたわけである。

このような考え方は，「個体発生は系統発生を繰り返す」という理念を基礎としている。この理念が果たして人類の認知発達について当てはまるかどうかは疑問があるところである。それに加えて，考古学的な状況から見てもこの説には疑問が残る。もしも，左右対称の握斧を作ることができた人々が現代人と同じ心をもっていたのだとしたら，彼ら・彼女らがいた数十万年もの長い間劇的な文化変化がみられず，ホモ・サピエンス・サピエンス登場以降に劇的な変化がおきたのはなぜなのか，という問題である。ことに，約 3 万年前の創造的爆発と呼ばれるような，洞窟壁画や動産芸術の創出は，認知的基盤そのものに変化が起きていたことによると考えるほうが適切であろう（Mithen, 1999）。

ミズンも述べているように，ウィンによるピアジェ理論の使い方に論理上の問題はない。したがって，その結果が考古学的データとそぐわないとすれば，少なくとも人類の認知発達に関してはピアジェの理論は間違っているということになる（ibid.）。それでは，どこがまちがっているのだろうか。

7　初期人類の心

ネアンデルタール人が習得していたルヴァロワ技法が非常に高度なものであることは，旧石器研究者にはよく知られている。その技法は，機械的に一定の規則に従っているだけではだめで，対象が変化していく様子を絶えず注視し，視覚的・聴覚的な手がかりにしたがって自分の見通しを調整しつづけなくてはならない。そのためには，いわゆる精神的範型の存在と，フレキシブルな判断力の存在が不可欠である。この点から見ると，ウィンが考えたように，石器製作という場面においては現代人と同等の技術的知能があることは間違いないと思われる。しかし，ネアンデルタール人以前の初期人類が残した考古学的な資料からは，彼ら・彼女らが現代人と同じ知能をもっていたとすると，どうにも理解できな

い謎があるとミズンは指摘する。それは次の４点である。

1）牙・骨を道具の原材料として使わなかったのはなぜか
2）目的ごとに分化した道具をつくらなかったのはなぜか
3）複数の部品からなる道具を作らなかったのはなぜか
4）時代や場所によって石器にあまり大きな変化がみられないのはなぜか

(Mithen, 1996)

骨角器は，後期旧石器時代以降はかなり普遍的にみられるものであり，発見が依存状況に左右されることを考慮しても，それ以前に確実な例が見出せないのは不思議であるとミズンは指摘する。その他の点についても，後期旧石器時代以降はごく当たり前にみられる状況であり，基本的な知能のあり方に違いがないとすると，それがホモ・サピエンス・サピエンス以外の人類においてみられないことは不思議である。

さらに不思議なのは，石器製作技術からみると非常に高度な知能をもっており，また狩猟採集によって生活していく上では，動植物などの自然資源に関する高度な博物学的知能も持っていたはずであるのに，全体としてみたときに現代人と大きく違っているようにみえることである。

初期人類においては，社会的知能もかなり発達していたことが推測される。それは，ゴリラなどの類人猿においても高度な社会的知能がみられるからである。身近に生えている植物を主食とするゴリラの生態においては食料獲得に高度な知能は必要ではない。ゴリラの発達した脳は，主として社会関係の問題処理に使われていると考えられている。大型類人猿の生物学的な成功の鍵を握っているのは社会的知能であり，他者の心の動きを察知して巧みな社会交渉を行う彼らは天性の心理学者であるとニコラス・ハンフリーは指摘している（ハンフリー，1993)。ロビン・ダンバーは，人間以外の霊長類においては脳の大きさと平均的な集団の大きさとの間に強い相関関係があることを見出した。その相関値にもとづいて初期人類の脳容量から集団の規模を推定すると，

ホモ・エレクトゥス：平均 111 人
古代型ホモ・サピエンス：平均 131 人
ネアンデルタール人：平均 144 人

となる（Mithen, 1996)。これはダンバーが「認知集団」と呼ぶもので，実際に生活を共にしている集団というより，社会的知識をもちうる相手の数を表している。それにしても，この推定値は考古学的に復元される集団規模とは矛盾しているように思われる。社会的知能に関連する考古学的な謎として，ミズンは次の 4 点をあげている。

5）遺跡が小さな集団を暗示しているのはなぜか
6）遺跡における人工物の分布（石器製作や屠殺の痕跡）に明確な空間的構造がみられず，社会的相互作用に限界があったことをしめしているのはなぜか
7）個人的な装飾品がないのはなぜか
8）儀礼を伴う埋葬の証拠がないのはなぜか

8　新しい認知モデルによる解答

以上のような謎に対して，新しい認知モデルを導入してひとつの仮説を出したのがミズンである。ミズンが提示する人類の認知進化の過程は，認知心理学の成果と考古学的データの分析の統合から生まれた独創的なものである（Mithen, 1993, 1996, 1999）。ミズンの著書はすでに日本語訳も出版されているので（ミズン，1998），ここでその内容を詳細に繰り返す必要はないが，要点を簡単にまとめておきたい。

ミズンの説は，ヒトの心は汎用プログラムで動くコンピューターのようなものではなく，個々の問題解決のために特殊に発達したモジュールから構成されているというモデルに依拠している。現代人においても，情報処理の仕方に領域固有性があることは，さまざまな心理学的実験や，脳の物理的・生理的な障害による多くの臨床例から明らかにされている。しかし，現代人において認知的モジュールの存在や領域固有性と呼ばれるものが見出されるのは，そうした特殊な状況においてものみであり，日常生活の中で感じることはない。このような現代人の心に関する研究成果から，ミズンは逆に初期人類の心の構造について推定したのである。それは，現代人においてはもはや痕跡的なかたちでしか残っていない認知的モジュールが，以前はよりはっきりと分離していたのではないか，という可能性である（図２）。すなわち，石器製作に関わる技術的知能と，狩猟採集活動に関わる博物的知能という二つのモジュールの間に相互の円滑な交流を妨げる障壁が存在したとしたら，上であげた４つの謎は説明できるというのである。

１）については，もとは動物の一部である骨や牙は博物的知能の領域に属するため，道具の製作という技術的知能の領域の間に障壁があり，それらを素材として使うことを思いつけなかった，と考えられる。この仮説が正しいとすると，石器と骨角器は本来別々の認知的領域に属していることになり，両者の動態の違いなどを考える上で新しい視点を提供してくれる。

２）についても，狩猟対象の違いなど，博物的知能領域に属する問題に即して異なる形態の石器を作るということは，やはり技術的知能と博物的知能の統合が必要である。この領域を越えた統合ができないと，道具製作と狩猟の領域境界での活動は一般知能が担当することになり，高度な操作は難しくなる。３）についても同様に，動物に関する領域と人工物に関する領域の間の垣根を越えた流動的で自由な思考ができなければ，２，３個より多い部品からなる道具が作られる可能性は低い。４）にみられるように技術体系が保守的なのも，環境への適応行動（博物的知能）が技術的知能と結びつかなかったか

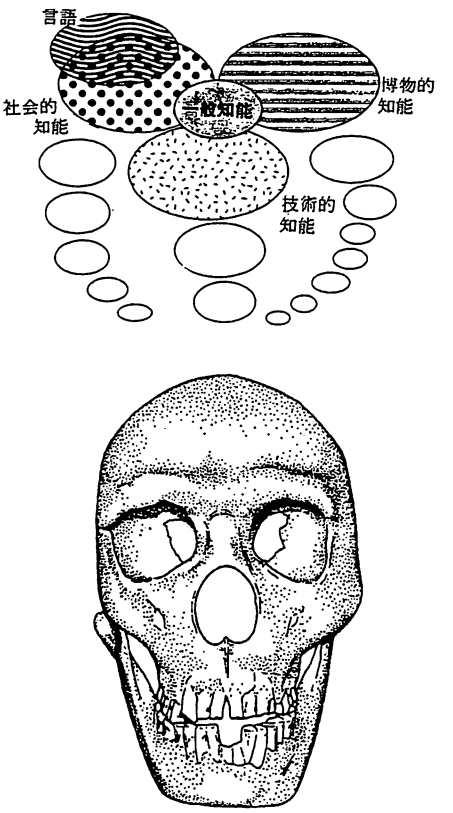


図２　ネアンデルタール人の心
ミズン（1998）188頁より

図３　初期人類（左）と現代人類（右）の空間行動の比較
ミズン（1998）181 頁より

らであると考えることができる。

５）から８）が謎に見えるのも，初期人類の心を自分たちの心と同じように考えてしまうからである。社会的知能と技術的知能の間に流動性がなかったと仮定すると，上であげたような状況は理解することができる。現代の狩猟採集民は，火を囲みながら，おしゃべりをして情報交換をしながら道具を作ったり，獲物を解体・分配したりする。しかし，こうした私たちにとっては当たり前の行動は，社会的知能と技術的知能との密接な連携を必要とするものである。これらの間に障壁があった初期人類においては，石器作りと社会的コミュニケーションは同時に行われることがなく，別々の場所で行われていたと考えられる（図３）。そうすると，それぞれの行為が残す遺跡の規模は大きくならず，空間的構造も形成されない。個人的な装身具は，社会的情報を伝達するための物質文化の利用であり，社会的知能と技術的あるいは博物的知能との統合が必要である。これはいわゆる物質文化においてスタイル，様式，型式などの存在理由の根幹に関わる点である。

ミズンが示す人類の認知発達の過程は次のようなものである（図４）。1000 万年前，つまり人類の祖先が他の類人猿と分岐する以前には，それほどモジュールの孤立がみられない一般的な知能が発達していた。一般化の度合いで言えば，現代人とチン

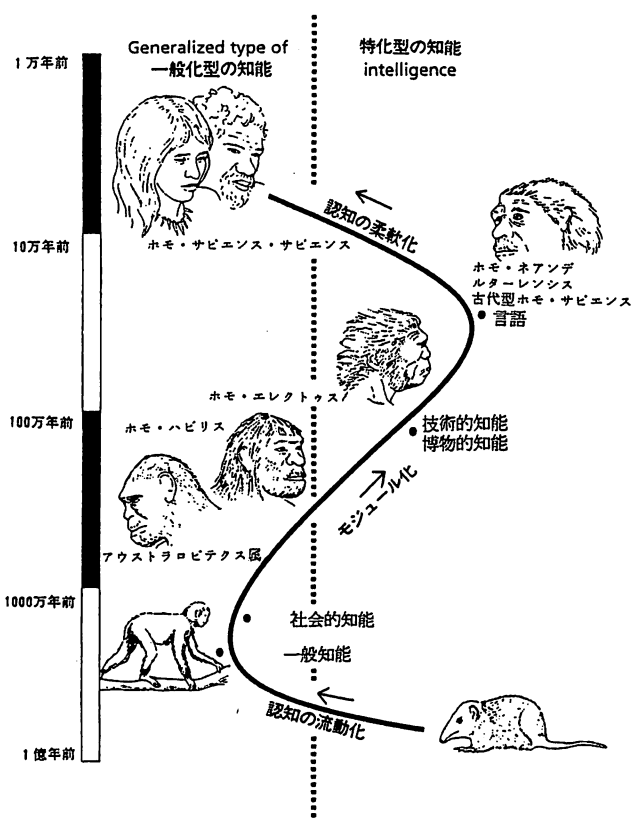


図４　認知進化の過程
ミズン（1998）279 頁より

パンジーはよく似ているのである。その後，ホモ属の進化の過程で知能はモジュール化し，特化の方向を強める。そして，ホモ・サピエンス・サピエンスにいたって，再びモジュール間に流動性が生じ，一般化型の知能となるのである。

ミズンは，コンピューターのプログラムを例にあげて，このような発達の仕方がおそらく最も効果的であることを示し，それが自然選択という意図をもたないプログラマーによって築かれたのだと考えている。

9　言語と人工物の役割

領域間の流動性を促したきっかけとして，もともと社会的知能に包摂された形で発達してきた言語の役割が大きかったと考えられている。社会的な言語の中に徐々に非社会的な情報に関わる「余談的」な言語が介入し，言語をとおして非社会的知識が社会的知能の中に乗り入れてくる。そうして長い間一つの領域として独立していた社会的知能が他の領域の知識を含みこむかたちで発達したというわけである。それは結果として認知的流動性を増し，ついにはほとんど領域間の障壁を取り払うことになったのである。ここには，社会的言語から汎用言語へ，という言語の性質の変化が想定されている。

また，人工物も認知的流動化の過程を促進したものと考えられる（Mithen, 1998）。領域間の流動性が高まると，人工物は単なる実用的な道具から，さまざまな社会的意味を帯びたものとして製作・使用されるようになる。そのような人工物とヒトの認知の間にはポジティブなフィードバックが生じる。人工物は，情報を蓄える手段として，進化的基盤のない考えをつなぎとめておくものとして，そして多常に再解釈されることを必要とするものとして，ヒトの認知活動を刺激し，爆発的な認知発達を促したと考えられる。

このような要因によって達成された認知的流動性のもとで，芸術，宗教，科学などの文化が多様なかたちで開花することになったと考えられるのである（図５）。

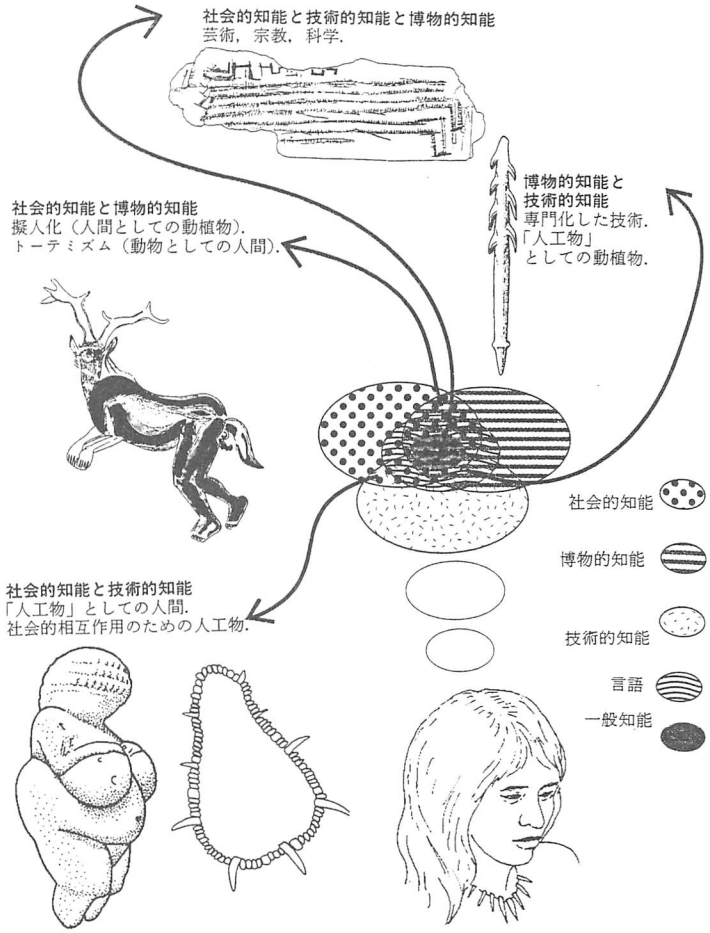


図５　認知的流動性と文化の開花
ミズン（1998）235頁より

10　問題点と可能性

以上，人類の認知進化の問題について，認知考古学的にどのような成果がでているかをみてきた。これが現時点でのひとつの達成点であることを踏まえた上で問題点や一般的な認知考古学との関わり，今後の展望について触れておきたい。

ミズン説は今のところ他分野の理論と考古学的なデータに適合していると思われるひとつの仮説に過ぎない。一般化型知能と特化型知能の間を揺れ動く認知進化のモデルは魅力的であるが，これを直接確認することは難しい。現在生き残っている現世人類もチンパンジーも一般化型知能の持ち主であり，特化型知能をもっていたと想定される初期人類はすでに絶滅してしまっているからである。また，ミズンが示した考古資料の謎ときが，世界各地で現在みつかっている，またこれから発見される資料とうまく適合するかどうか，さらに検証していくことも必要であろう。ミズンが用いているモジュール理論は，基本的にはひろく承認されているものであるが，一方でモジュール概念を乱用する傾向に対しては批判的意見もみられる。

進化心理学的なモデルについても，西洋近代文明の視点に制約されているかもしれないという危惧はある。また，その基本的な視点を認めるとしても，現代人の抱えるさまざまな問題のすべてが，洪積世の適応状況から説明できるとは考えられない。ものごとを必要以上に単純化するのは危険である。

こうした問題点を抱えているとはいえ，認知進化に関する諸研究は，学際的研究の有効性と，適応・進化・文化といった現象について記述・分析するのに適した概念であることを示している。より一般的な認知考古学の今後の方向性に対しても，多くの示唆を与えてくれる。考古学と認知科学の最新の成果が相互に対応し，新たな理解につながるような関係を，型式学や物質文化に関わる情報伝達のような問題に関しても築いていきたいものである。

認知進化の問題は，一般的な認知考古学にとっても重要である。これまで他で指摘してきたように（松本，1997），考古資料から過去の人々の認知に対して論及する場合には，なんらかの普遍的認知構造を措定する必要がある。たとえば，物質文化におけるスタイルによって，自己や所属集団のアイデンティティーを表示するということは，他者との比較・差異の認識によって自己を同定するという人間の普遍的な認知システムに基盤があるとポリー・ウィスナーは論じている。このような認知考古学的に重要な認知的基盤がどのようにして発達してきたのか，いつからみられるようになるのか，という問題に，認知進化のプロセスを考えることで解答を与えていくことができるからである。

スキーマ理論の有効性については他で述べてきたが（松本，1997，2000）スキーマというのは，異なる領域にまたがって形成されるものである。たとえば，「葬送儀礼」というスキーマには，儀礼用の土器作り（技術的知能），誰のために，誰と共に行うか（社会的知能）などが含まれる。ミズンの説に従えば，このような複数領域にまたがるようなスキーマは，ホモ・サピエンス・サピエンス以外の人類に対しては想定できないということになる。ただし，石器作りのスキーマや狩のスキーマなど，ひとつの領域におさまるようなスキーマは存在していたと考えられる。

他者の心のうちを推察する能力，「心の理論モジュール」は，人類が長い進化の過程で発

達させてきたものである。なんとかして，時間的にも遠くへだたったヒトの心にも手が届くような，新しい心の理論を開発していきたいものである。認知をめぐる活発な学際的研究のなかで，物質文化に焦点を当てるというユニークな特性をもつ考古学が今後果たすべき役割は大きい。

引用文献

上野佳也、1985　『こころの考古学―猿人からの心性の進化―』海鳴社　東京

ハンフリー，ニコラス　1993　『内なる目　―意識の進化論―』垂水雄二訳　紀伊國屋書店　東京

松本直子　1997　「認知考古学の理論的基盤」『HOMINIDS』vol. 1　3-20 頁

松本直子　2000『認知考古学の理論と実践的研究　―縄文から弥生への社会・文化変化のプロセス―』九州大学出版会　福岡

ミズン，スティーヴン　1998　『心の先史時代』松浦俊輔・牧野美佐緒訳　青土社　東京

Cosmides, L. and J. Tooby 1992. Cognitive adaptations for social exchange. In J. H. Barkow, L. Cosmides, and J. Tooby (eds.) The Adapted Mind: Evolutionary Psychology and the Generation of Culture, pp. 19-136. Oxford University Press, New York and Oxford.

Mithen, S. 1993. From domain-specific to generalized intelligence: a cognitive interpretation of the Middle/Upper Palaeolithic transition. In C. Renfrew and E. Zubrow (eds.) The Ancient Mind, pp. 29-39. Cambridge University Press, Cambridge.

Mithen, S.　1996. The Prehistory of the Mind: A Search for the Origins of Art, Science and Religion. Thames and Hudson, London and New York.

Mithen, S.　1999. A creative explosion? Theory of mind, language and the disembodied mind of the Upper Palaeolithic. In S. Mithen (ed.) Creativity in Human Evolution and Prehistory, pp.165-91. Routledge, London.

Tooby, J. and L. Cosmides 1992. The psychological foundation of culture. In J. H. Barkow, L. Cosmides, and J. Tooby (eds.) The Adapted Mind: Evolutionary Psychology and the Generation of Culture, pp. 19-136. Oxford University Press, New York and Oxford.

Wilson, R. A. and F. C. Keil (eds.)　1999. The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences. MIT Press, London.

Wynn, T.　1979　The intelligence of later Acheulian Hominids. Man, 14.

石器研究と認知考古学

桜井　準也

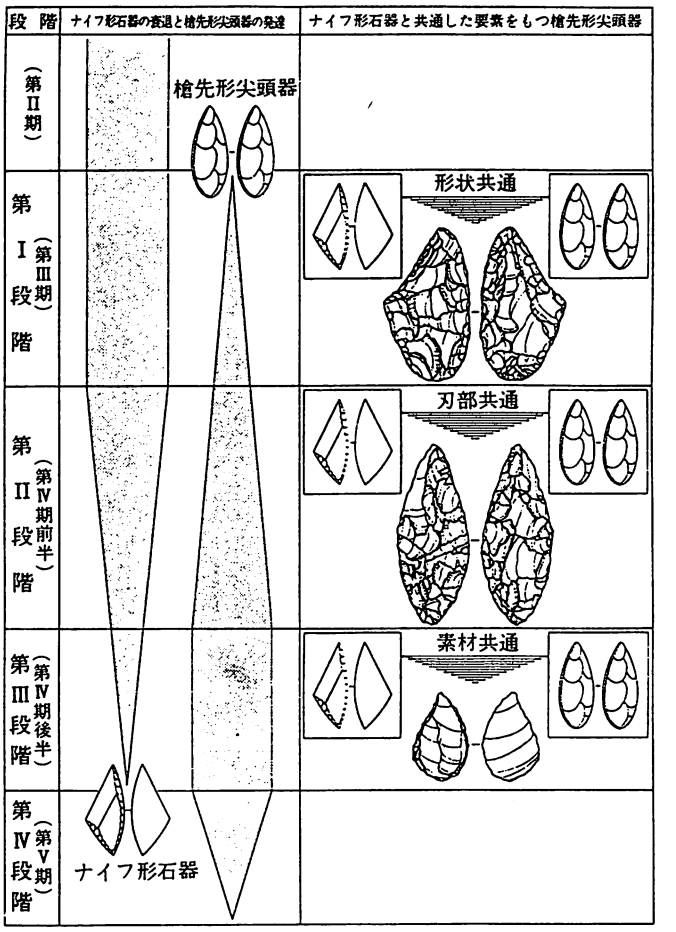
1　はじめに

認知考古学 cognitive archaeology は、欧米において長い間評価されることはなく、積極的に評価されるようになったのは比較的近年のことである（Flannery and Marcus 1993）。考古学研究において認知的側面が無視されてきた理由として、人類と周辺環境相互の関係を無視する環境決定論者や進化論的パースペクティブの存在、民族誌にみられるような認知過程の多様性や復元の難しさなどがあげられているが（Van Der Leeuw 1994:p135）、90 年代になってようやく認知考古学が受け入れられる土壌ができたようである。これに対し、わが国において認知考古学は、80 年代の上野佳也（上野 1980・1983・1985・1986）の先駆的な研究の後、90 年代には松本直子（松本 1996・1997・2000a）や中園 聡（中園 1994）による縄文時代～弥生時代の土器を対象とした実践的研究が進められ、現在日本考古学における新たな潮流となっている。ただし、松本らの研究は土器を中心としたものであり、石器を対象として認知考古学的アプローチを試みた研究例はほとんどないのが現状である。本発表では、石器研究と認知考古学の接点を探り、従来の固定化した技術論や型式・形態論とは異なる認知考古学的な視点で行われる石器研究の可能性を模索するため、具体的に幾つかの方向性を提示してみたい。

2　石器研究と認知考古学

（1）石器の色と形態認識

石器を認識するうえでまず第一に重要な要素となるのは素材となる石材の色の問題であろう[1]。認知心理学では、モノを分類する課題において、年齢とともに「色」から「形」そして「機能」へと選好性が変化するという（Cole and Scribner 1974）。Greenfield は、セネガルの農村部の Wolof 族の子どもたち（伝統的社会に住む通学経験のない子供および大人、同じ村に住む学童、首都ダカールに住む学童の３グループ）に「色」・「形」・「機能」を同時に示す数組の絵をはったカードを用意し、どれがいちばん似ているかとその理由を尋ねた。その結果、全体的に色に対する選好性は学年とともに急速に減り、形や機能への選好性が増加し、年長児になるにつれて多くの子どもが機能による自分の分類の正当性を示した。これに対し、伝統的社会に住んでいる通学経験のない子どもたちは年齢があがるにつれ「色」に対する選好性をますます強くした。このことは西洋的学校教育によって徐々に選好性が変化しているのに対し、教育を受けない子供は認知的発達が早い時期にストップしてしまうことを意味している。この調査結果は、我々とは異なり、過去の人々の色に対する選好性が高かったことを想像させ興味深い。旧石器時代の場合、石器に適した石材



第１図　槍先形尖頭器とナイフ形石器の相関関係（安蒜 1988）

が限定されるため一概にはいえないが、多様な石材を用いる縄文時代の場合は東北地方の異形石器の多くに「赤い石」が使用されたり、「緑色の硬い石」である翡翠が縄文人に好まれていたことは周知の事実である。利用石材の偏在性による制約、表面の風化、分類基準の設定法など困難な点は多いが、石器の色の問題は今後認知考古学的に検討される必要がある。

次に、石器の形態認識の問題については、石器の形態的特徴を引き出しながら製作者の認知構造を読みとるという極めて難しい作業を行うことになる。その理由として石器の場合は技術能力や使用石材による制約、さらには製作時のアクシデントを伴うものであることがあげられる。

ここでは、安蒜政雄（安蒜 1988）が示した後期旧石器時代のナイフ形石器と槍先形尖頭器の関係に関する仮説について検討してみたい。安蒜は中部地方で発生した槍先形尖頭器が南関東地方に波及していったことを前提に、相模野台地や武蔵野台地においてナイフ形石器が徐々に衰退してゆき槍先形尖頭器が発達してゆく過程で、段階ごとにナイフ形石器と「形状共通」、「刃部共通」、「素材共通」という共通要素をもっている槍先形尖頭器が存在するとしている（第１図）。つまり、各段階には両者の中間的（折衷的）な資料が存在しており、第Ⅰ段階では平面形態はナイフ形石器でありながら加工は尖頭器という資料、第Ⅱ段階では平面形態および加工は尖頭器でありながら刃部はナイフ形石器を模した資料、第Ⅲ段階ではナイフ形石器と共通素材の槍先形尖頭器が存在するという訳である。仮にこの図式が正しいとすると次のような解釈が可能である。まず、ナイフ形石器と槍先形尖頭

器が一定の形態イメージをもって互いに独立して意識され、互いに影響しあっている。次に、ナイフ形石器に対して数が少なく、マイナーな存在であった第Ⅰ段階の槍先形尖頭器の一部にナイフ形石器の形状に合わせた資料が現れる。槍先形尖頭器の割合が徐々に増してゆく第Ⅱ段階では槍先形尖頭器の一部がナイフ形石器の部分形状である刃部形状を模した資料が現れる。第Ⅰ段階では、マイナーな存在である槍先形尖頭器に対してナイフ形石器の影響が看取され、ナイフ形石器の影響力が低下してくる第Ⅱ段階では刃部のみにその影響が及んでいる。さらに、槍先形尖頭器が主体となってくる第Ⅲ段階では両者の立場が逆転して、ナイフ形石器に使用される素材に加工が加えられ、槍先形尖頭器の全体形状を模した資料が現れる結果となっている。つまり、その時期に主体となる器種に対して客体的な存在であり機能的に重なってくる部分をもつ器種の一部に両者の要素を併せもつ中間的な資料が生じているということをしめしている。このような資料が生じた心理的要因としては、石器製作者が石器を製作しているときに、頻繁に製作している器種の形態イメージや慣習行動が無意識に表出してこのような中間的資料が生まれた可能性を指摘できる。

このように、石器研究者が発掘資料のみから石器の形態認識のあり方を探ることは多くの前提や解釈を伴うなど困難な点が多いが、その実態がいかなるものであったかは民族考古学的調査によって垣間見ることができる。ニューギニア高地で調査を行った White と Thomas（White and Thomas 1972）は、そこで製作される石器について、製作者個人のバリエーション、同じ社会のメンバーでのバリエーション、同じ言語を話す二つのグループ間のバリエーションという三つの観点から分析を試みている。その結果、彼らの石器の分類基準は、大きさが第一で、次に形態が重要視され、特別の場合のみ刃部角が分類基準に含まれるという。この基準は採集した石器について６つの属性（長さ・幅・厚さ・刃角・重さ・長幅比）を用いて行った主成分分析の分析結果でも示された。また、製作者間のバリエーションについては、個人によってかなりのバリエーションがあること、刃部角が日を追うにつれて鈍角になってきたり、循環的に変化するなど製作日による差異がみられるという結果が得られている。White と Thomas は大きさが石器分類を行う重要な要素として働いており、それが Duna 族の型式概念や範型の基礎となっているとしている。

同様な調査として、Wiessner によって行われたアフリカでの調査事例がある（Wiessner 1984）。Wiessner はボツワナの San 語族の鏃に注目し、計測値（長さ・幅・長幅比）や細部形態（先端の形態・身の形態・基部の形態）について、個人レベル・バンドレベル・バンド群レベル・言語集団レベルの４つレベルでグループ間でどのような差がみられるか調査している。その結果、個人レベルでは!Kung の５人の中で技術的に優れているＡの製作品は、劣っているＥに比べ大きさの変異が少なく、左右対称に作られている。バンドレベルでは統計的に有意な差はみられないものの、バンド群レベルでは身の形態に差が認められ、言語集団レベルでは鏃の大きさや幅・長幅比・先端幅・先端の形態・基部の形態について統計的に有意差がみられることがわかった。出来具合を判断する基準は、左右対称の度合、矢の各構成部分の長さ、仕上げの細部、着柄時の結び方、柄の装飾、身の形態、基部の形態、大きさ、側面観などであった。また、彼らは同時に複数の鏃を製作する場合は同じ鏃を作ろうと意識するが、以前に作った鏃の形は忘れており、一定のスタイルを維持しようという意図はみられないが、バンド群レベルでは他の集団の鏃を判別している。Wiessner は、San 語族の鏃は一定のスタイルを維持しようという意図はないものの、言語

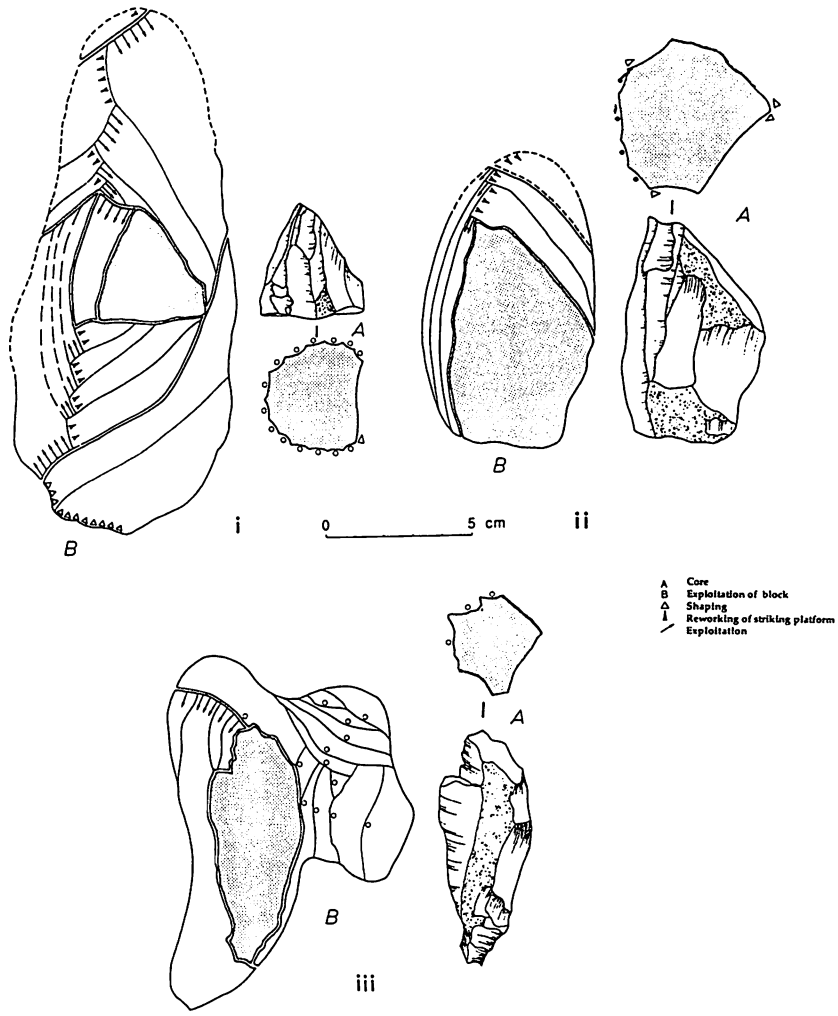
集団間やバンド群間で機能する象徴的スタイル（emblemic style）と個人間で機能する独断的スタイル（assertive style）によって規定されるとしている。

このような成果は旧石器時代や縄文時代の石器の形態認識のあり方を考える上で大いに参考になるものである。しかし、いくら細かな計測を行い複雑な統計処理をしたとしても設定した項目自体が彼らの判断基準と同じとは限らず、我々自身が持っている近代的認知体系を前提としたものであることは大きな問題である[2]。

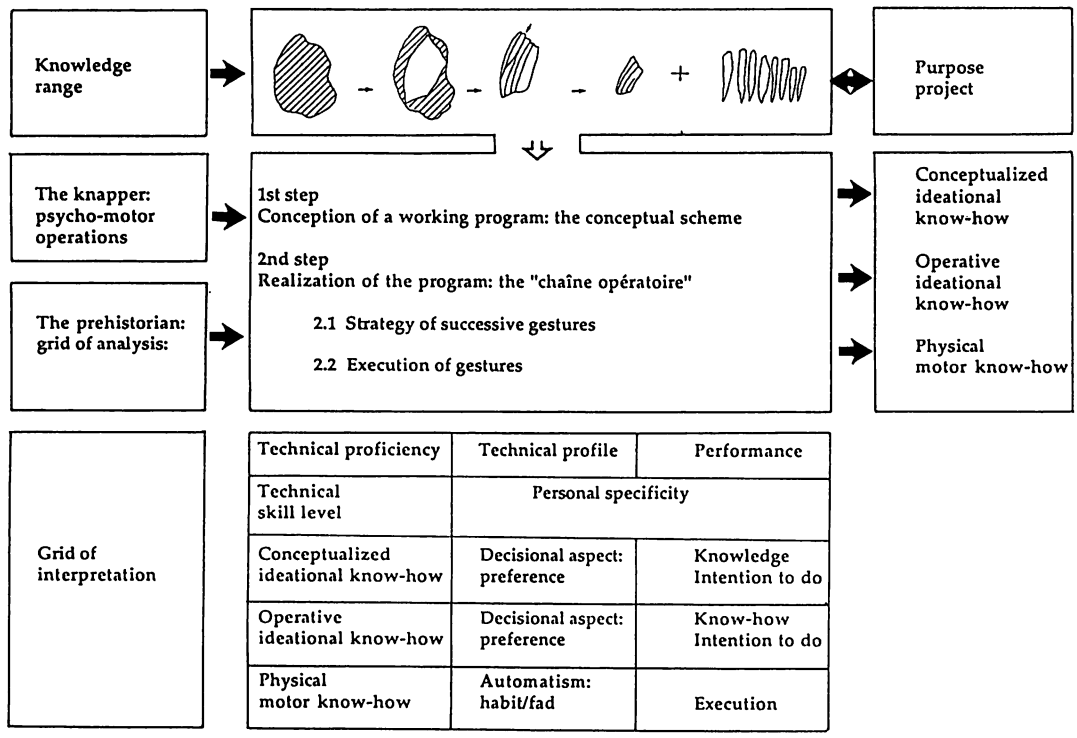
（2）石器製作と認知構造

従来の石器の形態学的な研究成果に対し、近年では石器製作過程には抽象化、予想、問題解決過程、モデル構築といった知的作業が介在するとされている。そして、土器製作や石器製作における認知構造に関する研究は、技法や手順などのシステムを復元するだけでなく製作過程を詳細に検討することにより移動方向や動作を復元することが前提となる。その中核的役割を演じているのがモーター・ハビット motor habit[3]や動作連鎖 chaine operatoire[4]という概念である。このうち、モーター・ハビットは、動作の繰り返しによって習得される無意識的な筋運動パターンである。中園 聡は弥生時代開始期の土器の分析に際しこの概念を用いている（中園 1994）。また、後藤 明は、物質文化スタイルと人間行動の間には、人間の心理や認知構造、個人や社会の意識レベルなど様々な側面や次元があり、土器などの人工物の製作に技術的制約、社会的・個人的アイデンティティーとともにモーター・ハビットを要因としてあげている（後藤 1997）。動作連鎖は石器製作技術研究において頻繁に使用される概念であり、西秋良宏により紹介されている（西秋 1998）。西秋によれば、Leroi-Gourhan によって導入されたこの考え方は、原石採取から石器の製作や使用・廃棄にいたる一連の動作によって構成され、石器を分析する際には個々の遺物がどの動作に由来しているか鑑定し、動作連鎖の再構築を試みるとしている。そして、その動作を規定する文化的・経済的要因などの考察を行うことになる。この考え方のもととなったのが Mauss による身体技法に関して研究である（Mauss 1968）[5]。Mauss は人類学を社会形態学・生理学・一般現象の研究の領域に区分し、社会形態学の中には技法、美学、経済現象、法現象、道徳・宗教現象が含まれるとしている。そして、技法については従来の道具技法に加えて身体技法を提示し、技法を人間の特徴を示す記号であると重要視している。また、身体はある「場」において、身体化された様々な情報を諸構造の中で象徴的にある世界を構成するとして、この「場」がいかなるものであるか明らかにすることが背景となる文化や社会、あるいは地域の実体を究明する重要な要素となってくる。その意味で、利き手の問題（桜井 1986、阿部 1988、竹岡 1991）も身体を規制する「場」の存在と関わる重要な問題であろう。

石器製作過程の研究法として Karlin と Julien は‘技術一心理学的 techno-psychological’な方向と‘技術－社会学的 techno-siciological’な方向が存在すると述べている（Karlin and Julien 1994）。このうち、石器製作過程の‘技術一心理学的’なアプローチは、単に動作連鎖を再構築するだけでなく複雑な技術的知識が高度な‘技術的認識 awareness’を必要とすることを意味する。つまり、製作者は考えている技術的方法や理想的な形態イメージに対し、状況に応じて評価しながら自らの動きの調整を行っているのである。そして、適当な結果が得られるための動きはモーター・スキル physical motor



第２図　技術的熟練の３つのレベル（Karlin and Julien 1994）



第３図　Magdalenianの石器製作における動作連鎖の解釈モデル（Karlin and Julien 1994）

skill と位置づけられている。また、製作者の行動は、技術的側面と同様にその意図、概念、拘束、好みを伴うものであり、その認識論的側面は‘概念的活動シェーマ conceptual operative schema’あるいは‘概念的活動戦略 conceptual operative strategy’と呼ばれる。そして、石器製作活動において完全に動作連鎖を観察することができれば概念的活動戦略を引き出すことが可能であり、一定の動作連鎖を観察することにより、石材の獲得から石核の調整、剥片剥離、廃棄といった一連の流れで表現される剥片生産の技術的シェーマを復元することが可能となる。Karlin と Julien は、具体的な事例としてパリ盆地における Magdalenian の石刃生産について検討し、そのバリエーションが技術的熟練のレベルによるものであると述べている。そして、習熟度によって３つのグループに区分できるとしている（第２図）。これらの評価基準として、概念的シェーマの複雑性、動作連鎖の予想、計画と結果の一致が検討されるが、石核の最終形態、石刃の生産の質や生産性も重要な評価基準となっている。レベル１（ｉ）は素材を最大限活用できる動作プログラムを保持している。つまり、実践的経験や知識とともに集中力や素材を評価する能力も持っている。レベル２（ii）はすべての情報や先の見通しを評価する能力に欠けている。打点の移動エラーや欠陥のある素材の使用は早めの石核の廃棄を引き起こしている。レベル３（iii）は知識の欠如、先の見通しのなさ、動きのコントロールの未熟さによって特徴づけられる。このような石器類に観察される様々な痕跡は反応・反映・決定・実行といったサイコ・モーター psycho-motor 運動（精神運動に起因する筋運動）によって理解することができる。また、S.Ploux は Magdalenian の石器製作の事例を用いて、概念的シェーマの段階から動作連鎖（動作戦略から動作の実行）への流れを示すとともに様々な解釈の存在、つまり熟練度、ノウハウ、個人的特異性、好み、癖や気まぐれ、意図[6]の存在が提示している（第３図）。

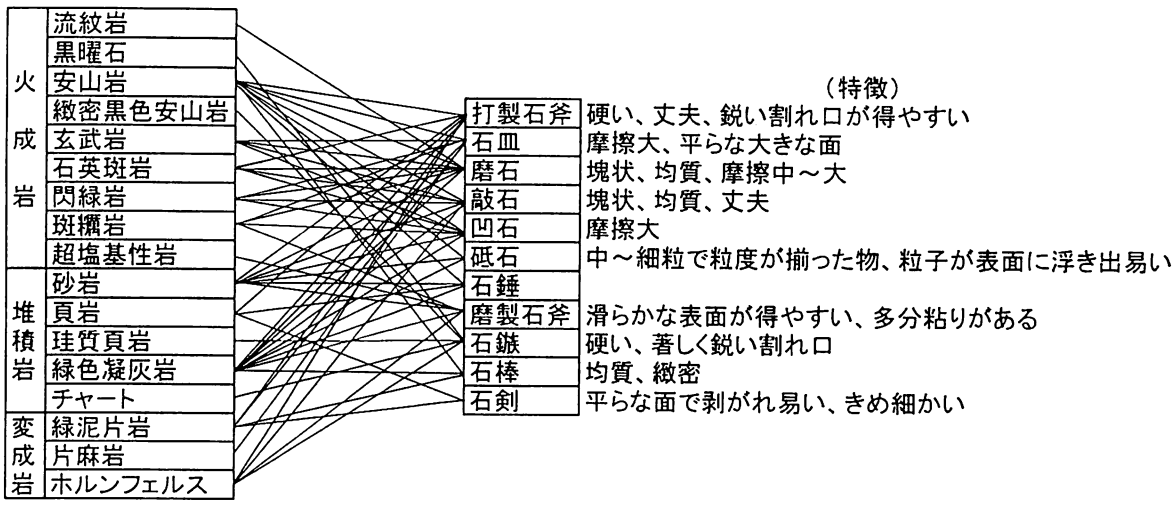
次に、‘技術ー社会学的’アプローチとして Karlin と Julien は、遺跡利用の季節性やテリトリー内における石刃の管理や供給など遺跡の機能に関わる問題を検討している。例えば、Pincevent では多目的で将来的な使用のために規格化された生産物の製作活動と、製作と使用が中断せず技術連鎖の一部として組み込まれている製作活動が存在する。そして、単一のキャンプ地における生産物の流れを観察することによって、製作地から使用地への道具の移動、交易、贈与など生産物の維持管理についての情報が得られる。また、石核の移動や使用状況から生産物の所有は以前考えられていたよりも集団に帰属すると考えられるという。次に、重要な視点として知識や技術的ノウハウは個人的に「見習い期間 apprenticeship」を通じて習得されるという点がある。Pincevent の場合、レベル１およびレベル２の製作者は欠落資料や二次加工資料の存在から石刃が使用目的で選別されたことがわかるが、レベル３の製作者はその痕跡がみられないことから見習い期間の存在が想起される。また、「見習い期間」の存在を暗示する製作場が存在し、技術を習得していないことを示す遺物の分布や熟練者がデモンストレーションしたと解釈できる石核が存在し、そこで教育が行われていた可能性があるという。

このように、人類進化のそれぞれの技術段階における動作連鎖の復元は、石器生産を生じさせた様々な概念やその実現可能性についての議論を可能にしている。例えば、礫器製作の基礎となる概念シェーマは当時の人類の認知能力を反映するものであり、ホモエレクトス段階になると概念シェーマはより複雑になり、革新能力、計画や必要性に沿った基準

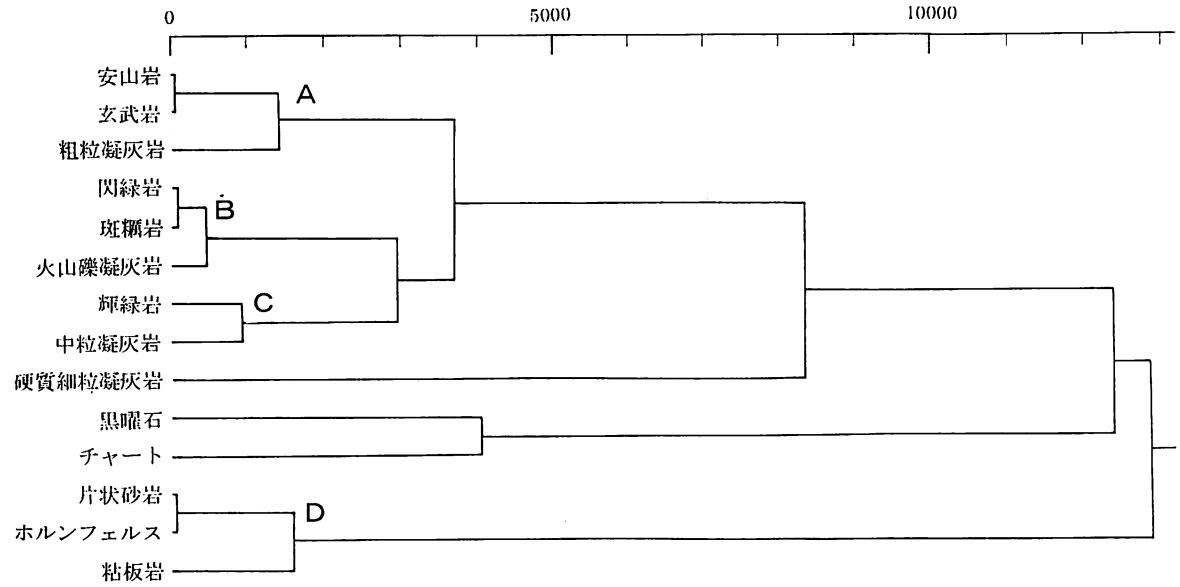
の選択、そして抽象化能力などの概念パターンがより精密なものになっている。その後、石器製作技術は２次元的石核利用（ルバロワ概念）から３次元的石核利用（石刃概念）へといった認知能力の拡大として捉えられ、上部旧石器時代になると‘技術ー社会学的’アプローチによって、石器の在庫管理や余剰生産の問題から季節活動計画や長期計画立案能力の存在が示されている。ただし、このような研究成果が得られるには、石器研究における新たな概念の導入だけでなく、詳細な出土記録や接合作業など地道な調査・研究が前提となることは言うまでもない。

（３）石材分類と認知構造

石器の素材となる石や礫は、現在でも大きさ・性質・用途によって様々な名称で呼ばれ、分類されている。例えば、群馬県鬼石町では一般的に利用している石を大きさで「玉石」(径が 30cm 程度)、「グリ」（にぎり拳大)、「砂利」（径が 3cm 前後）と呼んでおり、砂利より細かい石を「砂」と呼んでいる。また、すじのある石を「トライシ」、河原にあるつやのないやわらかい石を「フケイシ」、硬くて光沢のある石を「生き石」と呼ぶなど石の性質をあらわす名称がつけられ、利用されている（群馬県 1982)。これに対し、旧石器時代や縄文時代の石器の製作・使用者が石材をどのように認識し、分類していたかは、石材獲得の段階から常に付きまとう重要な問題である。既に紹介した Karlin と Julien の論考の中でも、石材の問題は集団の心的表象を示すものとして重要視されており、石材の質による使い分けの存在が指摘されている（Karlin and Julien 1994 : p163)。この問題を解明するためには、まず、石器の素材として選択された石材がどのような性質を持っているかをみてゆく必要がある。第４図は神奈川県王子ノ台遺跡の石器石材の分析結果をもとに、柴田 徹の示した石材分類と縄文時代の器種ごとの石材使用状況や使用石材の特徴を示したものである（柴田 1991)。ここで器種と石材分類との関係をみると、打製石斧・石皿・磨石・敲石・凹石などの器種が岩石の成因による石材分類を越えた複数の石材を使用していること、逆に安山岩・砂岩・緑色凝灰岩が多くの器種に用いられていることがわかる。これは器種ごとの使用石材の特徴に示されるように、それぞれの器種の用途に応じたの性質を持った石材が選ばれていることを示している。この点をより明確に示すため、神奈川県原東遺跡（(財）かながわ考古学財団 2000）の縄文時代中期（加曾利ＥⅢ期）の竪穴住居址から出土した石器群の器種と使用石材の関係についてクラスター分析を行ったものが第５図である[7]。その結果、次のような複数のクラスターが形成された。Ａクラスターは石皿・磨石類に使用される加工が容易で多孔質あるいは表面がザラついている石材、Ｂクラスターは磨石類を中心に石皿や打製石斧などに使用される硬くて重量感があり、表面がザラつく石材、Ｃクラスターは磨石類・打製石斧・磨製石斧に使用される緑色で均質な石材、Ｄクラスターは打製石斧を中心にスクレイパーや石匙にも使用される黒っぽく、硬くて板状に割れやすい石材であると解釈できる。また、クラスターを形成していない黒曜石、チャートは石鏃を中心にスクレイパー・石匙・石錐に使用されるガラス質で鋭く割れる石材であり、硬質細粒凝灰岩は磨製石斧・石皿・打製石斧に使用されている。以上の分析結果をみると、磨石や打製石斧のように複数のクラスターに属する石材適用範囲の広い器種がある一方で使用石材が限定される器種も存在することがわかる。このことは、器種によって使用石材の許容範囲が広いものと限定されるものがあることを示している。また、火成岩・



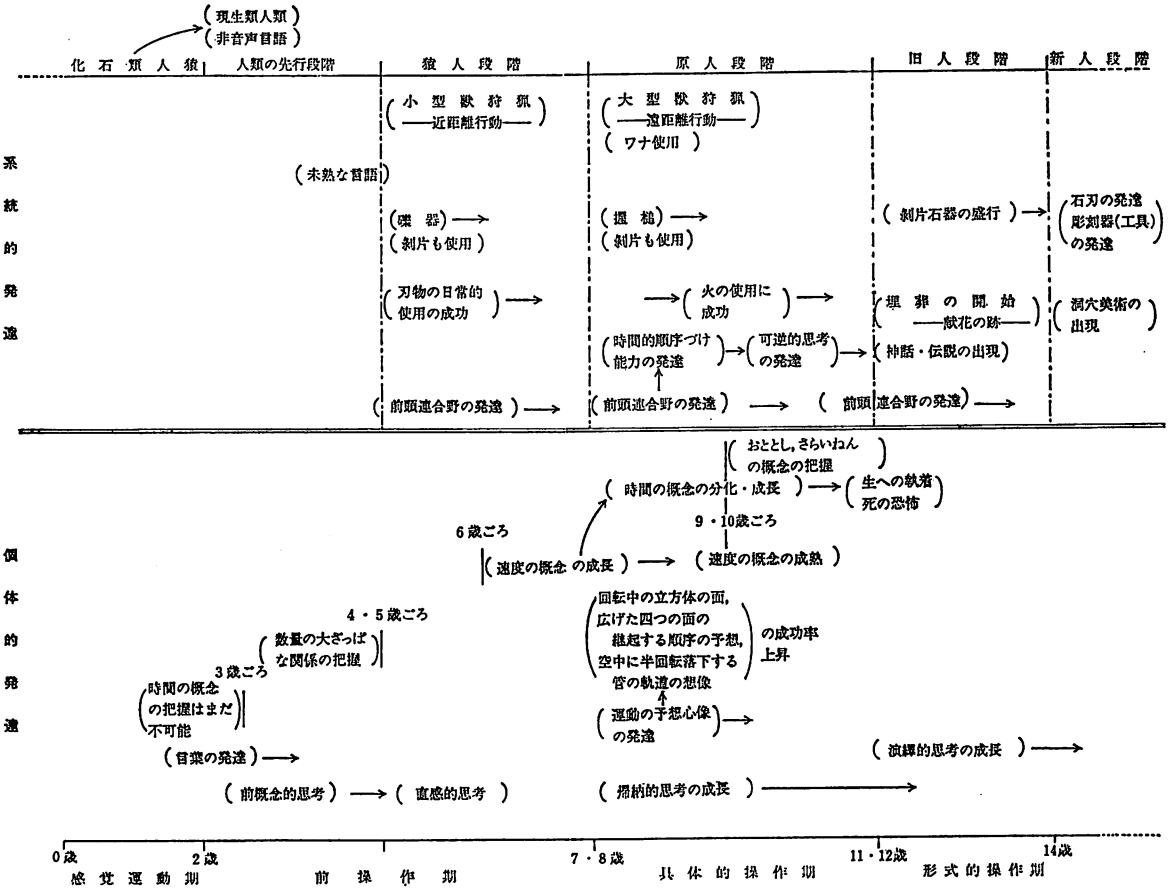
第４図　神奈川県王子ノ台遺跡の石器石材とその特徴（柴田 1991より作成）



第５図　神奈川県原東遺跡の石器石材のクラスター分析の結果

堆積岩・変成岩という岩石学的成因を越えてクラスタリングされる事例がほとんどである点は注目される。

このように、石器の器種によって石材使用に一定の傾向がみられることは、器種によって好まれる石材が存在し、好まれる石材の性質がいかなるものであったか推測することが可能であることを示している。しかし、当然のことながら縄文人は現在行われている科学的な岩石の成因論に基づく石材分類を行っているわけではない。現在の石材分類は石材の供給地を特定するという点では有意義であるが、必ずしも石材の性質（例えば色調・硬さ・重量感・粒度・組織など）がそのまま反映されたものではない。その点を考慮して、最近では石器に頻繁に利用される石材、例えば丹沢山系の凝灰岩などは粒度によって細粒・中粒・粗粒に細分したり、硬さによって硬質や軟質に区分している。いずれにしろ、石材の



第６図　ヒトの心性の系統的発達段階と個体的発達の対応図（上野　1985）

石材鑑定はあくまで岩石学的な成因論に基づくものであり、認知考古学的に石材を分類することとは目的を異にするものである。なお、認知考古学的な石材分類は、民族学における民俗分類（フォーク・タクソノミー folk taxonomy）と関連する研究分野である。しかし、石器の製作・使用者への聞き取り調査が不可能である考古資料を対象とした場合は、特定の名をあたえられ語彙群との関係から民俗分類体系を研究対象とするフォーク・タクソノミーよりもカテゴリー化の過程を対象とするフォーク・カテゴリー folk category（松井 1991）として捉えてゆくべきであろう。

（４）石器研究と発達心理学

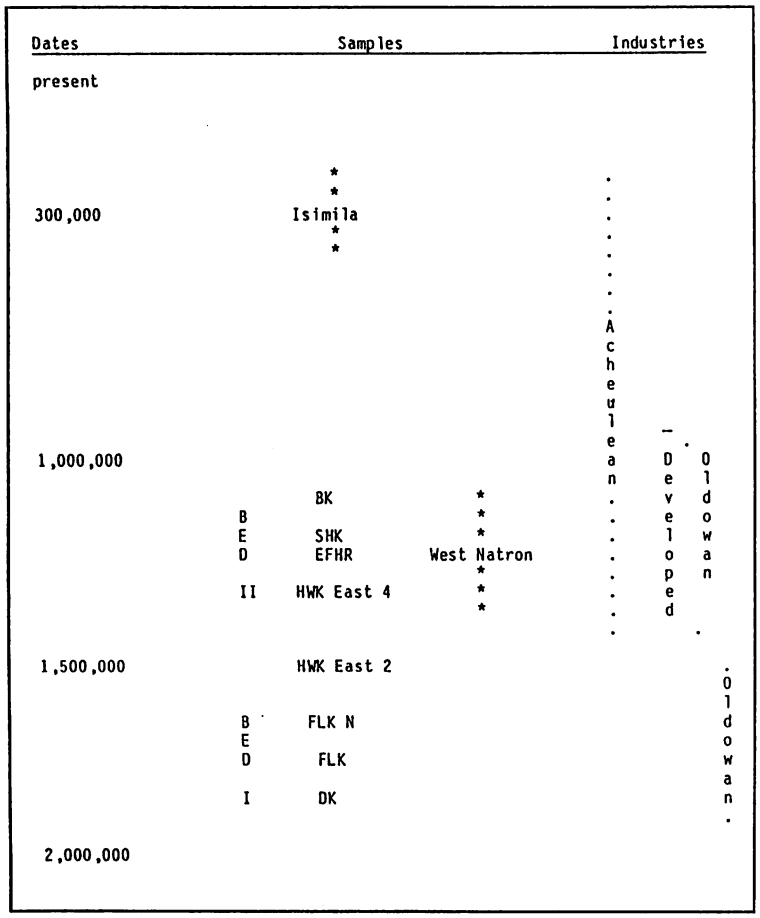
近年の石器研究の中には、石器の変化や製作技術の発展状況を発達心理学の成果を取り入れ比較しながら、認知構造を探ろうという試みが存在する。上野佳也（上野 1985）は、心理学者 J.Piage の理論を援用ながら、ヒトの心性の系統的進化について発達心理学との関係から論じている。そこでは、心像（イメージ）と道具の進化、時間の認識、火の使用、原始美術などについて述べられており、石器の製作や使用という観点でヒトの心性の進化過程を概観している（第６図）。それによると、石器の存在しない猿人直前段階は前操作期の感覚運動的知能の時期（現代人の２歳ぐらいまで）であり、礫器だけでなく小さな石器も用途に応じて作られている猿人段階は前操作期前半の数量の判断の基準が直観的外形だけとらえる段階（現代人の４歳半から５歳まで）を越えて前操作段階後半の段階に入って

くる。次の原人段階ではハンドアックスの製作・使用において回転や裏返しの予想心像が関わっている具体的操作期（現代人の７・８歳以後）に入っていたと想定されている。旧人段階では石器が多様化し、洞察力や思考の可逆性を必要とするルヴァロワ技法が発達し、演繹的思考が成長したと考えられることから形式的思考段階前半（現代人の１１・１２歳以後）に入っていたと想定される。新人段階になると、石刃の刃潰しにみられる刃物の使用と制御の行動システムが飛躍的に発達する形式的思考段階後半（現代人の１４歳以後）にあたるという。

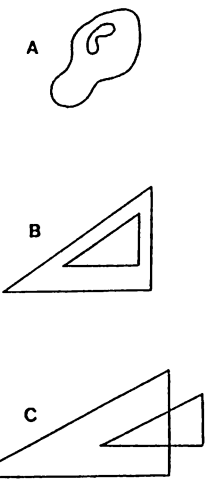
これに対し、石器製作過程における空間認識過程の進化に関して論じているのがT.Wynnである（Wynn 1985・1989）。Wynnは猿人段階から原人段階（オルドヴァイインダストリー・進歩的オルドヴァイインダストリー・アシューリアンインダストリー）へ至る石器群（第７図）を分析対象として、Piage の発達心理学における空間概念を応用して知能の進化について論じている。Piage は空間概念が感覚運動空間の単なる複写物ではないことから出発し、空間概念の発達のプロセスを明らかにしていった。それがトポロジー的空間 topological space(第８図)、射影的空間 projective space、ユークリッド的空間 Eucidean space である（木村 1965）[8]。Wynn はこれらの概念を用いて分析を加えている。以下はその具体的な説明である。

まず、トポロジー的概念では初歩的概念として「近接 nearness or byness」と「分離 separation」があり、より複雑になると連続的な「順序 order」となる（第９図）。この概念を応用して、石器の加工パターンを「接近 proximity」、「順序 order」、「連結 continuity」に区別している。一定の繰り返し打撃を加え、刃部が形成される「接近」のパターンの例が第10図ー1（Oldowan-Bed Ⅰ）である。「接近」よりも複雑な「順序」にあたる概念は「接近」と「分離」の概念を統合する存在であり、「分離」は空間において要素を区別あるいは分離する概念である。これに該当する資料が第10図ー2（Oldowan-Bed Ⅰ）のチョッパーである。この資料の加工は２つの「組 pair（交互剥離）」（ＡＢとＣＤ）で構成される。これと同様でより洗練されているのが第10図ー3のチョッパー（Oldowan-Bed Ⅰ）である。ここでは「組」の概念が要求されるが、それは単純な「組」ではなく、屈曲したエッジが両面の「境界 boundary」として認識され、維持される。この概念には、一定の方向の移動に加えて「接近」と「分離」の統合が要求される。オルドバイの石器製作者は「接近」「分離」「組」「順序」が彼らの空間概念を構成しており、彼らの空間認知能力の幼稚さを示している。最後のトポロジカルな概念は「連結」の概念、つまり全体に対する部分の関係の認識である。それは後期アシューリアンの第10図ー4（Isimila）のようにＡ～Ｄの最小の部分加工で左右対称に成形することであり、第10図ー5（Isimila）のクリーバーのように３個所の部分加工で成形することである。このような空間認識能力には「接近」「分離」「順序」の空間概念の統合が要求される。これに対し、初期の両面加工石器のアッセンブリッジである West Natron の資料（第11図ー6・7）は良好な資料ではないものの製作者は全体の形状を意識している。その意味でこれらは転換期の資料といえる。

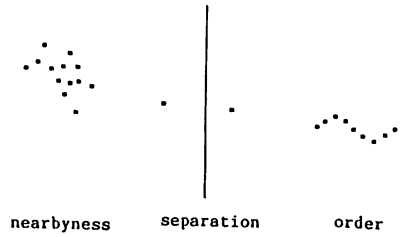
次に、射影的概念の究明は蝋燭や懐中電灯の光源移動にともなう影の変化を研究することであり、影の幾何学というだけでなく視点の幾何学であり、モノと観察者の位置関係が重要となる。トポロジー的概念ではモノの形は無関係であったが射影幾何学では大いに関係する。しかし、双方とも大きさは無関係である。第11図ー8（Isimila）のクリーバーの



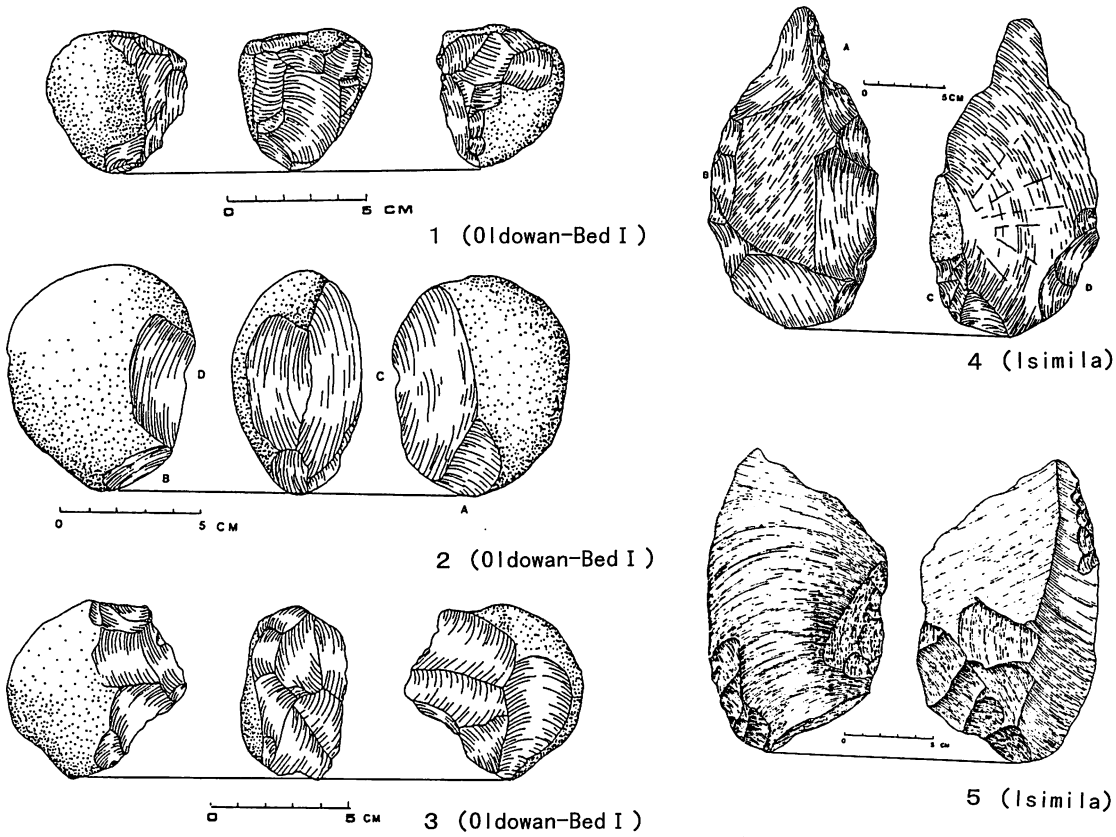
第７図　分析対象遺跡の時期（Wynn 1989）



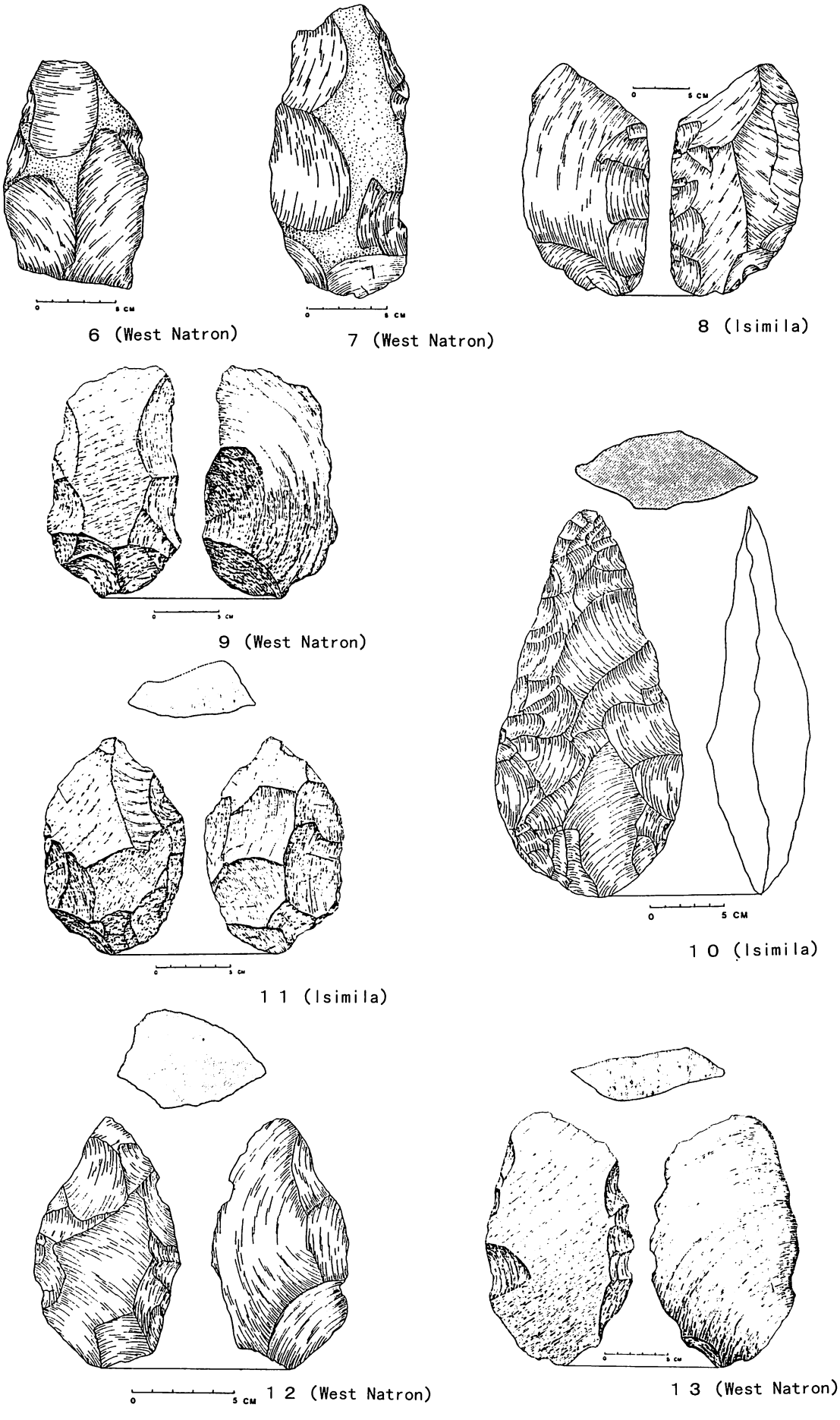
第８図　トポロジー概念



第９図　初歩的トポロジー概念



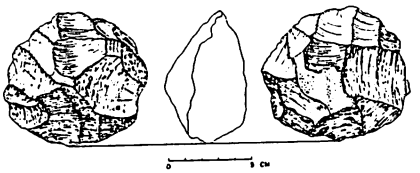
第１０図　分析対象となった石器（１）（Wynn 1989）



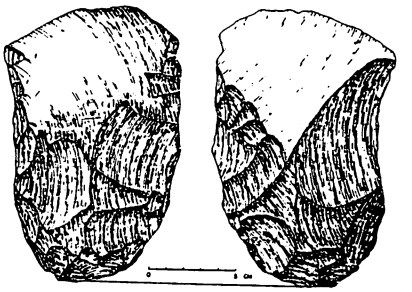
第１１図　分析対象となった石器（２）（Wynn 1989）

エッジ（左側縁）は本来の形状が変えられ直線的に加工されている。これはエッジの加工にあたって定点からの視点と同時に他の面からの観察がなされ、視点によるエッジの変化が考慮されていたことを示している。これに対し、第11図ー9（West Natron）はエッジが直線に加工され、両面加工石器のような二次加工がなされているが、チョッパーのように屈曲したエッジの側面であり、エッジが直線的に加工されたのは偶然であると考えられる。後期アシューリアンの両面加工石器は定点からの視点からだけでなく複数の視点を統合する能力が存在するが、それは断面を検討することによって確証が得られる。両面加工石器は規則的な断面をもっており、左右対称性はその水準の高さを示している。その例が第11図ー10（Isimila）の両面加工石器（ハンドアックス）であり、製作者は離れた複数の断面を観察している。ただし、両面加工石器である第11図ー11の断面は不規則であり、Ismilaの時期の精巧な両面加工石器はすべて規則的な断面をもっている訳ではないことがわかる。第11図ー12・13（West Natron）の断面はそのような左右対称な規則性はみられないが（12がやや左右対称であるようにみえるのは加工の度合による偶然である）、平面形は大体左右対称である。少なくともIsmilaの初期人類は視点を変化させて石器製作行為をコントロールする能力を有しており、West Natron の初期人類はその能力を持っていなかったと推定される。

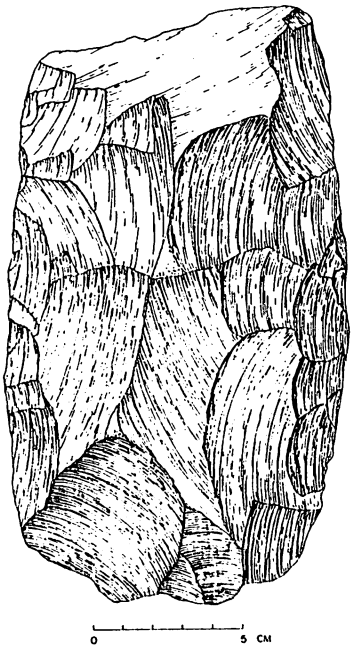
ユークリッド空間は現代人が慣れ親しんでいる空間概念である。この概念に先行する概念として、「間隔 interval」、「２次元形状 two-dimensional shape」、「反転 reversal」とくに中心線に対する「反映 mirroring」の概念がある。このうち、「間隔」は測定 measurement と平行軸 parallel axes という２つの単純な空間概念と結合する。測定については、きわめて初期の石器製作時から用いられる「間隔」が半径や直径であり、一定の長さの概念が存在する。第12図ー14（Oldowan-BedⅡ上部）の円盤状石器の形状は「順序」や「分離」という初歩の概念では説明できず、半径あるいは直径という概念を用いて意図的に作り出されたと想像されるが、より複雑な一定の角度という概念を使用した可能性もある。第12図ー15（Isimila）のクリーバーの全体形状は意図的に正四辺形に仕上げられているが、第12図ー16・17（Isimila）のクリーバーの両側縁はほぼ平行であるが左右対称ではない。Isimila の初期人類はアフィン affine 空間における平行の概念を獲得しているが、West Natron や Oldowan-Bed Ⅰ・Ⅱにはみられない。左右対称もユークリッド概念に含まれるが、その前提となる等分 bisect と垂線 perpendicular の概念には角度と距離という定量的な概念が要求される。第11図－10（Isimila）は平面的・側面・断面すべてが左右対称に作られ、それらの中心軸が交差しており、直観的にデカルト座標 Cartesian coordinate と同等な３次元空間を形成している。また、トリミングが最小限である第12図－18（Isimila）の細部を検討するとＡのトリミングが左右の形状を一致させている。しかし、このような左右対称の発達の原点を探ることは難しい。例えば、第12図－19（Oldowan-BedⅡ下部）は Mary Leakey により原-両面加工石器 proto-biface と分類されているが、一見した形状は左右対称に見え、チョッパーや円盤状石器と区別がつかない。Oldowan における最古のアシューリアン期の遺物である第12図－20（Oldowan-BedⅡ上部）は第12図ー18に類似した資料で左右対称の意図が感じられる。第12図ー21（Oldowan-Bed Ⅱ上部）も全体にトリミング部分が広範囲で、右側縁の下部に左右対称が反映されているようであるが確証はない。初期両面加工石器（West Natron や Oldowan-BedⅡ上部）は「反



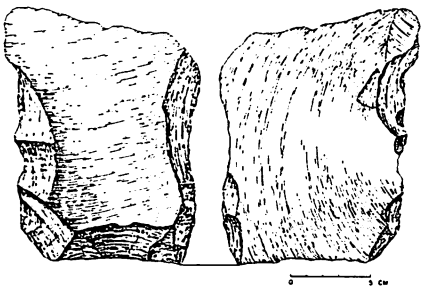
１４（Oldowan-BedⅡ上部）



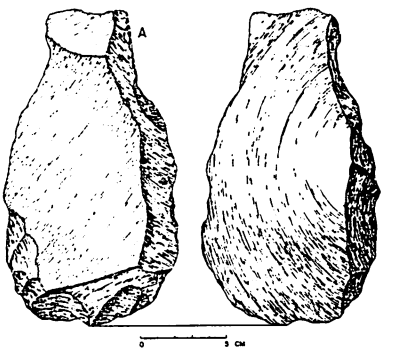
１６（Isimila）



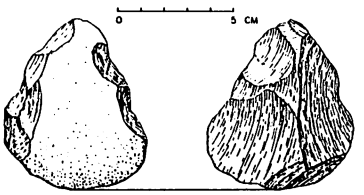
１５（Isimila）



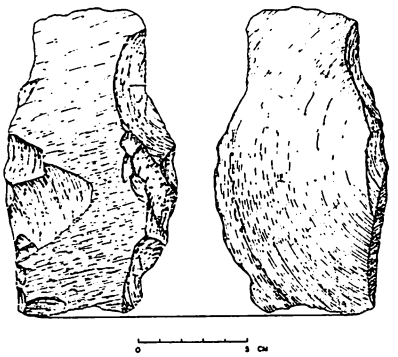
１７（Isimila）



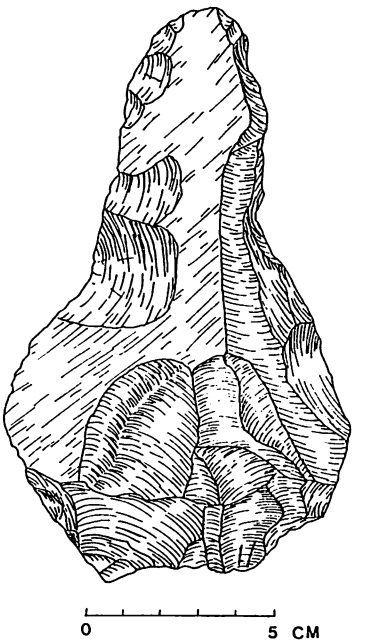
１８（Isimila）



１９（Oldowan-BedⅡ下部）



２０（Oldowan-BedⅡ上部）



２１（Oldowan-BedⅡ上部）

第１２図　分析対象となった石器（３）（Wynn 1989）

転」や「反映」の概念や未熟な左右対称概念の存在を示している。Isimila の段階では空間の保存や一致といった、より精密な左右対称概念が存在した。しかし、これらの空間認識は、「間隔」、「２次元形状」、「反転」（中心線に対する「反映」）の概念は存在してもアフィン affine 空間における平行概念は獲得していない。そして、Oldowan-BedⅡ上部段階はユークリッド空間概念獲得への出発点となっている。

以上の分析結果から各時期の石器製作者の空間概念を Wynn は以下のようにまとめている。

①200 万年前：空間概念のレパートリーが極度に限定される。「近接」「分離」「順序」といった単純なトポロジー概念で構成される。ただし、Oldowan の石錐にはユークリッド概念に必要とされる曲線や直線を区別する能力が認められる。

②120 万年前：空間概念のレパートリーに新たな空間概念が追加される。「間隔」概念や直径や半径の概念の存在から推測される空間量の概念である。もう一つの空間概念が左右対称の概念である。この概念にはユークリッド空間間における実物大の対称性ではないが形の「反映（相似）」や「反転」の概念を含んでいる。また、石器全体の形状を認識するようになったが、それは「反転」と「間隔」による直接的に知覚できる２次元的形状であり、３次元については単純な球体のみであった。

③ 30 万年前：新たな空間概念として最も重要なものは多方向の視点から観察することが可能となったことである。二番目にあげられるのは、ユークリッド空間概念の獲得であり、合同などの空間量の概念の使用によってを組織化される。三番目に、最小限に加工された石器の分析により、石器の最終形態の想定や部分と全体の関係概念の存在が認められる。

このように、石器から人類の空間認識能力の進化を論ずることは、石器製作技術や道具使用から人類の技術変革を追っていった伝統的な石器研究方法に対して、従来とは異なる見解を示している。例えば、石器自体の変化が乏しいとされている両面加工石器の出現からアシューリアン期（150 万年前から 30 万年）までの時期が、人類の空間認識の重要な発達段階として位置づけられている点である。空間認識能力の進化の問題は、従来の石器の技術変革に関する理解を深める役割を果すとともに、製作者の「熟練度」や「見習い期間」の存在、さらには石器の「領有 appropriation」の問題などと同様に石器を取り巻く議論をより多様で充実したものにする可能性を含んでいる。

（追記）本稿作成にあたり、慶應義塾大学学生大橋美緒君に御協力頂きました。

註

（1）社会や文化によって色彩認識のあり方が共通するのか異なるかは議論の尽きない問題であるが、最近興味ある色彩調査が行われた（千々岩 1999)。その調査では、色見本と「色の好み」「色のイメージ」「配色の好み」などの質問表を 20 ヶ国の大学に送り、大学生に解答してもらった結果をコンピュータで解析（因子分析や数量化Ⅲ類）した。分析の結果、第１因子が色彩感情が人間であるため似ていることを示す因子で、寄与率は全体の 72.3％を占めている。つまり、７割は普遍的因子、残りの３割が国や地域で異なる因子ということになる。また、色彩語研究の端緒となった重要な研究として、バーリンとケイの仮説が存在する。彼らは９８言語についてＢＣＴ（基礎色彩語彙）の抽出を行った。その結果、ＢＴＣに類似性が認められ、①すべての言語は「白」と「黒」を持つ、②ＢＣＴが３であれば「白」「黒」「赤」である、③ＢＣＴが４つであれば②と「緑」か「黄」のいずれかである、④ＢＣＴが５つであれば③と「緑」か「黄」のいずれかである、といった傾向を示した。この試みは多くの問題点が指摘されているが（長野 1982)、「白」「黒」の次に「赤」、 その次に「緑」「黄」という順で人類の基本的な色彩語彙が構成されているとするならば、先史時代の色彩認知の問題を考えてゆくうえで興味深い研究成果である。

（2）心理学では、人間のかくれたパーソナリティ特性を測定する方法としてロールシャッハ・テスト Rorschach test があるが、藤岡喜愛が東アフリカのタンザニアの狩猟採集民 Hadzapi 族に対してこの方法を試みたところ、彼らの反応は（ａ）どの部分にも同じ思いつきを繰り返す、（ｂ）頭、足、口など、部分の思いつきが続いて全体がでてこない、（ｃ）同じ所によく似た思いつきが重なる、（ｄ）関連なしで思いつかれたものが、自由連想につながって「おはなし」がはじまるといった幼児型を示しており、解釈的な成人型を示す日本や欧米の場合とは異なっていた（桜井 1991)。このことは、モノの認知過程が我々と狩猟採集民とでは異なっている可能性を示唆する。この問題は、私自身が縄文土器の文様区画の分析を行った際に痛感した問題である(桜井 1998)。分析の結果、文様が均等に割り付けられている例は稀であり、あらかじめ印をつけるなどして器面を均等に「割振る」といった作業は行われていないことがわかった。我々が普段何気なく行っているモノを常に３次元的に認識するという認知過程は実は「近代」の産物なのである。

（3）認知考古学においてはモーターハビットを包括する概念としてハビトゥス habitus が用いられている（中園 1994、松本 2000a・b)。Bourdieu のハビトゥスという概念は、場 champ に規制されるものであり、ディスポジシオン disposition、戦略 strategies、ゲーム感覚 sens du jeu などの概念を用いて、行為者の行動・動きを、主観主義的解釈と客観主義的解釈の対立を超えた地平に叙述する、単なる習慣といったものとは異なる概念である（山本 1994)。この概念は、考古学的事象を目的意識的実践であるプラクシス practice ではなく、日常的実際行為であるプラチック pratique として捉えていくキー概念となる。

（4）chaine operatoire の訳語をめぐっては西秋良宏が詳細に検討している（西秋 1998、p13～14)。西秋が述べているように、単なる「工程」として捉えるのではなく物質資料から概念的側面を探るための重要な概念である chaine operatoire の訳語としては

Leroi-Gourhan の『身ぶりとことば』(荒木 亨訳) で使用されている「動作連鎖」という訳語が適切である。

(5) Mauss (Mauss 1968) は、自分の身体技法から脱することがいかに難しいか論じているが、その逸話に多くの国の兵士が集結する戦場 (第一次世界大戦) という「場」における経験が生かされている点は興味深い。例えば、イギリス軍の歩兵隊とフランス軍の歩兵隊では異なる歩調や歩幅で行進するため、らっぱの鳴らしかたや太鼓の打ち方が異なるが、あるイギリスの連隊がフランス式に合わせようと試みたが失敗したという。行進の身体化に関しては、農耕民ある我々日本人は元来リズムに合わせて行進するという習慣はなく、右足と同時に右手が出るという歩き方 (ナンバ) であった。そのため、明治政府は西洋式軍隊を作るため、軍隊や学校で繰り返し行進を強要し、我々は行進を身体化したという (三浦 1994)。

(6) 石器については判断が難しいと思われるが、土器の場合は意図的に文様を変えるということが日常的に行われている。実際に縄文土器の文様区画や施文過程について検討した際、意図的に個々の文様の細部を変えている資料が多く存在することがわかった (桜井 1998)。この点に関しては、Certeau の「戦略」と「戦術」という概念 (Certeau 1980) が参考となる。そこでの「戦略」とは土器製作におけるきまりであり「合理化され、拡張主義的で、中央集権的で、見世物的で、騒々しい生産」(Certeau 1980 : 邦訳 p93) である。これに対し、戦術は「消費」と形容される生産であり、その特徴は「狡智にたけ、機をみて風のように姿を消し、密猟が得意で、闇にもぐり、いつもいつも低くつぶやいている」(同書 p93) である。多くの土器研究者は「戦略」にのみ集中するため、「戦術」の存在に気付かないが、縄文人は土器製作における文様構成や文様のきまりを守りながら、文様の細部を変化させるという「戦術」をとっている。その意味で土器製作は「生産」というだけではなく、「消費」でもあるのである。

(7) 各器種が使用石材の中で占める割合を分析データとし、群平均法でクラスタリングを行った。

(8) トポロジー的空間は大きさや形には着目せずに閉じているか開いているか、近くにあるか離れているか、囲まれているか、中にあるか外にあるかといった観点から物の性質を抽象する段階である。順序に関する実験では、第Ⅰ期 (3～4才 : 同じものであることは判断できてもが順序が認識されない、後半になると隣り合う2つの組は並べることができる)、第Ⅱ期 (4～6才 : 直線的に並べることができる)、第Ⅲ期 (6～7才 : 順序を組織的に逆転できる) に区分される。射影的空間は物や形が分離した形では存在せずに1つの視点を通して結びつけられている空間である。第Ⅰ期 (4才頃まで : トポロジー的原理に基づいた点の連続としての線の概念のみであり、直線が構成できない)、第Ⅱ期 (4～7才 : 他の知覚的形態の影響がなければ直線を形づくれる)、第Ⅲ期 (7才頃から : 視点の違うと物の見え方が異なることを理解) に区分される。ユークリッド空間は平行の概念、角の概念、比率 (相似) の概念が順次獲得され、物の移動や距離、大きさが考慮されていく。最後に水平－垂直という関係系の枠が成立する (木村 1965)。

文　献

阿部朝衛 1988 「縄文人のきき手と二分原理」『法政考古学』第13号

安蒜政雄 1988 「和泉校地遺跡の性格」『明治大学和泉校地遺跡発掘調査報告書』明治大学

上野佳也 1980 「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』44巻4号

上野佳也 1983 『縄文人のこころ』日本書籍

上野佳也 1985 『こころの考古学 猿人からの心性の進化』海鳴社

上野佳也 1986 『縄文コミュニケーション－縄文人の情報の流れ－』海鳴社

木村允彦 1965 「子どもの空間概念」波多野完治（編）『ピアジェの認識心理学』国土社

群馬県 1982 「第二編 民俗知識」『群馬県史 資料編26』

合田濤 1982 「認識人類学の課題と方法」合田濤（編）『認識人類学　現代の文化人類学1』至文堂

後藤　明 1997 「実践的問題解決過程としての技術－東部インドネシア・ティドレ地方の土器製作－」　『国立民族学博物館研究報告』22巻1号

（財）かながわ考古学財団 2000 『原東遺跡』

桜井準也 1986 「旧石器時代人の利き腕」『慶応義塾考古学研究会二十周年記念論集』慶應義塾大学考古学研究会

桜井準也 1991「縄文人の眼、考古学者の眼－認知考古学の可能性－」『東邦考古』第15　号

桜井準也 1992 「先史時代人の自然環境認識に関する一考察－集落立地と地割れ分布の関連から－」『東邦考古』第16号

桜井準也 1998 「縄文土器製作における文様区画と施文過程－縄文人の認知構造の解明にむけて－」『東邦考古』第22号

柴田 徹 1991 「考古学のための岩石鑑定ミニ図鑑－王子ノ台遺跡出土石器をもとにした－」『東海大学校地内遺跡調査団報告2』東海大学校地内遺跡調査団

竹岡俊樹 1991 「旧石器時代の石器分析からみた左右差の起源と発展」久保田競（編）『左右差の起源と脳』朝倉書店

田辺繁治 1989 「民族誌記述におけるイデオロギーとプラクティス」『人類学的認識の冒険』同文館

千々岩英彰（編著） 1999 『図解 世界の色彩感情事典』河出書房新社

中園 聡 1994 「弥生時代開始期の壷形土器－土器作りのモーターハビットと認知構造」『日本考古学』1号

長野泰彦 1982 「色彩分類」合田濤（編）『認識人類学　現代の文化人類学1』至文堂

西秋良宏 1998「序章・第1章 解説」Inizan, Roche and Tixier（大沼克彦・西秋良宏・　鈴木美保訳）『石器研究入門』クバプロ

松井健 1979「フォーク・タクソノミーとエスノ・サイエンス　その方法論的諸問題」谷　泰（編）『人類学方法論の研究』京都大学人文科学研究所

松井健 1991 『認識人類学論攷』昭和堂

松本直子 1996「認知考古学的視点からみた土器様式の空間的変異」『考古学研究』42巻　4号

松本直子 1997 「認知考古学の理論的基礎」『HOMINIDS』Vol.1

松本直子 2000a 『認知考古学の理論と実践的研究』九州大学出版会
松本直子 2000b「認知考古学」「ハビトゥス」『用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅱ』 同成社
三浦雅士 1994 『身体の零度 何が近代を成立させたか』講談社
御堂島正 1985 「考古学上の仮定と事実－形態・機能・スタイル」神奈川考古第 20 号
山本哲士 1994 『ピエール・ブルデューの世界』三交社
山本哲士 1997 『現代思想の方法』ちくま書房
Bourdieu,P. 1979 La Distinction.石井洋二郎訳『ディスタンクシオン』藤原書店.1990
Bourdieu,P. 1980 Le Sens Pratique.今村仁司・港道 隆訳『実践感覚』みすず書房.1988
Certeau,M. 1980 Art de Faire.山田登世子訳『日常的実践のポイエティーク』国文社.1987.
Cole,M.and S.Scribner 1974 Culture & Thought:A Psychological Introduction.John Wiley & Sons. 若井邦夫（訳）『文化と思考　認知心理学的考察』サイエンス社.1982.
Flannery,K.V. and J.Marcus 1993 "Cognitive Archaeology" Cambridge Archaeological Journal,3.
Inizan,M.-L. Roche,H.and J.Tixier 1992 Technology of Knapped Stone.大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保訳『石器研究入門』クバプロ.1998.
Karlin.C and M.Julien 1994 "Prehistoric Technology:A Cognitive Science?." In Renfrew C. and Zubrow.E.B.W(ed.) The Ancient Mind:Elements of Cognitive Archaeology.Cambridge University Press.
Leroi-Gourhan,A. 1964 Le Geste et la Parole.荒木亨訳『身ぶりと言葉』新潮社.1973.
Mihen,S. 1996 The Prehistory of the Mind.松浦俊輔・牧野美佐緒訳『心の先史時代』青土社.1998.
Mauss,M. 1968 Sociologie et Anthroplogie.有地亨・山口俊夫訳『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂.1976.
Schlanger,N. 1994 "Mindful Technology:Unleashing the Chaine Operatoire for an Archaeology of Mind." In Renfrew C. and Zubrow.E.B.W(ed.) The Ancient Mind: Elements of Cognitive Archaeology.Cambridge University Press.
Van Der Leeuw,S.E. 1994 "Cognitive Aspects of 'technique'." In Renfrew C. and E.B.W.Zubrow(ed.) The Ancient Mind:Elements of Cognitive Archaeology.Cambridge University Press.
Washburn,D.K. 1995 "Style,Perception,and Geometry." In Carr,C.and J.E.Neitzel (ed.)Style Society and Person.Plenum Press.
White,J.P. and D.H.Thomas 1972 "What mean these stones? Ethno-taxonomic models and archaeological interpretations in the New Guinea Highlands." In Clarke.D.L. (ed.) Models in Archaeology.Methuen.
Wiessner,P. 1983 "Style and Social Information in Kalahari San Projectile Points." American Antiquity48.
Wiessner,P. 1984 "Reconsidering the Behavioral Basis for Style :a Case Study

among the Kalahari San." Journal of Anthropological Archaeology 3.
Wynn, T. 1985 "Piaget, Stone Tools and the Evolution of Human Intelligence." World Archaeology. vol. 17.
Wynn, T. 1989 The Evolution of Spatial Competence. University of Illinois Press.
Young, D. and R. Bonnichsen 1984 Understanding Stone Tools: A Cognitive Approach. Center for the Study of Early Man, University of Maine.

石器製作技術と音声言語

― ルヴァロワ剥離方式における実験研究 ―

国士舘大学イラク古代文化研究所

大沼 克彦

1 はじめに

旧石器研究の草分けボルド（Bordes）は、大著 Typologie du Paleolithique ancien et moyen（1961)において、ルヴァロワ技法を「剥片が石核から剥離される前にその形を石核上の特殊な調整で予め準備されるもの」（先定剥離）と記述した。そして、この技法で剥がされたルヴァロワ剥片を剥片、石刃（縦長剥片)、ポイント（三角剥片）の３種に分類した。

ボルドによるこのルヴァロワ規定は極めて曖昧で、同様にして剥離に先立ち剥片の形が石核上で準備される他の先定剥離、とりわけ円盤形石核剥離や「真正」石刃剥離との区別が容易でないという欠陥を有していた。

この曖昧さに由来する遺物分析上の混乱を解決するため、ボエダ（Boeda）は新たなルヴァロワ概念を提唱した（1988a; 1988b)。石核の一面が剥離作業面として、他面が打面としてそれぞれの役割を変えられることなく剥離が進行し、この二つの面が交差するラインに平行しながらルヴァロワ剥片が剥離され、その剥離回数は剥離作業面と交差ラインのあいだの容積に決定されるという概念である。ボエダは、この概念にいくつかの方式（単一剥離方式、(一方向、相対二方向、求心方向）複数剥離方式）を付加することでルヴァロワ剥離と他の先定剥離の違いを明瞭にした。

ボエダが提唱したルヴァロワ概念は、むしろ、片面剥離という方式として考えることができるが、いずれにせよ、彼のルヴァロワ概念・方式は現在多くの研究者に採用されている。

ルヴァロワ剥離は中期旧石器時代になって著しく流行したことから、一般的にはネアンデルタール人に考えだされたものと思われがちだが、実際には、既にホモ・エレクトスの時代に出現している。

アフリカとヨーロッパ地方のルヴァロワ剥離は、アシューリアン石器伝統における握槌製作とのかかわりの中で出現した。例えば、南アフリカ地方では「握槌やクリーヴァーの需要が増すにつれ、それらを熔岩などの大石から打ち割りつづけて製作するという無駄を省くため、先ず大石から大形剥片を剥離し、この剥片を素材にしてこれらの石器を製作するようになった」(Lowe 1945)ことで出現したと言われている。クリーヴァー用素材の大形剥片を剥離するためのヴィクトリア・ウェスト技法はその典型である。

一方、ヨーロッパ地方のルヴァロワ剥離は握槌を薄身にする整形加工に関連して出現した。この地では、リス氷期（約 20～15 万年前）の中期アシューリアン以後にそのような過程をみることができるが、当時は軟質ハンマーで製作され、薄身で均整のとれた多様な握槌が出現していた。また、剥片石器が激増していた。握槌を薄くする整形加工でもたらされたやや大形の剥片は、分厚くも、また、薄すぎて脆くもない、切る作業に好適で丈夫な刃部を有していた。そして、その形はルヴァロワ剥片に酷似した（Breuil and Kelley 1956)(図１)。この偶然の出来事が記憶され、その改良としての入念な、片面剥離の石核調整が考えだされて、ルヴァロワ剥離が出現したのである。同様に薄く整形され、ルヴァロワ石核に類似した形を持つ握槌はエジプトや西アジア地方でも認められている（Caton-

Thompson 1952: Plate 48-3; Akazawa 1975: p.15)。

ルヴァロワ剥離が盛行した中期旧石器時代においては、その剥片はより入念なつくりとなり、また、多様化した(図２)。特筆すべきは、西アジア地方のルヴァロワ・ポイントの際立つ規格性と入念さである。その製作方法が極めて丁寧に教示されていたことが明らかである。

２　石器製作と音声言語

人類学者と考古学者の多くは、音声言語が人類の歴史でどのようにして出現したかという問題に興味を抱いている。この興味は形態人類学や先史社会学など、様々な分野にまたがるが、旧石器研究の分野では、トス（Toth）とシック（Schick）が、会話の使用と非使用という２つの方法を用いて現代人に石器製作を教示する実験研究を提唱した（1993)。

筆者と人類学者の青木健一は、たしかにネアンデルタール人やホモ・エレクトスの習得様式や行動様式は現代人のそれと異なっていたかもしれないにせよ、トスらの提唱したような実験研究が音声言語の出現に関する貴重な情報を提供し得るものであると考えた。そして、音声言語の使用、非使用という２つの方法を用いて、複雑な工程を踏むルヴァロワ剥離方式の教示実験を試験的におこなった。

３　ルヴァロワ剥離実験と音声言語

実験のあらまし

1995年の８月、山形県寒河江市の最上川の河岸で実験をおこなった。実験は皿沼、高瀬山の２つの地点でおこなわれたが、東京大学で生物科学・人類学を専攻していた学部学生20名が被験者として参加した。ルヴァロワ剥離の教示は筆者がおこない、実験の記録と統計処理はすべて青木がおこなった。

実験用の石材は、概してきめが細かく、淡～濃褐色の当地に特有な頁岩塊である。これらは河岸にかなり大量に散布していた。ハンマーには、格好な大きさ、硬さ、重量を有する礫を河原で適時採取し、使用した。

学生は10人ずつの２つのグループに分けられ、実験は、４年生から成る第１グループと３年生から成る第２グループそれぞれに対しておこなわれた。第１グループの４年生はこの実験以前に既に旧石器に関する授業を受けており、ルヴァロワに関する知識を多少なりとも有していた。一方、第２グループの３年生は実験以前に旧石器の授業を受けたことがなく、ルヴァロワの知識を有していなかった。それ故、第１グループには会話と身振りによる教示をおこない、第２グループには会話を用いず、身振りだけによる教示をおこなった。いずれのグループにも「手取り足取り」の教示はおこなわなかった。

会話と身振りによる第１グループの実験は、８月11、12日に皿沼でおこなわれた（写真１)。筆者はルヴァロワ剥離の全工程を以下のように教示した。先ず、素材（多くの場合は筆者が剥離した大形剥片）の形に応じて石核の剥離作業面と側面を決定し、側面から求心方向に表面調整剥片を連続して剥離することで、剥離作業面が全体的にややドーム状になるように石核を整形した。次いで、石核側面の一部を最終剥離用打面として選択し、そこに細かな剥離を入念に施して打面の凸凹を取り除き、また、打面と剥離作業面との角度がほぼ80度になるように整形した。この打面調整が終了したのち、剥離作業面の大部分を除去するようにハンマーを打面に打ち当ててルヴァロワ剥片を剥離した。

この間、ハンマーを石核打面に対して振り下ろす方向と角度、および、石核整形、打面調整、最終剥離それぞれにおけるハンマー打撃の力の入れ方などを順を追って詳細に説明した。特に注意を促した事柄は、１）打面と剥離作業面との角度が90度をこえた場合には剥離が不可能なこと、２）剥片はハンマーの打撃方向と同一方向に剥がれること、３）剥

離作業面がなめらかでなく、著しい凸凹部分を有する場合には剥離が途中で止まってしまうことの３点である。

実験は練習と最終試験から成り、練習実験は教示時間を含めて２時間ずつ３回おこなわれた。最終試験は１回のみで、教示時間を含まない２時間にわたりおこなわれた。学生は練習実験において会話と身振りによる質問を許され、筆者は会話と身振りで回答した。また、失敗の克服が不可能な場合には、石核素材を変えて最初からやり直すことが許された。最終試験では質問が一切禁止され、学生は出来に満足した時点で製作物を自主的に提出した(図３)。

皿沼での実験が終了したとき、ここでの素材岩石が稀少になったので、第２グループの実験は最上川沿いに皿沼から２㌔㍍程離れた高瀬山に場所を移しておこなわれた（８月 13、14 日）（写真２)。高瀬山に散布していた頁岩塊は皿沼のものよりきめが細かく、より良質であることが認められた。

筆者は、第１グループに対するのと全く同じ内容で、ルヴァロワ剥離の全工程を、身振りによって、教示した(図４)。

第１グループに説明した留意点、即ち、打面と剥離作業面との角度は 90 度以内でなければならないこと、剥片はハンマーの打撃方向と同一方向に剥がれること、ハンマー打撃の方向・角度・力の制御方法、そして、剥離作業面はなめらかであるべきで、著しい凸凹部分があってはならないことを身振りだけで説明した。

第２グループの実験はすべて身振りだけでおこなわれたため、第１グループの実験よりもはるかに困難であったが、特に、打面と剥離作業面が形成する角度というような抽象的な事柄や、「この剥離実験の最終目的物が剥片なのか残核なのか」という文章的な事柄は容易に教示することができなかった。「最終目的物が何か」という点に関しては、筆者自ら残核を放棄し、剥片を用いて何らかの作業を実際におこなったわけでもなく、その説明に苦労した。石器時代においては石核と剥片の使い分けが日常的に観察されていたので、当時の教示がたとえ身振りだけでおこなわれていたにせよ、この点はたいして問題にはならなかったはずである。

第２グループにおいても、教示時間を含めてそれぞれ２時間の練習実験が３回と、教示時間を含まない２時間の最終試験が１回おこなわれた。練習実験では身振りだけの質問が許され、筆者は同様に身振りによって回答した。また、失敗の克服が困難な場合には石核素材を変えて最初からやり直すことが許された。しかし、最終試験における質問は禁止され、学生は出来に満足した時点で製作物を自主的に提出した(図５)。

４　実験の結果

筆者は、学生各々が１）ルヴァロワ剥離のすべての工程を把握した、２）ルヴァロワ剥片の最終剥離に成功した、それぞれの時点で青木に報告した。

その結果、ルヴァロワ剥離の全工程を把握した割合と把握に至るまでの時間と、ルヴァロワ剥片最終剥離に成功した割合と成功するまでに要した時間は、すべて、両グループの間で差異が認められなかった。即ち、第１グループでは 10 人中の９人が、第２グループでは 10 人中の８人がルヴァロワ剥離の全工程を完全に把握し、両グループとも 10 人中の６人がルヴァロワ剥片の最終剥離に成功した（青木による統計の詳細については、既発表論文（Ohnuma et al. 1997: Table 1）を参照されたい)。

５　まとめ

この実験をおこなう以前には、筆者はルヴァロワ剥離の教示に際して会話の使用が不可欠なものであると推測していた。しかし、実験は筆者の推測に否定的な結果をもたらした。

今回の実験があくまでも試験的且つ不十分なものであったにせよ、筆者は、実験結果をふまえ、音声言語は石器時代のルヴァロワ剥離の教示や伝達にとって必要不可欠なものではなかったと考えている。そして、このユニークな剥離方式、更には石器づくりそのものは、音声言語なしには存在し得なかった他の生存活動と別の次元に属していたと考えている。

謝辞

筆者に本実験を提案され、その実現に向け尽力され、また、有益な助言を下さった東京大学生物科学人類学教室の青木健一教授に御礼申し上げます。国際日本文化研究センターの赤沢威教授には実験に対する貴重な助言を頂きました。ここに感謝申し上げます。実験に参加され、真夏の猛暑のさなかルヴァロワ剥離の成功に向け奮闘された学生諸氏に対して感謝申し上げます。

文献

Akazawa, T. 1975 Douara Basin Sites: Prehistoric Work-shop Station Near Palmyra, Syria, Bulletin of the National Science Museum, Series D, Vol. 1, pp. 11-24.

Boeda, E. 1988a Le Concept Levallois et Evaluation de son Champ d'Application, In L'Homme de Neandertal: Vol. 4: La Technique, Liege, pp. 13-26.

——— 1988b Le Concept Laminaire: Rupture et Filiation avec le Concept Levallois, In L'Homme de Neandertal: Vol. 8: La Mutation, Liege, pp. 41-59.

Bordes, F. 1961 Typologie du Paleolithique ancien et moyen, Memoire No. 1, Publications de L'Institut de Prehistoire de L'Universite de Bordeaux, Bordeaux.

Breuil, H. and H. Kelley 1956 Les eclats acheuleens a plan de frappe a facettes de Cagny-la-Garenne (Somme), B. S. P. F., 53, pp. 174-179.

Caton-Thompson, G. 1952 Kharga Oasis in Prehistory, The Athlone Press, London.

Lowe, C. van Riet 1945 The Evolution of the Levallois Technique in South Africa, Man, 45, pp. 49-59.

Ohnuma, K. 1976 Lithic Artifacts from Tar Jamal and Hafna, In Al-Tar I : Excavations in Iraq, 1971 ～ 1974, The Institute of Ancient Iraq Culture, Kokushikan University, Tokyo, pp. 303-329.

———— 1986 Lithic Artifacts from Tar Jamal, Al-Rafidan, 5/6, pp. 51-57.

Ohnuma, K., K. Aoki and T. Akazawa (1997) Transmission of Tool-making through Verbal and Non-verbal Communication: Preliminary Experiments in Levallois Flake Production, Anthropological Science, 105 (3), pp. 159-168.

Toth, N. and K. Schick 1993 Early Stone Industries and Inferences regarding Language and Cognition, In Tools, Language and Cognition in Human Evolution, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 346-362.

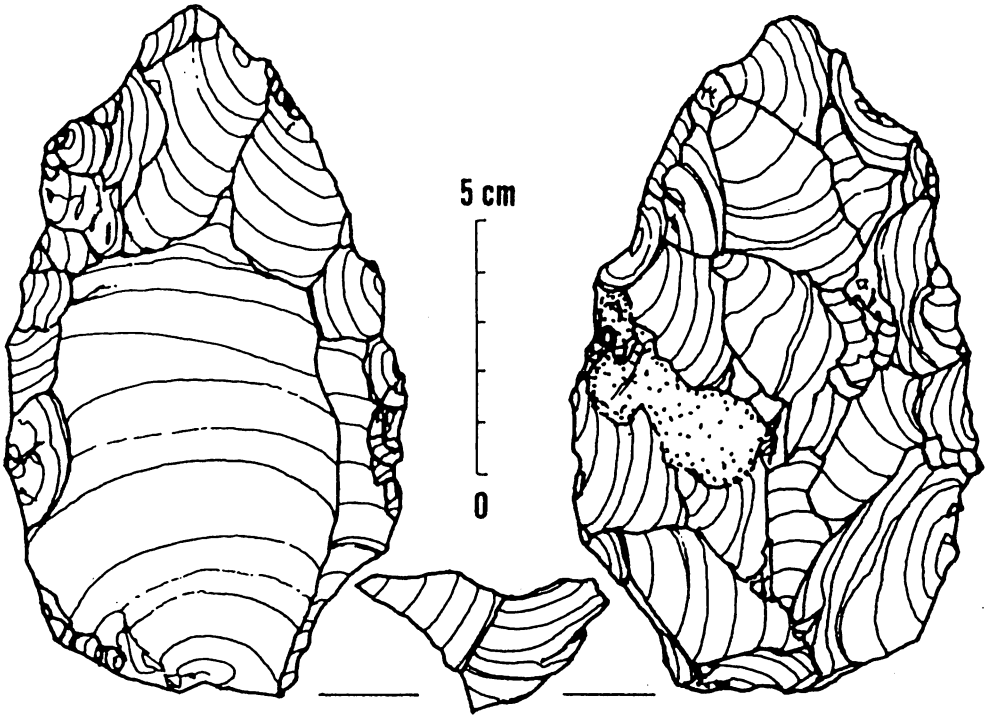


図１　基部を薄身に整形されているアシューリアン握槌（ルヴァロワ石核に酷似する）
(Breuil and Kelleyの原図（1956: Fig. 5-1）からの描き直し)

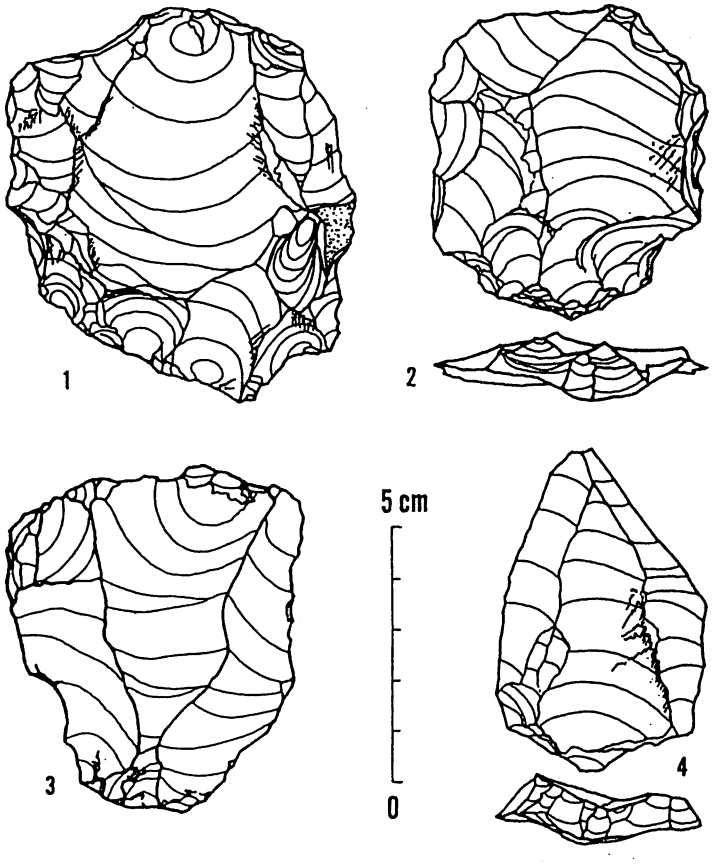


図２　ルヴァロワゾ・ムステリアンの石器：タール・ジャマル遺跡（イラク）
1: ルヴァロワ剥片石核（Ohnuma 1986: Fig. V-2-8)、2: ルヴァロワ剥片（Ohnuma 1976: Fig. V-7-8)、
3: ルヴァロワ・ポイント石核（Ohnuma 1976: Fig. V-6-1)、4: ルヴァロワ・ポイント（Ohnuma 1986: Fig. V-3-3))

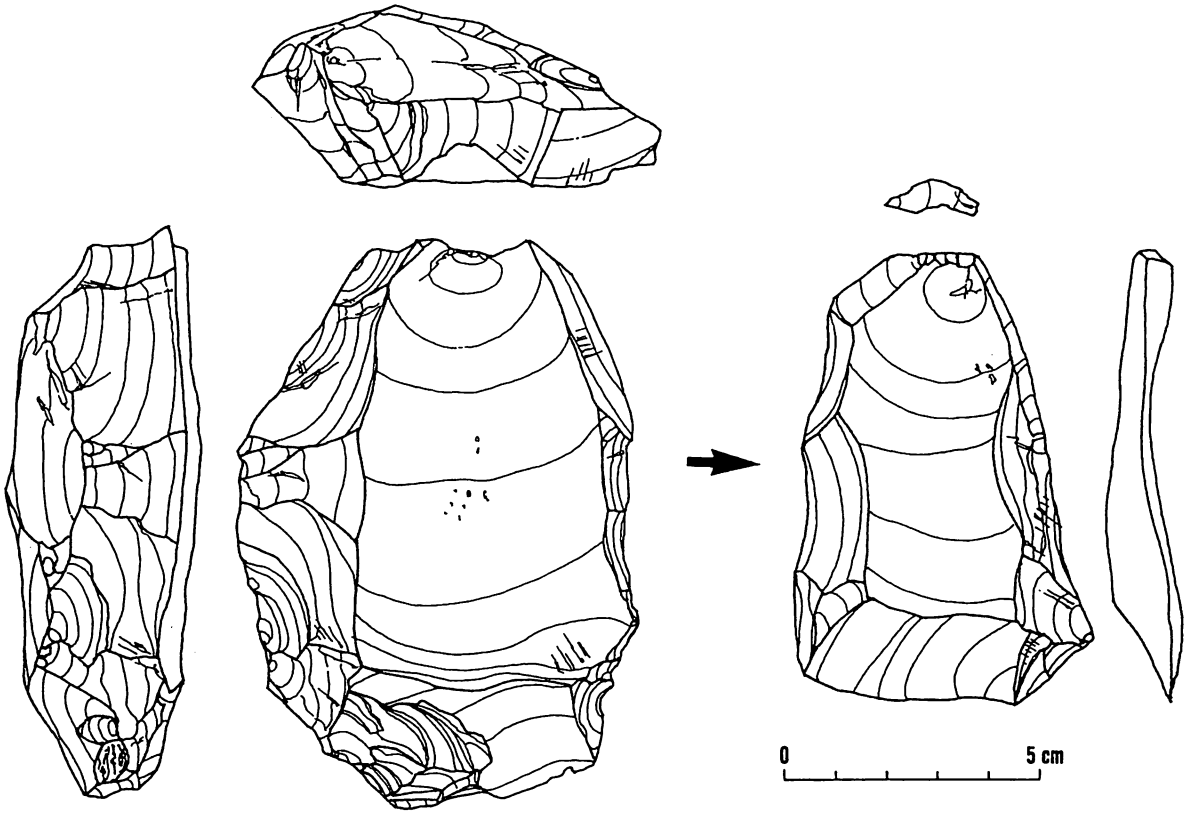


図３　会話と身振りの教示による第１グループの最終試験で学生が製作したルヴァロワ剥片

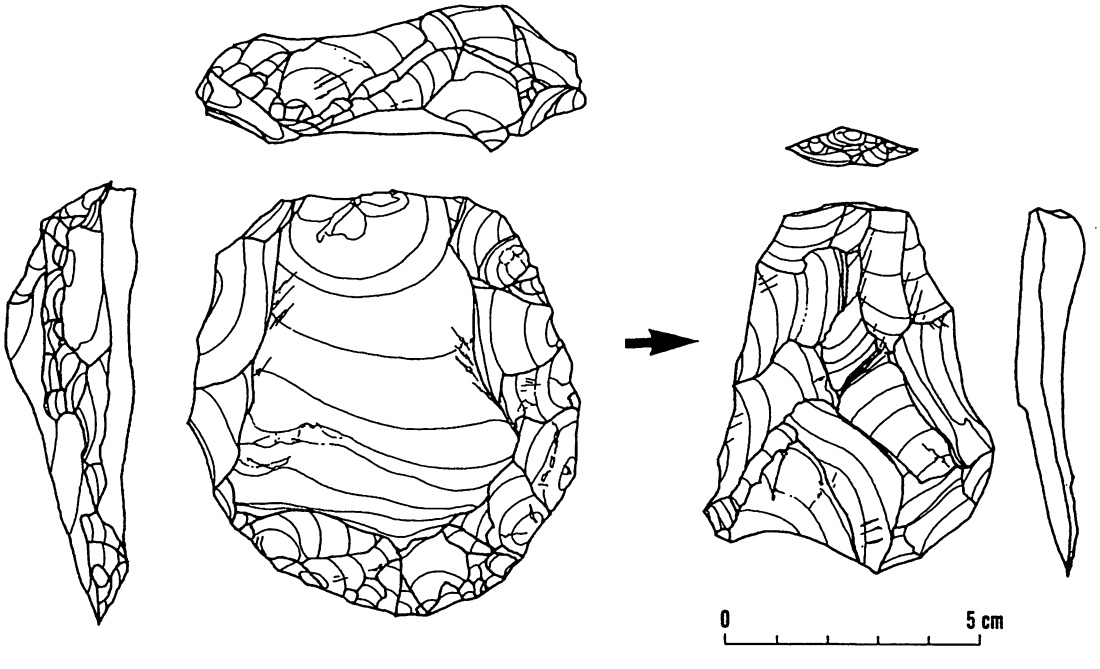


図４　身振りだけの教示による第２グループの実験で筆者が製作して学生に示したルヴァロワ剥片

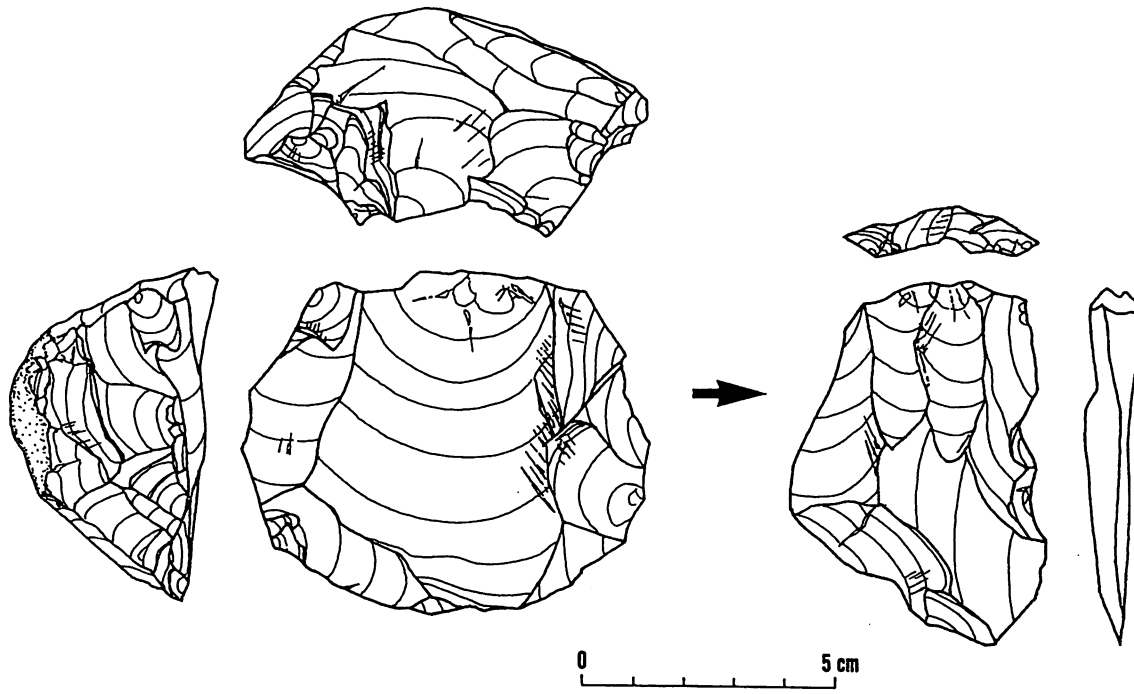


図５　身振りだけの教示による第２グループの最終試験で学生が製作したルヴァロワ剥片

写真１　会話と身振りの教示による第１グループの実験風景（皿沼地点）

写真２　身振りだけの教示による第２グループの実験風景（高瀬山地点）

景観と象徴

安斎　正人

先に長野県神子柴遺跡とその石器群の象徴性について問題提起を行った（安斎 1999)。遺跡の空間（地理）的象徴性を扱う場合、本来は往時の景観を復元したうえで考えねばならないが、神子柴遺跡の発掘調査報告書が未刊で古生態学的研究も行われていないので、前半は「景観」と「象徴」をキーワードとして、言及は方法論（景観考古学・象徴考古学）的可能性にとどめておき、後半は提起した諸問題の考古学的検証に当てたい。

1　風景と景観

明治期の日本において、西欧の美的モデルが大量に導入されたことによって、少なくとも当初は教養あるエリート層の間には、日本の自然に西欧の価値の浸透した視線を注ぐ傾向が生じた。またその行き過ぎから反対方向の反応もともなっていた。たとえば地理学者の志賀重昂は、一方では西欧の地理学に学んだ「景観」という客観的な視点を取り入れていながら、他方で『日本風景論』(1894)で執拗に日本の風景の特異性を強調した。ここで注意しておかなければならないのは、「風景」という用語は類義語の「光景」「景色」さらには「山水」と同様に、中国渡来の言葉で、この言葉と並んで中国から導入された一揃いの美的図式が平安時代に、文字通り日本の風景を成立させたということ、そして他方で、風景の質という観点からも生態学的な観点からも、高度経済成長期に著しく悪化した生活環境の質が問われ出した1980年代を通じて、アメニティという概念とともに、景観という問題が議論の全面に押し出されてきたということである（ベルク 1990)。樋口忠彦の著作『日本の景観』(1981)が好評をおさめたのもその一例である。樋口は、ふるさとの原型としての日本の景観を、盆地の景観―「秋津洲やまと」型景観と「八葉蓮華」型景観―、谷の景観―「水分神社」型景観と「隠国」型景観―、山の辺の景観―「蔵風得水」型景観と「神奈備山」型景観と「国見山」型景観―の７類型に分けて説明し、現代の都市に生きられる景観を作っていくためにそれらを生かすべきであると主張している（樋口 1993)。日本的で典型的な景観とされた上記の景観は弥生時代以降、特に古代を意識して設定されたものであって、私たちには縄紋時代以前の景観を探る課題がある。

日本同様に古い人工景観の歴史をもつ英国においては、「風景」(scenery) と「景観」(landscape) は近代に入る時点で区別されていたようである。風景が人々の審美的・芸術的対象となるのに対し、景観―美的・詩的・倫理的・物質的あるいは超現実的―は風景の中から論理的・哲学的に訓練された目でもって読み取らねばならないものである。長い年月にわたって変遷を繰り返してきた、その最終点である今日目に映る景観は、氷山の一角のようにその実態の一部に過ぎず、素人の目には景観を形成してきた以前の歴史的痕跡の多くは隠されてしまっているからである(Roberts 1987)。

2　関連する隣接研究分野

現代考古学は他の学問との共同研究領域を急速に広め、適切な言葉ではないが貪欲にそれらの諸成果を吸収しようと努めている。例えば、近代的な学問の形成期以来、地質学との関係が深かったが、近年、さらにスコープの広い地球科学との間で「地球考古学」(geoarchaeology)を現出させている。「考古学的諸事象の解釈や環境復元に、地球科学とりわけ地形学や堆積学を貢献させること」、あるいは、「地球科学の方法と概念を用いた考古学的調査を意味する」と述べられているこの学問領域（日下 1991)では、「地球考古学」(geoarchaeology)の表題をもつ国際的な洋雑誌が1986年に創刊され、毎年8冊ずつ刊行されている。同様に、近代的な学問の形成期以来同じく関係が深かった生物学に、より比重を置いて花粉・プラントオパール・珪藻分析など古生態学の方法を応用する「環境考古学」がある（安田 1980 、シャクリー 1985)。わが国でのこの分野は、伝統的な貝塚研究との関係もあって、「動物考古学」が突出している。同名の表題の和雑誌が1993年から刊行されている。

「過去の自然環境と人間活動との関係を明らかにしようとする学問分野」である歴史地理学（古地理学）と考古学とは、古代景観の復元作業などにおいて共通の土俵を有するところが多い。摂津・河内・和泉の復元景観図（日下 1991)を見ると、弥生時代ころの景観と比べ、6～7世紀ころの景観はさまざまな人工景観が新しく生まれている点で大きく異なっている。言うまでもなく、明治期以降、特に1960年代からの「列島改造」が生み出した今日の人工景観は、そうした古代の景観とは比べようもないほど異なってしまった。つまり言いたいことは、田園景観の形成された農耕社会以前の、縄紋時代および寒冷気候下の旧石器時代を研究対象とする場合、それらの時代の野生の景観は今日の田園空間・都市空間からはまったく想像もつかないほど違っていた、この点を前提にしなければならないということである。

小牧実繁が樹立した歴史地理学の研究分野において、より考古学に比重を置いたものに小牧の研究を継いで藤岡謙二郎が提唱した考古地理学がある。「広義の歴史地理学に属し、土地や地域に結びついた遺跡や遺物を決め手の資料に使って、人類時代の過去の地理を明らかにする学問である」（小野 1986a）。さらに考古地理学の研究分野から「高地性集落」研究などの先鞭をつけた小野忠熙は、古代や弥生時代に限らず、更に時代を遡って縄紋時代や旧石器時代にも探究の手を広げた。本州西端部の下末吉海進期並行の海岸段丘で発見したとされる旧石器（「綾羅木Ⅰ文化」）の報告が、1960年代前半の「前期旧石器存否論争」に一石を投じたことは、旧石器研究史上のよく知られたできごとである。小野は、段丘地形やそれをつくる更新世の地層と結びつけて、山口県磯上遺跡の水晶製旧石器とその集積跡や島根県鳥ケ崎遺跡などの玉髄系石材の旧石器類を中期旧石器時代であると主張している（小野 1986b）。前期旧石器時代の石器類が各地で見つかってきた。当時の地形は今日とはまったく異なるものであったが、各遺跡の発見者である藤村新一はそれらの痕跡的な「化石地形」を読み取る能力を備えているということであろう。

ところで近年には、歴史地理学の分野でも遺跡をつつむ環境の復元に力を注ぐだけでなく、「魏志倭人伝」、『記記』、『万葉集』、各『風土記』などの記述・描写、および古地図から、古代の空間の意味を解き明かす作業の一つとして、記号論的な操作も試みられている。千田稔が『風景の考古学』の中でそう述べている（千田 1996)。景観の自然科学的な意義

だけでなく、人文社会的意味すなわち人や社会にとっての景観への言及として注目される。

3 「主体的環境」もしくは「表象的環境」

かつて拙著『無文字社会の考古学』の中で言及したテーマ（安斎 1990:175-178)であるが、本コンテクストにおいてこそより適切な記述であるので、以下に再論しておく。

アイヌの民族誌的調査に長年携わった渡辺仁によれば、アイヌ集団の行動をその生活場所（自然）との関係において機能する一つのシステムとして理解するには、現代の研究者が認識する客観的環境との関係のみならず、アイヌにより観られ、感じられ、認められるままのものとして、すなわちアイヌのコスモロジーに反映されているアイヌ自身にとっての「主体的環境」との関係を明らかにする必要がある。現代生物学の動植物でおおわれた地表は、アイヌにとっては一時的に仮装したカムイの群れにおおわれたものとして存在する。アイヌの自然環境たる地理的現象—山・河川・平地等—は彼ら自身に認められる環境としては、カムイ群の活動の場にほかならない。それがまたアイヌ集団の行動を条件づけてもいる（渡辺 1963:291-294)。

もう一つの例を挙げておこう。アフリカの狩猟採集民ピグミー・ミブティ族と焼畑農耕民バンツー族とは、同一の環境（熱帯雨林）について対立する表象を作りあげている。モーリス・ゴドリエ(1986:35-40)によれば、ピグミーにとって森はやさしく迎えてくれる友好的で好意的な現実を表していて、この森をバンツー族が開墾した空間と対立させている。バンツー族の開地はひどく暑くて、水は汚れ、危険で、病気は数知れないと考えているからである。一方バンツー族にとって森は敵意に満ち、生命の危険にかかわる現実であって、常に大きな災厄が待ち受けているので、滅多に足を踏み入れてはならない場所である。この対立は何よりも異なる技術、経済システムにもとづいた森の二つの利用形態に対応している。この例から明らかなように、環境の社会的知覚は技術・経済システムの機能的制約の、多少とも正確な表象から作られているだけではなくて、価値判断や幻想的信念からも作られている、とゴドリエは言う。

この二例のように人間の行動を律しているものが、近代的精神によって弁別される客観的存在に限らず、実は虚構の実在性しか有していないものがあることを、哲学者廣松渉も『生態史観と唯物史観』(1986)の中なかで次のように述べている。

「人々の〈環境〉は、「自然的環境」と「社会的環境」とには限られない。これら二種の環境に関するかぎり、或る意味では動物生態系の一般則ということもできよう。ところが、homo symbolicus(象徴人）とかhomo religiosus(宗教人）とかとも呼ばれる所以であるが、人々は—記憶や予期のdispositionを篭めた相で現前世界を観取するという域を越えて、—情報的に伝達された世界像や共同的に観念された世界像を環境としつつそこに〈内一存在〉している。…人間の場合、感性的知覚に現前する世界だけでなく、観念的に構築された世界をも環境としつつ、この「表象的環境」とのあいだにも一種の生態系を形成していること、このことが人間生態系の一特質として明記されねばならない」(162頁)。

更にこうも述べている。

「それは単なる頭の中の観念といったものではなく、人々の日常生活をアクチュアルに律するいうなれば外部的環境の一部なんですね。われわれの見地から分析すれば、それは共同主観的に形成された観念的世界であるにしても、当事者たちの日常意識にとっては、

れっきとした外部的環境世界の一部をなしている。…規範意識といったことも含むこの表象的世界への内存在という点で、単に言語をもつといった次元をこえて、人間生態系の特質があると思うのです」(177 頁)。

渡辺の言う≪主体的環境≫もしくは廣松の言う≪表象的環境≫は、日本考古学において埒外に置かれている。しかしながら、いつの日かまちがいなく先史学の基本的解釈概念となってこよう。経済的合理性という現代人の見地から現代地理学的分析によって設定した同心円状のキャッチメント・エアリアを通文化的に適用する方法を先に紹介したが、自分の属する空間の外側にありとあらゆる種類の空想や連想や作り話で充満させた、よそよそしい≪向こう側の土地≫式の先史人の≪心象地理≫が、先史人の行動を規制した要因に数え上げられるとするならば、考古学者が仮定した一般的行動圏というものはいかに実態と掛け離れたものに変じてしまうか、このことを心に留めておく必要がある。先史人の≪心象地理≫は資源を知覚することに限定されまい。技術・時間・社会的要因などが作用する距離感、経済的・社会的・象徴的・美的意味を込められた位置観、物理的かつ社会的接近の難易度等々、複合的に生み出された空間感覚で描かれたものであろう。

4 景観考古学

上で述べたような基本的な図式はもちろん、自然環境の特殊性すなわち地域生態系、社会集団が有する適応技術、そして言うまでもなくその象徴体系にしたがって、異なる形で表現された。これら３つの次元のファクター（自然、技術、象徴的認知）が結合して、各々の社会が自然に対してもつイメージを決定したのである。日本では確実に、弥生時代の水田稲作の導入が縄紋時代の景観―空間（山・森）―の知覚のあり方を根本的に変えたのである。(この部分未完)

空間および景観を重視するセトルメントアーケオロジーの出現によって、人間活動の痕跡を探る私たち考古学者の視線は、「点的な遺跡」を越えて地域内および地域間に分布するさまざまな関連場所に向けられつつある。こうした観点はさまざまな名称をもつ。バーナード・クナップとウェンディ・アシュモアの表現を借りれば、「遺跡のない考古学」(siteless archaeology)「遺跡外の考古学」(off-site archaeology)「分布考古学」(distributional archaeology)、さらには、景観考古学の範疇に入るいくつかのアプローチがあるということである(Knapp and Ashmore 1999)。伝統的な野外考古学で謂う「遺跡」に納まらない―条里制、水田・畑地、町並み、街道など―広範囲に配置された遺構群や、遊動民の臨時的な活動が残した軽微な痕跡の検出が、日本考古学において、皮肉なことに経済の高度成長期の行政調査の広域発掘によって現実化している。これらの新しい考古学的データは人と土地の関係が複雑で微妙であることを示唆している。これらのデータを有効に使って、人と遺跡・場所・自然地形などとの関係に関する時間的変化と空間的変遷を解明するための方法論が、すなわち全体的視野で景観を見渡す景観考古学なのである。

今日、景観の概念で最も顕著なのは社会的、象徴的次元にかかわることである。クナップとアシュモアは過去の景観つまり考古学的景観を性質的に、(constructed landscape)、(conceptualized landscape)、(ideational landscape)、の実質３つに分けて論じている(Knapp and Ashmore 1999)。(この部分未完)

景観を取り扱う際に重要なことは、地域の自然地形が象徴の源泉であり主題であるとい

うことである。つまり、景観はそれを眺める人と無関係な客観的外観ではなく、社会的・政治的・観念的に条件づけられた個人や共同体が、さまざまに意味を投げかけた対象なのである。そこで、過去の象徴的表現の形態と意味を解明するさまざまな分析に有効であると言われている、アンソニー・ギデンズの「構造化」(structuration)、ピエール・ブルデューの「慣行」(pratique)、マーガレット・コンキーとジョアン・ジェローの「フェミニスト理論」(feminist theory)、クリストファー・ゴスデンやジュリアン・トーマスの「現象学」(phenomenology)など、ポストプロセス考古学で応用されてきた諸概念が、この景観考古学においても多用されている(Ashmore and Knapp 1999)。

5 象徴考古学

考古学に最も関連の深い学問分野のひとつは人類学であって、米国の文化人類学、英国の社会人類学、仏国の構造人類学などの影響下に、「人類考古学」、「社会考古学」、「構造考古学」などの用語や方法が提唱されてきた。本稿のようなテーマを掲げれば、今後は当然、認識(認知)人類学や象徴人類学の研究動向に目配りする必要が生じる。プロセス考古学とポストプロセス考古学との間にみられたような、原理的立場、方法、理論の違いが認識(認知)人類学と象徴人類学の間にも存在するようである(松井 1989)が、現代考古学にかかわり、私自身が歩んできた認識論的道程を踏まえれば、今後いっそう象徴人類学(青木 1984)に関心を向けていかざるを得まい。

象徴を問題にするに当たって、まず、人間の社会現象・文化現象の、同じ時代に通用しているパラダイムでは説明できない部分を掬い上げる有効な手段として、象徴の問題を表面に出したクロード・レヴィ=ストロースの「象徴的二元論」に注目したい。彼の構造論においては、見えない部分で人間の行為を決定している構造と目に見える現実をつなぐのが象徴である。(この部分未完)

6 神子柴遺跡とその石器群の意味論

民族考古学的観察を拠り所として、場所(遺跡)の機能の多様性に注意を喚起させたルイス・ビンフォードの論文(Binford 1982)に触発された、遺跡内および遺跡間の空間分析とその解釈法が、旧石器時代及び縄紋時代の研究において方法論的足場を確保してきている。プロセス考古学に足場を置きながら、南西ドイツの旧石器時代最終末から中石器時代にかけての景観の中に狩猟採集民の活動を探究した事例研究も現れてきている(Jochim 1998)。しかしその研究も経済活動に焦点を当てた生業・居住システム論であるので、当初から遺跡・遺物の特異性が指摘されてきた長野県神子柴遺跡の分析と解釈には適用できないと判断した。神子柴遺跡とその出土石器類は、発掘調査以来、いろいろに解釈されてきた。ひとつの遺跡がいろいろなことを意味するという意味で、神子柴遺跡の多義性は象徴性研究の出発点にふさわしいわけである(安斎 1999)。イアン・ホダーの謂う意味で、この遺跡の多義的な考古学的コンテクストを「読む」必要がある(Hodder 1986)。

人類学的知見からの類推によれば、神子柴遺跡を残した人々も、空間に区切りをつけて命名し、分類を行い、そのうえで、個々の空間にさまざまな文化的・社会的意味を付与していたと思われる。その結果、空間はさまざまな価値を担うシンボルとなり、彼らが属する社会の成員としてもっているコスモロジーを反映した象徴性を帯びるようになっていた

であろう。とくに、「空間の二元的分類のもつ象徴的意味」については、より深い考察が必要である。それは2つの問題に分けられる。

ひとつは、社会的統合のための祭儀・儀礼とはどのようなことであったろうか。聖地での祭祀と、いわゆる通過（人生）儀礼がある。誕生儀礼・成人儀礼・結社加入儀礼・婚姻儀礼・葬送儀礼などである。この場合の解釈には、その種の祭祀・儀礼がどのような空間（場）にどんな物質的痕跡を残すか、という人類学的知識が前提となる。

それでは、神子柴遺跡の残された土地（場）とはどのような空間であったのだろうか。（この部分未完）

まず、聖地であったかどうかが問われる。『世界宗教大事典』では、「聖地」は次のように定義されている。「信仰または伝承によって神聖視される一定の地域をいい、崇拝・巡拝の対象とされるとともに、みだりに出入りすることのできない禁忌の場所でもある。聖地は大きく分けて、①山、森、林、岩、川、樹木、泉、湖、井戸などの自然景観にかかわる場所、および、②聖者や聖人、修行者や英雄にゆかりのある霊地、本山、墓所、という2種の系列が考えられる。とはいっても、実際は①の自然景観と②の霊地における諸建造物とが一体となって聖地空間を形成している場合が多い」（山折 1991）。一昨年、現地に立ったときに、上記の定義にそうような自然景観やメルクマールとなる巨石のような目印を目にすることはできなかった。したがって、その方面から積極的に聖地説を提示するわけにはいかない。（この部分未完）

もうひとつは、集団間の贈与・交換の場で執り行われる活動である。贈与・交換財としての神子柴型石斧・神子柴型尖頭器の意味の考察が課題となる。私自身は考古学の新しい解釈法を紹介した論考（安斎 1987）の註の中で、この問題に初めて言及した。「この新しい形態の石斧（及び尖頭器）はその魅力と新奇なことがいっしょになって、当初〈生活財〉としてよりも〈威信財〉・〈交換財〉として受容され、おそらく動揺する社会の統合のシンボルとしての機能を与えられていたのが、…儀器・祭具として機能したかもしれない。細石刃文化期から神子柴・長者久保文化期にかけては社会的に不安定な時期であった。地域諸集団はその文化的同一意識の再確認と社会的統合のために祭儀活動などの増大・強化に努めていたと推測される。隣接集団は機会を作っては頻繁に集合を繰り返していた。…散会に際し次回に備えて、各集団を象徴する石器が収蔵あるいは埋納されたのかもしれない。出現期のデポのこのような性格は、縄文草創期にはいって次第に経済的なものに変化していったと思われる」。

自然環境の大きな変化に応じて、北海道方面から南下してきた細石刃石器群を装備する人々と遭遇した、在地の槍先形石器石器群を装備する人々は、深刻な文化的社会的変質に直面した危機的状態で、従来のネットワークの利用法を拡大して、拡大ネットワークの中で伝統的文化と新変化を折り合わせる効果的な象徴を創造していったと推測し、人々の象徴的行動を読み込もうとしていたのである。神子柴遺跡が石斧の製作者と槍先形尖頭器の製作者と掻器の製作者の交換の場という解釈もあった（栗島 1990）が、そのような交換の場であったとしても、個人的／日常的／経済的交換の場というよりも、集団的／非日常的／象徴的交換の場であった、という方向で探究をすすめていきたい。

上記のように「祭祀・儀礼の場説」および「贈与・交換の場説」のいずれの場合にしても、神子柴遺跡の残された土地（場）の存在こそが、集会を契機に結ばれた集団間の紐帯

を確認し、維持・強化する象徴として機能していたことが推測される。

「民族誌のデータでは色彩は象徴的な意味、例えば、黒色は男と関連し、東の方位を表わし、制御できる肯定的な超自然の力と結びついているのに対して、赤色は女、西、危険で手に負えない超自然の力を意味している、ということがある。尖頭器は狩猟具ではあるが、シャーマンの儀礼具でもあり、その際には色彩の象徴的意義が重要であった(Whitley 1998)。神子柴の尖頭器が祭祀・儀礼のコンテクストで用いられたとすれば、尖頭器が（石材）の二項対立的あり方ー大型と中型、精巧と並などーから、珪質凝灰岩質頁岩（あるいは玉髄）と黒曜石に色彩象徴論的意味が込められていたかもしれない。最大の「神子柴型尖頭器」が下呂石製であるという点さえも、この石器群の象徴的、社会的、政治的側面に関する情報源たり得るかもしれない」と、先に記述した（安斎 1999)。

ところで、アフリカ諸文化を一般的にみた場合、白と黒が象徴している事象はかなり似かっている。白はポジティブな価値に結びつき、黒はネガティブな側面を示すという傾向がみられる。さらに多くの社会では、白は男性そして右手に、黒は女性そして左手に関連しているようである。ただし色彩語彙としての白と黒が、象徴的次元においてプラスの価値とマイナスの価値の両方ともを意味しうるのである。ンデンブ族(Ndembu)の社会において、白／赤という２色の対立が男性／女性を象徴するという表面的な二項の対立が、もう一つ「陰の第三者」とでも　うべき黒が存在する、より大きな三極構造の中で機能していることを明らかにしたヴィクター・ターナーの業績（Turner 1967)を踏まえ、小川了が西アフリカの半農半牧民フルベ族の象徴的次元での白／黒の対立と、白と黒の象徴するところが実は両義的なものであることを示している（小川 1989)。前回と今回の民族誌的引用にみるように、色彩象徴論的意味の問題は各社会集団の世界認識にかかわることであって、イーミック(emic)な考察を必要とする。そのため、神子柴集団へのその概念の適用上の問題をめぐっては議論は避けられない。すなわち、「一群の黒曜石片（図１－55～66、74～93)は一個体に接合していたが、人為的打剥ではなく、加熱による剥離であった。人為的加熱処理であれば、黒曜石の石塊をバラバラにしたそうした行為の象徴的意味が問題となろう」とも記述した（安斎 1999)ように、当該黒曜石の石質にかかわる要不要（機能論）だけではなく、黒い石の破砕行為（認知論）を問題視したことに対しても、見解は分かれるであろう。

7　考古学的検証：遺跡間の比較研究

（この部分未完）

引用文献

青木　保（編）1984『象徴人類学』現代のエスプリ別冊、現代の人類学４、至文堂。

安斎正人 1987 「先史学の方法と理論―渡辺　仁著『ヒトはなぜ立ちあがったか』を読む(4)―」『旧石器考古学』35、1-16 頁。

安斎正人 1990 『無文字社会の考古学』六興出版。

安斎正人 1999 「狩猟採集民の象徴的空間ー神子柴遺跡とその石器群ー」『長野県考古学会誌』89 号、1-20 頁。

小川　了 1989「フルベ文化における白と黒」松原正毅（編）『人類学とは何かー言語・儀

礼・象徴・歴史ー』87-108 頁、日本放送出版協会。
小野忠熙 1986a『日本考古地理学研究』大明堂。
小野忠熙 1986b「Ⅶ　旧石器文化の考古地理」『日本考古地理学研究』 321-368 頁。
日下雅義 1991 『古代景観の復元』中央公論社。
栗島義明 1900 「デポの意義―縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖―」埼玉県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』第７号、1-44 頁。
ゴドリエ M. 著、山内　訳 1986 『観念と物質―思考・経済・社会―』法政大学出版局。
シャクリー M. 著、加藤晋平・松本美枝子訳 1985 『環境考古学』（Ⅰ・Ⅱ）、雄山閣。
千田　稔 1996 『風景の考古学』地人書房。
樋口忠彦 1993 『日本の景観―ふるさとの原型―』ちくま学芸文庫。
廣松　渉 1986 『生態史観と唯物史観』ユニテ。
ベルク A. 著、篠田勝英訳 1990 『日本の風景・西欧の景観―そして造景の時代―』講談社現代新書 1007 。
松井　健 1989「認識人類学と象徴人類学」松原正毅（編）『人類学とは何か―言語・儀礼・象徴・歴史―』305-334 頁、日本放送出版協会。
安田喜憲 1980 『環境考古学事始』ＮＨＫブックス。
山折哲雄（監修）1991『世界宗教大事典』1085-1086 頁、平凡社。
渡辺　仁 1963「アイヌのナワバリとしてのサケの産卵区域」『民族学ノート』岡正雄教授還暦記念論文集、278-297 頁、平凡社。
Ashmore,W.and A.B.Knapp(eds.) 1999 Archaeologies of landscape: contemporary perspectives. Blackwell:Oxford.
Binford,L.R. 1982 The archaeology of place. Journal of Anthropological Archaeology 1(1):5-31.
Hodder,I. 1986 Reading the past: current approaches to interpretation in archaeology. Cambridge University Press:Cambridge.
Jochim,M.A. 1998 A hunter-gatherer landscape: southwest Germany in the late Paleolithic and Mesolithic. Plenum: New York.
Knapp,A.B. and W.Ashmore 1999 Archaeologicallandscapes: constructed, conceptualized,ideational. In W.Ashmore and A.B.Knapp, pp.1-30.
Turner,V. 1967 Color classification in Ndembu ritual: a problem in primitive classification. In The forest of symbols: aspects of Ndembu ritual,pp.59-92. Cornell University Press:New York.
Roberts,B.K. 1987 Landscape archaeology. In Landscape and culture: geographical and archaeological perspectives,edited by J.M.Wagstaff,pp.77-95. Basil Blackwe ll:Oxford.
Whitley,D.S. 1998 New approaches to old problems: archaeology in search of an elusive past. In Reader in archaeological theory:post-processual and cognitive approaches, edited by D.S.Whitley, pp.1-28. Routledge:London.

参考文献

『用語解説　現代考古学の方法と理論（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』（同生社）の以下の項目
「環境考古学」「記号論」「居住形態」「空間分析」「景観」「交換」「古環境復元」「コスモロジー」「祭祀」「象徴」「セトルメントシステム」「葬送」「認知考古学」「リダクション」

スタイルとエスニシティー

田村　隆

スタイルとエスニシティーという問題系は重い課題である[1]。もちろん，この背景には情況的な課題があるが，ここではふれない[2]。ところで，振り返ってみれば，この国の考古学においても，常にスタイルとエスニシティーという問題系は主題化されてきた。ただし，それは初発から「型式」や「文化」等々のという天下り的な実体概念に憑依されてきたのだが。いや，だからこそ，それは情況との接点を切断し，精緻化というスパイラルを上向できたのである。

わたしたちはこのスパイラルにそってどこまでもすすむこともできるが，現象学的ないい方をすれば，超越論的な還元の道を選択することもできる。スパイラルという自然主義的なドクサをエポケーし，本当に切実な課題を再確認するわけである。そのためには，はじめに問題系の構図を俯瞰しておく必要があるだろう。都合のよいことに，Shennanが関連する事項を手際よくまとめてくれているので，これに従って論点を簡単に整理しておくことにしよう[3]。なお，Shennanの論文を訳出して文末に付載したので，まずこれを参照していただきたい。

1　合理主義と相対主義という枠組みについて

Shennanは，せっかくHackingに定位しながら，最終的にQuine的なホーリズムを断念することによって，合理主義と相対主義の中間に身をおくことになる。しかしカント以降の思潮を回顧するとき，そのようなおあつらえ向きの場所が提示されたことはなかったはずである。また，HackinngがDavidsonに依拠していることは明らかなので[4]，ここでさかのぼってDavidsonの考え方にも簡単に言及して論評する。

私たちが異言語あるいは異文化（文化とは言語の異称と考えてよい）と直面した場面を考えてみよう。DavidsonはTarskiから継承したいわゆるT文にもとづいてそれらが解釈可能であることを提示した[5]。ただし，これには「慈善と博愛」という対象に向けられる態度条件がつく。訳文中の「推論の仕方」あるいは「思考の筋道」がこの態度条件のもとでのT文定理の運用に相当しよう。ここまではよく理解できるのだが，ついでHortonが参照されるに及んで，議論は核心から大きく逸脱し，合理主義と相対主義の中間地点へと浮遊していく。私たちの素朴な経験からいっても，理解の階層性（「一次的理解」，「二次的理解」）など思いもよらないし，そもそもHackinngを引用しておきながら，「解釈の妥当性」の基準をもちだすなど理解に苦しむ（これではT文そのものの妥当性を疑うことになり，無限後退におちいってしまう）。

要するに，Shennanは依然として，過去世界・過去時間の実在性というカント的な世界－歴史観の内部に捕縛されているというべきだろう。この宿痾の繋留の舫をとかない以上，

Shennanが実演したように自家撞着におちいるとすれば，結論的には，この枠組みの外側に位置する大森荘蔵の制作説をとる以外にはないだろう。大森はカントのいうもの自体が存在しないのと同じように，過去自体ともいうべき過去実在を一蹴する。大森の所説をここでは詳しく述べることができないが，結論的にいえば，考古学者の対象とする過去とは，考古学者による純然たる制作物であり，かれは実際の過去を再構成しているわけではない。どのように精緻な考古学的言説も，縄文部族の長老の歴史語りと異なるところはないというわけである。

しかし，制作された語り（考古学的言説）の真理値が評価されなければ，考古学は科学とはいえない。真理が不定であるため勝手な語りが横行して，このシンポジウムも大混乱におちいってしまうだろう。大森によれば，シンポジウムの混乱を回避するためには，次のような，いわれてみればまことに常識的な３つの点さえしっかりとわきまえていればよいのだという。

1　証言の一致。複数の人の想起命題[7]が一致するか，整合していること。

2　想起命題が自然法則，真理法則，経済法則などといった私たちが維持している生活世界の仕組みや，きまりと矛盾しないこと。

3　物証。物理的な世界としての現在と円滑に接続すること。

したがって，私たちは成長につれて「過去」や「歴史」を学習によって制作し，また，新しい「過去」や「歴史」が制作されていく。制作とは社会的に制作された想起命題の集合に組み込まれることであり，また，いつもすでにそこから逸脱する契機をもっている。さらに，ここから制度という大きな問題が派生する。

2　文化概念について

次に主題的に検討されるのは文化概念と，文化概念の政治的機能の２点である。Shennanははじめに後者を議論しているが，逆の方がわかりやすい。すでに前項でふれたように，文化とは制作物以外の何ものでもないので，あらゆる文化実体説は棄却されなければならない。ところで，Shennan論文中の文化実体説とは，文化を「部族」，「社会」，「民族」等の実体的な集団と同一視する立場をさすものとされている。ありうべき誤解を避けるために一言注意しておきたいのは，文化を集団（共同性）に対応させることは一般に誤りではない（具体的には誤りである場合がほとんどであるが）。誤っているのは集団を実体化（つまりあれこれの先験的概念への割り振り）する立場であり，文化を実体的集団の記号とみる観点である。残念ながらShennanもこの陥穽にはまっているようにみえる。

文化概念のネガティブな政治的役割に関して言及されるの人物といえば，やはりKossinnaの右に出るものはいない[8]。かれこそはナチの文化的イデオローグであり，文化概念を政治的に濫用した悪の権化であるという訳である。しかし，困ったことに，彼を論難すればそれでこと足りるわけではない。そもそもKossinna最大の誤謬は文化実体説をとったことにあるのであり，クリムのKulturvolker説に立ち，高文化の生物学的優越性（＝金髪・長身・創造的，つまりゲルマン民族の文化）を主張したことにあるわけではない（もちろん，現在こうした理念を額面どおり信奉する人は少ない）ことに注意しよう。この誤謬はShennanも共有しているので，Kossinna一人を論難することは誤りである。

次に，考古学的な文化概念が政治的に利用されたことを反省すべきである，という主張

についてであるが，この主張にもにわかには賛成できない。考古学とは社会的に制作された集合的な語り存在であるとすれば，それはいつもすでに社会的再生産（政治から独立した社会的再生産などありえないことに注意）に参入しているなずである。とすれば，同じ大学関係者として，Kossinnaはドイツ社会の再生産に，Shennanは英国社会の再生産に寄与していた，あるいは，しているにちがいない。それならば，いったい何に準拠すれば，Kossinnaは反動であり，Shennan はそうではないと判断されるのだろうか。そのような超越的な判断基準あるいは準拠枠が存在するとでもいうのだろうか。

「それはさしあたり民主主義である」という回答をする人は多いかもしれないが，これとても「さしあたり」という限定詞付きの留保命題である点に注意した。また，民主主義のかわりに歴史的判断を対置したとしても事情は同じである。つまりそうした超越的準拠枠などどこにも存在しないのである。何故ならば，論理的にいって，仮に超越的準拠枠を他者に強制したら，その時点でその立場は事実上反動思想に転化するからである。ここにShennanのジレンマがあるにちがいない。どのような文化概念を表明したとしても，政治的でない考古学的言説など存在しないとことを肝に銘じるべきである。同時に，本当に反省されなければならないのは，考古学が政治的にニュートラルであるという楽観主義である[9]。

3　同族性の評価をめぐって

本節ではBentleyの所説が援用され，同族性とハビトゥスとの関連性が検討される。この概念は次節とも密接に関わるので，ここで必要な説明をしておこう。さて，ハビトゥスという用語はラテン語〈habeo〉に由来し，一般にカタカナ表記されるが，「慣習的行動」とか「型」，あるいは不適切であるが「実践」などと訳される場合がある。ギリシャ語ではヘクシスという。ハビトゥスとはBourdieu自身によって「持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり，構造化する構造として，つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造」と定義されている[10]。つまり，それは慣習化され（持続性），時に揺れ動き，変換される（移調可能性）行動・思考・知覚・表現を生みだし，それを組織化するための生成・組織原理（心的諸傾向のシステム＝構造）であり，また，そのような行動等によって形づくられる構造である。

このハビトゥスの特質は次のように要約されている[11]。

1　社会化の所産としての集団的被規定性：それは社会化の中で獲得されたもの（acquis）であるから，集団ごとに固有性をもち，また容易には変わりにくい慣性，持続性をもっている。

2　実践のノウハウとしての機能：その習得の過程では無意識のうちに，ある目的適合的な実践のシェーマが獲得され，それが行動のノウハウ（sazoir-faire）として機能する。

3　恣意性の自明化：ハビトゥスは知覚や思考の様式として一定の表象作用を伴うが，その根拠を問う立場からすれば恣意的であるような表象が，そこではしばしば暗黙化され，自明視されている。

4　「自発的」な作動：ハビトゥスは行為主体のうちに血肉化された知覚，思考，行為の傾向であるだけに，明示的な規範やその規制なしに作動するものであり，その限り

ではしばしば「自発性」を表示するような感情とともに作用する。

以上によって，ハビトゥスが同族性（これはスタイルと同義である）の根本的な生成原理であることはよく理解されるだろう。なお，Shennanは同族的なアイデンティティーと国家形成の問題に拘泥しているが，これについては次項でふれる。

4　スタイルとアイデンティティーについて

ここではスタイルが主題化されているが，プロセス考古学，Wobst，Wiessner，Sackettといった周知のメニューにしたがって検討がすすめられている。特に，Wiessnerによる標章としてのスタイルと自己表現としてのスタイル，そしてSackettのアイソクレスチックな変異（スタイル）[12]という三者が検討されている。これについては人類学者や考古学者がスタイルを分類的に記述する一つの方法の提示ということであり，とりたてて問題はないだろう。重要なのは（Wiessner 1989）における，あるコンテクストが様式的な観点を生成するという指摘である。

既存のスタイルの意図的な模倣といった特殊な場合を除外すれば，私たちのライフ・スタイル，つまり生活世界における立ち居振る舞いは次のように理解される[13]。

1　社会文化的可変性：解剖学的，生理学的なメカニズムに還元されることなく，社会や教育，世間のしきたり，流行，威光などによってさまざまな変化をとげる。

2　教育の絶対性：とりわけ教育は決定的な役割を演じ，教育によって身振りの大半は形づくられる。

3　教育の権威性：教育が目的を達成するためには何らかの権威が必要である。

4　サンクションなき規範化：教育によって形成された身振りは単に規則的な行動パターンにとどまることはなく，価値づけ（美しいとか，かっこいい）をあたえられてサンクションが明示されないまま規範化される。

これがモースのいう「身体技法」であり，これを承継するBourdieuの「ハビトゥス」にほかならない。そして私たちはこれを本源的なスタイルと呼ぶこともできる。とすると，本源的なスタイルはSackettのアイソクレスティックな変異を包摂していることがわかるが，この変異はスタイル変異の条件としては局限されたものであり，したがって，あまり理論的な有効性はもちえないことも明確になる。また，Wiessnerのいう自己表現としてのスタイルと標章としてのスタイルという区別は，あくまでも観点が決定するのであるから，これを実体的に区別とするわけにはいかない。つまり，生活世界において意識されることのない身体技法は，他者や異族（あるいは彼らのモノ）との邂逅や，想起という比較というコンテクストにおかれたとき，はじめてスタイルとして意識化されるのである。

以上によって，私たちはShennanの理解が決定的に誤っていることを知るのである。まず，彼はスタイルを実体的な範疇ととらえているばかりでなく，さらに，Wiessnerのいうコンテクスト依存性という概念を十分に理解していないことが指摘できるであろう。さらに，実体的な共同体把握（たとえば天下り的な国家概念）と実体的スタイル概念を接合するという二重の過ちを犯している。また，本質的にエスニシティーとは表現された，あるいは対自化，物象化されたスタイルのことであるとすれば，それはいうまでもなく本源的なスタイルにまで遡行して考察されなければならないのであり，Shennanのように実体化された共同性を前提とする議論によっては解明されないであろう。

5　考古学と本源的スタイル

最後に，これまで展開してきたスタイル論と考古学との関係について手短に展望しておきたい。昨年，Shennanとはサザンプトン大学の僚友であるGambleが『ヨーロッパ旧石器時代の社会』という著作を出版した[14]。ここでGmbleの採用した方法は，ボトム・アップ・アプローチと呼ばれるが，要するに先験的な共同体把握（トップ・ダウン的な）を一度括弧にくくり入れ（棄却するのではない），個人・風景・ネットワークという遠近法的な視点からみつめなおすことである。このアプローチの根底には本源的なスタイル（彼がルロワ・グーランから承継した「リズム」がこれに相当する）があり，また，ここに歴史の形成される竈が定位されることになるのである。

この成否は別にしても，チャイルドが『社会進化』において絶望視した（下部）旧石器時代の社会についてのシナリオ，Gambleはこれを物質的資本を媒介とする，ネットワーク網の拡張と総括するのだが，ようやく半世紀を経て提示されたわけである。いうまでもないが，この間に第四紀学や，霊長類学の飛躍的深化，そして考古学的な記録の精緻化と民族誌の豊富化という，いわば語りの素材は確かに充実したことが，この語りを可能にした要因であろう。しかし，本当に問題なのは，まさしく，そうした語りのスタイルであることを確認しておきたい。

注

1　この重さは，近代以降の思想史の森に分け入ってみればだれでも納得するだろう。それは，たとえば，ヘーゲルにあっては人倫的な実体に他ならず，これへの反措定としてハーバマスのコミュニケーション的合理性があり，一方，ウィットゲンシュタインには言語ゲームにおける生活形式があり，また，アルチュセールのイデオロギー論はブルデューのプラチック，ハビトゥス概念に承継されていく，といったように膨大な領域を横断している。

2　国家－市民社会の爛熟があり，そこにおける個の危機意識の深まりがあった。ひとびとは，世界再分割，世界戦争，そして局地戦争の頻発という悲惨な世紀を生き，また死んでいったのである。さらに，現代社会におけるもろもろの関係的な危機に想到しなければならない（注９参照）。課題の重い所以である。

3　Shennan,S.J. 1989 Introduction:archaeological aproaches to cultural identity.In Archaeological　approaches to cultural idenntitiy,S.J.Shennan (ed.), 1-32.

4　イアン・ハッキング（伊藤邦武訳）1989　『言語はなぜ哲学の問題になるのか』（勁草書房）12章及び付論参照。

5　「sはpの場合に，しかもその場合にのみ真である」という定理をT文という。無限の発話はこのT文によって解釈される。異言語理解にとってこれは必要十分な条件であるとみなされている。T文によって理解できない「言語」があったとしても，それは解釈者にとってはもはや「言語」とはいえない。したがって，全ての異言語は解釈可能であるということになり一件落着する。

6　大森荘蔵 1996 『時は流れず』青土社。特に，「物語としての過去」及び「殺人の制作」が参考になる。また，「他我問題の落着」以下のコギト批判も参照。

7　想起命題というのは「この石器はⅢ層から出土した」といった命題であるが，それが知覚風景ではなく，言語的な命題（石器も土層も科学的言語によって認知されているのである）であることに注意せよ。

8　例えば，Hodder,I. 1991 Archaeological Theory in Contemporary European Societies : The Emergence of Competing Traditions, In I.Hodder (ed) Archaeological Theory in Europe,The Last 3 Decades, Routledge.冒頭の印象的な一節が想起されるであろう。いろいろな面で彼の立場は，ハイデガーと似ているが，ハイデガーとの違いは，一方的に責め立てられるばかりで，冷静に評価されことが少ない点である。ただし，Trigger,B.G. 1989 A History of Archaeological Thought,Cambridge Univercity Press.第５章の冷静な記述も参照。

9　このことを山之内靖は現代社会に引きつけて次のように要約している（山之内靖 1996『システム社会の現代的位相』15頁 岩波書店）。「現代社会の根本問題に関する認識は社会構造の客観的分析から自ずと引き出せるという類のものなのではない。それは，教育やコミュニケーションの仕組み，情報の発信や伝達，科学の名において語る専門家のメッセージ，人間の身体に関する医療技術といった領域にあまねく根を張っており，目に見えない匿名性を帯びて機能するところの，記号による支配と関わっている。それが，脱物質的な財（つまりは記号と化し，言語的なコミュニケーションを介して伝達される文化的財）が資本増殖のメカニズムにおいて中心的意味をもつにいたった現代の特徴なのである。」（強調筆者）

10　ブルデュー（今村仁司・港道隆訳）1988『実践感覚』みすず書房　83頁

11　宮島喬 1994『文化的再生産の社会学』藤原書店　133-34頁

12　アイソクレスチックな変異という辞書にもでていない用語（事実Sackettの造語である）の意味は，選択的互換性における心的傾向性ということである。

13　注11文献　232頁

14　Gamble C. 1999 The Palaeolithic Societies of Europe,Cambledge University Press.なお，本書については，すでに筆者による翻訳が完了しており，機会があれば刊行したいと考えている。

（田村論文　付　載）

序章：文化的アイデンティティーへの考古学的アプローチ

スティーブン・シェナン

この本に収録されている論文のエッセンスは，文化の違いという現象が理論と実践にまたがる考古学のあらゆる分野で根本的な問題を提起しているという点にある。序章においてはこれらの諸問題と個々の論文のさまざまな観点からのアプローチを要約しておこう。

1. 合 理 主 義 と 相 対 主 義

特定の集団の考え方や関心の 所在は考古学者の資料に強烈な影響を及ぼす。その影響をうけた解釈には，例えば，このようなものがある。考古学者が作り上げた地図上での文化的影響を示す矢標の向きは，その考古学者がドイツ人であるのかそれともポーランド人であるのかによって異なるし（Martens 第２章），17世紀のニューイングランドの墓地の解釈は，それが自己の伝統の一部であるとみなしている生まれながらのアメリカ人の集団によって左右される（Nassaney 第４章）。一言でいえば，自分の立場によって世界の解釈は異なるのである。

真実とは何だろう。それは神出鬼没に動き回る軍隊のような隠喩や換喩，擬人法である。　つまり，詩的に，そして修辞的に高められ，変形され，美化された人と人との関係の総和に他ならない。それは，長い間使われた結果，意味が固定され，規範化し，人々に押しつけられることになるのだ。かくのごとく，真実とは，もともと何であったのかが忘却された幻影にすぎない。（ニーチェ 1873）

学問的分野におけるさまざまな出自の相違も，異なる判断や意味づけの基準となっているが故に，文化の多様性と同じようなものである，という考え方はすでに定着している。HollisとLukes（1982　１頁）はこの点を明確に記述している。

近年における科学哲学の興隆は，科学史家や科学に関する社会学者を異邦の文化を考察する人類学者に変えてしまった。それはあたかもいくつかの島が列島を作り上げているように，科学的パラダイムと理論的枠組みを綴り合わせている。自分たちのとは違う精神や文化，言語，理論的枠組み等は内在的に考察されなければならない。（中略）われわれのものごとの見方によって解釈された世界は，いくつもの世界の一つにすぎないのだろうか。また，われわれの事実の合理化や検証の方法は，他人のそれと同じように特殊なものなのでなないのだろうか。

どうして人々はある伝統に別のそれよりも引きつけられるのか，あるいはある解釈が選

択されるのかという問題は，外部にある客観性の基準あるいは明証性を選択するという問題ではなく，例えば，経済学的か否かといった自身の関心がどこにおかれているのかという問題であるということになろう。それは同時に彼らが教育を受けた環境の問題でもある。特定の教育環境とか，伝統を受け渡す特定の社会集団のなかで成長したことなどが大きな影響を及ぼすのである。ただし，いうまでもあるまいが，ある学問的な伝統の内部における選択肢の範囲に一定の限界を設定する理由はない。過去の再構成と解釈についていえば，ものごとの起源に関する神話を考古学も共有している。実際，考古学とはある特定の社会の思考方法にかなった起源神話をつくりだすことにしかすぎないのである。煎じ詰めれば，それは生い立ちの問題である。

このラジカルな結論を前提にするとき，われわれは深く信念に根ざした問題に直面することになる。一体，人々が「考古学的な資料」となるものを生産した真の過去が実在するのだろうか。そして，この資料を研究することによってわれわれは過去を再構成しうるのだろうか。また，なぜ考古学者はそうするのだろうか。さらに，考古学的であろうと古文書学的であろうと，われわれが過去に接近するための唯一の道は「証拠物件」を使うことしかないのだろうか，等々といった深刻な問題をつきつけられるのである。

今日では，こうしたラジカルな議論の始点はよく知られるようになっている。それは，相異なる仮説の間の選択を行う場合に，まず客観性のある事実を収集し，これの支持する仮説をとるといった考え方を拒否することである。この拒否には二つの論拠がある。まず，理論とは常にデータを過少評価していることである。いいかえれば，ある一連のデータは唯一の解釈しか許容することはなく，甲をとり乙を捨てるといった選択は常に別の要因にもとづいている。これは考古学とっては決定的な問題ではない（Mellor 1973と比較せよ）。第二の論拠は，データがデータとなるのはある特定の理論的なコンテクストのもとにおいてのみであるという点である。すなわち，観察の理論負荷性である。いいかえれば，われわれは世界を，あたかも非弁別的な感覚器によって見るのではなく，逆に，われわれのもっている観念と問題意識が，特定の「事実」あるいはデータに関心を引き寄せ，それが一連の議論において当面する問題の解決に適切であるか否かが判断されるのである。

こうした問題について触れた議論の中で，HollisとLukes（1982）は，しばしばある人物たちが見過ごしてきた一連の有益な区分を提示している。彼らは，考古学的な仮説は必ずしもすべて資料に制約されているわけではないという立場を，資料の記述以上のことは何であれ，誰彼の違いのない思弁的な推測にすぎないとする立場に短絡させてきたのである。そこでは誰の推定にもたいした違いはないことになろう。だが，実際問題として重要なのは，これら両者間には大きな変動幅があるばかりでなく，この両極端の間に妥当な立場がありうるということである。

この問題は本書の第一部収録論文によって明示されている。これまで論じてきた諸問題に関する論者らの応答としては，客観主義の妥当性と限界をめぐるものが多い。つまり，どの点で，「妥当性」という概念を含む外的基準が諸仮説間の選択に妥当となるのかといった論点が提示されている。こういうアプローチはWylieの論文では顕在的であるが，Nassaneyの論文では潜在的というよりもWylieの論点と対立している。この立場は科学哲学の分野におけるBarnesとBloor（たとえば1982）や，考古学の分野におけるShanksとTilley（1987）といったあからさまな相対主義とは一線を画している。彼らの見解によれば，学

問内部においては，ある仮説が他の仮説よりも好まれるのは，かれらが研究している対象の制約ではなく，研究者の社会学的要因に依存してことになる。

しかしながら，頑強な相対主義者の立場は，彼らの考古学的議論のあるものが表面的にはそのように見えることもあるが，必ずしもあからさまな主観主義を意味するものではない。主観主義とは「推論から独立した内容をもった陳述であり，われわれの採用した推論の方法にしたがってその真偽は判断される」（Hacking 1982 65頁）。また，強い主観主義とは「その意味と真偽はわれわれの推論の仕方に依存し，それと異なる推論のスタイルはわれわれのものとは別の真偽のカテゴリーとなる」（HollisとLukes 1982 14頁）。しかしながら，この立場を受け入れたとしても，相互に意味をやりとりできなかったり（翻訳の不確定性），意味が背反するとはかぎらない。

翻訳の不確定性とは，（中略），経験的に意味のないことである。いかなる共同体の間においても，接触関係さえあれば明瞭な意味の交換（翻訳）は育まれるからである。それは概念的に誤りである。なぜならば，それは厳密に同義な文のやりとりを前提にしているからである。実際，ある言語と別の言語との意味のやりとりの可能性はそんなところにはない。別の言語に翻訳するにためは推論の仕方を学ばなくてはならないのであり，一度それが身につけば，不確定性という問題はいうまでもなく，翻訳には何の問題も生じないのである。

われわれが自分と同一集団のひとびとと共有している観察というごくありふれた領域においては，完全に意味は疎通し，翻訳の不確定性といったこともない。ある集団の一員たるわれわれが，別の集団の一員である他者との距離が隔たっているとすれば，われわれは新たな関心に満たされ，相互のものの考え方が完全には一致しないことに気づくことだろう。真実の翻訳など誤った考え方であり，重要なのは思考の筋道のやりとりである。（Hacking 1982 60-1頁）

Horton（1982）はHackingがここで述べた「ごくありふれた領域」もコミュニケーションという観点からすれば問題がないことを指摘しているが，一歩進めて，さまざまな思考のシステムを研究する人類学に由来する強固な相対主義を揺るがせうる普遍性の存在に言及している。すなわち，「人類社会の曙以来，いかなる場所と時代を超えて，人類の認知能力の核心部には，汎文化的合理性が存在する」（Horton 1982 256頁）のである。ここでいう「認知能力の核心」とは人類進化の遺産であり，それはHortonのいう「一次的理解（primary theory）」と深く関連している。「一次的理解」とは中程度のサイズのものからなる世界と関係するためにつくりあげられたものであり，「因果性という概念のやりとりに関連し，そこでは時間的，空間的接触が変化の伝達には決定的な役割を演じる」（全掲書 228頁）ものとされている。この「一次的理解」が「文化と文化の間を歩くものに知的な橋頭堡を与える」（前掲書 228頁）。

しかしながら，この「一次的理解」によってこの世界のすべての現象を説明し尽くすことはできないのであり，およそ文化というものはHortonのいう「二次的理解（secondary theory）」を発達させることになる。この「二次的理解」には文化ごとに大きな違いがあり，分子とか流れとか，神あるいは霊魂といったものであれ，隠された実体とかプロセスにまつわる行動を指示している。Hortonの見解によれば，「ある社会が分子といい，別の社会が霊魂というのは両文化間の合理性の違いによるのではなく，技術的，経済的，社会

的背景の違いによって，「場の論理」がたとえ同じ目的をもっていたとしても手段はまちまちである」（同書 257頁）。

Hortonの見解は，唯一とはいえないまでも，ある道筋を指し示している。このために，考古学者は考古学的知の発達の可能性をうち消す相対主義ではなく，普遍的な立場を維持しうるのである。彼の提案は二つの点で魅力的である。まず第一に，解釈を形作るコンテクストの重要性を否定しないことであり，次に，先史考古学者が近づきがたい理性の違いではなく，「技術的，経済的，社会的背景の違い」を重視することである。

ここで明確にしておく必要があるのは，Hortonのいう「普遍的合理性」とは，人類史を支配する普遍的法則性の働きのことではなく，共有された進化論的遺伝に基づく「一次的理解」から生じる現象を関連づける種の能力のことである。心理学者のJames Gibsonは人間の知覚に関して同様の指摘をしているが，彼にとって人間の知覚とは進化の過程で要求された人間的な欲求に基づく環界との機能的関係から導かれたものと考えられている。

とはいえ，考古学的な証拠に依拠して特定の情況を再構成したり解釈したりすることは，全く主観的，あるいは恣意的なプロセスであるとはいえないものの，決して容易ではない。われわれが再構成したいと思う，こうした情況の背後にある文化的枠組みの性格や基盤に直接触れることができないとすれば，観察された物質文化のパターンのもつ意味に関する解釈の妥当性を，どのようにして評価しうるであろうか。ビンフォードは文化的な枠組みが不適切であるという立場からこの問題の解決を試みた（例えばBinford 1983 を見よ）。つまり，われわれにとっては，環界のつきつける諸問題への適応的反応であるといった，一見，恣意的に選ばれた文化的行動しか解釈しようがないというわけである。しかしながら，Wylieが第５章で指摘しているように，そういうわけにはいかない。なぜならば，適応的合理性によっては解釈不能な特徴を具備する現代の物質文化のなかから特別な事例のみを取り出すのはあまりにも安易すぎるからである。

逆に，Gardinが第６章で論じているように，枠組みの発展こそが重要である。その枠組みとは，考古学者が調査する特定の情況に取り組むための枠組みであり，同時に，考古学者がおかれた特定のコンテクストとも関連している。これには経験的に意味をもつであろう，ある地域的に通用している規則の定式化が含まれる。例えば，男性の手袋にとまった鳥はある地域では鷹匠を意味するが，他の地域ではそうではないことがある（13章 Eluyemiの論文も参照）。かくして，GardinはWylieと同様に，特定の情況における解釈の限界を求めて一歩をすすめている。

しかし，過去のある時点における特定の文化的変動パターンを静的な解釈の対象ととらえるだけでは十分ではない。考古学はこうしたパターンがあらわれ，また消滅することを示してきたが，それはこうした変化を記録し理解することは考古学の最終的な目的であるとともに，文化的な変動パターンは考古学的な解釈のルールの変動をも意味しているという二重の意味において示しうるのである。Gardinの用語による「ローカルな知」とは空間的であると同時に時間的にも制約されている。

2. 考古学における「文化」

人々の営む生活が時とともに，また場所とともに変化することはたいへん見やすいし，

すでに指摘したように，この変動は考古学的解釈に重要な役割を演じている。しかし，考古学者はこのわかりきったことから出発し，複雑で，またはなはだ不十分な解釈という構築物をつくりあげてきた。そして，この構築物の基礎には考古学的な「文化」とはわかりきったことというよりも，混乱の種であるという理解があった（例えばRouse 1972）。この混乱を回避するために，まず考古学的な「文化」とそれにまつわる概念を摘出しておくことが必要である。

(a) 異なる場所に居住する人間は大なり小なり異なった生活を営む，というわかりきった事実は，その物質的残滓（つまり考古学的記録）にも違いをもたらし，
(b) 考古学者はこうした空間的変異のパターンを考古学的な「文化」とよぶ実体とみなしてきた。「文化とは，繰り返し，そして排他的に関連しあうよく定義された特徴的な多数のタイプによって区分されなければならず，それを地図上にプロットすると，明確な分布パターンを示す」（Childe 1956 123 頁）
(c) このように作り上げられた実体は，特定の歴史的段階における行為者とみなされている。かれはちょうど文献上にあらわれる個人や集団のような役割を先史時代という舞台の上で演じ，
(d) この役割を演じることによって，こうした「文化」は同族性（自己意識によって認識される特定の社会集団）の指標とみなされ，
(e) 同族性を表現する役割をもつが故に，考古学的な「文化」とは，現代の集団が領土をもち，そこで影響力を行使したいという要求を正当化するという政治的役割をも演じるのである。

このような考え方には異論も多いが，現代の考古学的方法論の重要な部分を構成しており，本論では逐次この見解を検討することになっている。しかし，さしあたり各項ごとのコメントが有益であろう。

(a) 人類の生の営みに空間的変化について：この考え方にはいささかの疑念もないが，以下に示すとおり，これには進化論的な意味合いが含まれている。
(b) 考古学的な記録のもつ空間的変化の分類手法としての「文化」について：これはお手軽な空間的変化の記述には有効であるかもしれないが，この分類手続きの結果を多様な分析に使うことは危険この上ない。さらに，この特殊なまとめ方を取り入れることは，データからの中立的かつ帰納的な結果であると同時に，上の(c)～(e)から派生する問題を抱え込むことになるのである。
(c) 演者としての歴史について：「文化」とは実体ではないのだから，これを演者になぞらえることはできない。「文化」はこれまで上の(d)及び(e)から導き出されてきたが，これと並行して，近年，一部の社会学者（例えばMann 1986）は「文化」が実体ではないと論じている。
(d) 「文化」と社会的アイデンティティーについて：自己意識を持った集団としての民族に胚胎する疑問は，重要かつ興味深いものであるが，この問題と考古学的な「文化」とを理論的に短絡することはできない。

(e) 考古学的「文化」の政治的意味について：これは「文化」のもつ政治的役割に起因する。考古学的な解釈に重要な役割を果たす文化は民族の同定に使われてきたという事情があるが，これは19世紀に考古学に導入され，近年再浮上している問題でもある。言いかえれば，考古学者によって発見されたものが客観的にグループ分けされ，政治的議論に導入されるのは稀なことであり，また特定の地域においてのみおこなわれてきた（例えばUcko 1983a，b）。一方，政治的な関心が考古学が再構築しようと願う集団のタイプ分けに関する考え方に影響を及ぼすことは少なからず認められる。

こうした考え方も，合理主義と相対主義に関する検討を経た後では驚くに値しない。今必要なのはこの問題の具体的検討である。というのも，これには少なからぬ議論が寄せられているからである。まず，「文化」の政治的意味を考察するところからはじめるのがよいだろう。これはわれわれを考古学的な「文化」概念の導入時点にまで連れ戻し，如何に政治的かつ時代のもつ知的環境から発生する認識が「文化」概念の発達と使用に大きな影響を与えたかを教えてくれるからである。

考古学でいう「文化」概念と同族的アイデンティティーとの関連性をめぐる政治的かつ思想的コンテクスト

考古学的な「文化」への関心とその民族との関係は19世紀のヨーロッパにおけるロマン主義的な国家主義に胚胎している。この思潮は民族と民族国家の永い歴史を強調し，それを重要な政治的実体と考えたのである（Veit 1984, 本書第１章, A.D.Smith 1986, Gellner 1987a, Muehlmann 1985）。19世紀後半に新たに登場したドイツ帝国はドイツ語圏の領有を歴史的に正当化したという意味で多くの問題をはらんでいた。A.D.Smith（1986 141頁）は次のように指摘している。

ドイツ帝国が力をえたのはその首尾一貫した地理的な範囲でもなく，神聖ローマ帝国の政治でもなかった。といのも，領地は一定でなかったし，政治的記憶も曖昧なものになっていたからである。かくして，往時の国家の歴史とともに，同族性，とくに言語が基準とされたのである。

しかしながら，ドイツのアイデンティティーに関する，こうした基準の採用はこれ以前から認められるのである。歴史に関するヘーゲルの思想は疑いもなくこうした役割を演じていた（Gellner 1987bと比較せよ）。また，Muehlmann（1985 11頁）はドイツの歴史におけるタキトゥスの「ゲルマニア」が誤って参照されたことを指摘している。

1455年に発見されたタキトゥスの『ゲルマニア』は，ドイツの自民族中心主義に多大の役割を演じた。1807-8年のフィヒテの「ドイツ人民に語る」は起源の遡行性という点ではこれと同じような役割を果たした。かれはとくに中世のドイツ人と当時のドイツ語に関心を示している。同じように重要なのは，フリードリッヒ・ルドヴィック・ヤーンがフランス人とユダヤ人との概念の独自性を主張し，両者の混淆を戒めたことである。

Girtler（1982）はこれとは別の視点を提示している。すなわち，民族（Volk）と国家（Nation）

という考え方はフランス革命と密接に関連し，封建的な階層構造にとってかわるものであると示唆している。民族と国家は一つの全体性であり，文化的に均質な閉じられた単一性であるとみなされていた。

Kossinnaがその先史学的アプローチを深化したのは，まさにこうしたコンテクストを背景としていたのである（Veit 1984,本書第１章）。彼は近代ドイツ国家の遠古性を研究の目的に据えていた。この目的にそって，新しい先史考古学のために一連の方法論と解釈の原則とを導入したのである。すなわち，「文化領域（culture province）」が定義され，文化領域と先史民族の領域との同一性が提案された。これに加えて，Veit（第１章）が指摘するように，Kossinnaにとって，民族には優劣があり，ゲルマン人とノルマン人とはとくに卓越し他民族であり，他より優れているとみなされた。

民族の優劣を論じることはドイツにとどまる問題ではなく，それは19世紀から20世紀にかけて広くおこなわれた民族主義的イデオロギーの一部にすぎなかった（Gould 1981）。この考え方は，民族とは能力によって弁別される階層性をもち，これに依拠する自然人類学とかIQテストなどが新たに登場することになるが，この目的はGouldが指摘するように，こうした能力の違いを「科学的に記録する」ことであった。この点でも，ドイツのみが特殊であったわけではない。

ヨーロッパ人を祖先とするアメリカ人はノルマン人（アングロサクソン人とチュートン人あるいはアーリア人），アルペン人並びに地中海人という身体的な特徴を持つ３タイプに分類される。ノルマン人は最も優秀な民族と考えられるが，それは常に東方や南方からの劣った他民族の侵入に脅かされてきたと信じられていた。こうした考え方は後に完全に誤っていることがはっきりするのであるが，1920年に制定され，1964年にようやく廃止されたアメリカ合衆国への不当な移民制限の根拠とされていた。

（Thernstorm 他 1980 749頁 M.G.Smith 1982に引用）

こうした思潮も19世紀後半から20世紀前半にかけての時代には，社会－経済的なプロセスに関するさまざまな言説に彩られていたために，表だって強調されることはなかった。

かくして，Kossinnaの強力な諸論点はヨーロッパ先史時代を素描し，方法論的なよりどころとなった。その信念は，原史時代以来古典的文書にその様子や移動を書き記された「民族」に由来する歴史的演者としての民族国家という近代的なものであった。そして，社会的・経済的パターンの変化はそれらを生み出した「民族」の内在的能力を反映するものとされ，優劣に基づいた進化の道筋の中におかれることになった。

Veitが明示しているように（1984 349-50頁），先史学において「民族」と物質文化の分布の相関性に着目し，分布の変化を民族の活動の変化であるという認識を導入したのはKossinnaの業績であった。いうまでもあるまいが，Childeもまた，アーリア人に関する論述からうかがうことができるように（Childe 1925），Kossinnaと同じような考え方をしていたのであるが，やがて社会・経済的な進化論に立脚することによって，こうした立場を棄却することになる（例えばChilde 1936 また，Veit 1984における両者の関連性に関する論文を参照せよ）。

しかしながら，なんといっても，その影響力，とくに欧州の学界における影響力の大きさという意味では，民族主義的な力点は薄められてはいるもの，Kossinnaの「セトルメン

ト・アーケオロジー」の右に出るものはない（本書 Veit 第１章，Gebuehr 1987）。伝統的な欧州の考古学においては文化のもつ重要性は自明の理であり，これにもとづいて考古学者は仕事をしてきたのである。このなかで，彼らは19世紀におけるロマン主義的国家における「文化」概念の始発の意味を隠蔽してきたのであり，すでに論じてきたように，文化とは帰納論的なパターン認識の問題であると矮小化されてきたのであった。たしかに，Veitが第１章において論じているように（またShennan 1978も参照せよ），このような実体論的定義は，先史考古学がその資料をあげて追究するほどに理にかなったものではない，という意見もないわけではなかった。

だが，欧州考古学におけるKossinna考古学という伝統への批判の欠如は，いわゆる「民族的復活（ethnic revival）」（A.D.Smith 1981, Gellner 1983と比較せよ），すなわち，一種の驚きをもってむかえられた運動（Friedman 1988）の結果として近年登場した文化的実体の歴史性への関心の昂揚と混同してはならない。ヨーロッパの民族国家の出現によってその姿を露わにしたさまざまな地域集団は自らの帰属する国家の正当性に対して疑義を突きつけ，自身のアイデンティティーを主張した。それはあたかも19世紀において過去が真正のアイデンティティーの劇場となったのと比較される。世界秩序の形成とともに同じような問題が，しかしいっそう堅固な形態をまとって立ち現れたのである。なぜならば，欧州の植民地主義者によってつくりあげられた国境線の内側には，国家の形成というプロセスが厳然とした存在したからである。豪州やカナダ，あるいはアメリカ合衆国といった古い白人支配の共同体もこれと同じ問題に直面した。そこでは鉱産資源やその他の資源をめぐり，過去における占有者のアイデンティティーという事実問題と抵触したのである。欧州の内部においてすら，そこにおける文献史学の永い伝統とともに，考古学的な議論が重要な役割を演じてきた。文献史学が植民化とともに始まることが多い欧州外の地域においては，考古学はより重要な意味をもった。

このような文化的アイデンティティーの再評価にはいくつかの視点が提示されている。たとえば，A.D.Smithは次のように注意を喚起している。

> 伝統と信仰が廃れた近代において，自己の過去へのノスタルジーはいっそう鋭く，かつ広範なものとなった。この意味において，同族的ナショナリズムは宗教の代理人となり，個人が記憶とアイデンティティーとの鎖によってしっかりと結びつけられた諸世代から構成される共同体とリンクされることによって，死による現実の喪失感を克服する手段となったのである。

この問題はFriedman（1988）によっても論じられている。彼はこの現象を一般的な文化の傾向性に引きつけ，この広範な復活の要因を地球的規模での経済的パターンに求めている。

> 私見によれば，文化的分裂とは，進化や産業，あるいは全地球的規模での情報社会の発達の結果によるものとはいえない。むしろそれは経済的分裂や資本蓄積の周縁化，及びそれに政治的闘争の激化の問題であり，自己の手元に経済的かつ政治的権力を収斂させる新たなセンター形成に向かう傾向の問題でもある。すなわち，ワールド・システムにおけるヘゲモニーの転換が開始されているのである。

こうした文化的アイデンティティーとその歴史的正当化の激化を瞥見する時，過去とはたんに現在の欲求をみたすためにだけ作り上げられたものにしかすぎないのではないか，という疑問が生じる（Rowlands 1984，A.D.Smith 1986）。この問題はわれわれを，すでに考察した合理主義と相対主義に関する議論に引き戻すことになる。Smithは明らかに具体的な証拠のもつ重要性を確信している。彼の示唆するところによれば（A.D.Smith 1986 177-8頁），ある社会はきわめて「充実」した過去をもち，そこにおいては過去の事象に事欠くことはないのであるが，過去の提示は決定的に選択的であり，反面，その操作は制約されている。また，別の社会では過去はいささか「空虚」である。実際そこでは，ほとんどなにも知られていないが故に，過去の生産とは推測的な再構成であり，さまざまな作り方が可能なのである。「過去における共同体の生活史上のエポックのもつ背景やドラマ」（前掲書 180-1頁）という真に迫った再構成としての考古学の可能性が浮上するのである。

いかにして過去に再参入することができるのだろうか。これには考古学のような科学的かつ近代的な学問が有効である。現代の知のカノンによって，過去の観念的イメージは手で触れるような現実性を帯びる。おそらく考古学は共同体の過去を再発見するためのもっとも有効な学問の一つである。考古学的な発見と解釈をつうじて，われわれは自己の位置を定め，いにしえの系統をたどり，栄光ある過去に学ぶことによってわれわれの共同体は威厳を獲得する。発見されたモノは唯一の触れることのできるモノとして，われわれをくつろがせ，年代紀と叙事詩を生き生きとした実体と化すのである。

自己のルーツをさがそうとする「目覚めたインテリ」にとって，この物質的モノは生き生きとした過去への再参入を保証してくれた。また，合理主義と経験主義に肩入れする世俗的なインテリにとっては，考古学と言語学とはその再構成のもっとも確実な手段であった。

しかし，この意味での考古学は両刃の剣である。過去によって新たな国家が正当化されるとすれば，それはまた国家を否定する手段ともなるであろう。なぜならば，国家内の別の集団は，また別の歴史をもっているからである（Ucko 1983b）。こうした過去をアイデンティティーの基準とするような立場には多くの反論がある。A.D.Smithは積極的擁護派にみえる。マルクス主義的な観点からDiaz-Polanco（印刷中）は懐疑的な見解を示している。こうした思考方法は，土着民はある種の原始的状態にあるという考え方に立脚した民族差別を内在したロマン主義的であり，非生産的であることが指摘されている。Diaz-Polancoによれば，このような見解は西欧の資本主義的哲学者によって主張されてきたものであり，労働者階級の利害と第三世界のマイノリティーの利害とは，ひとたびアイデンティティーが確立するや対立関係におかれ，分離政策こそが諸国家の資本家の利害に有効であるとされてきたのである。

しかしながら，考古学がこのようなかたちで利用され，また考古学がこうした議論のために証拠を提示する考え方に与してきた（あるいは最低限のリップサービスをしてきた）とすれば，こうしたことの妥当性について反省しなければなるまい。この問いかけは，われわれを，すでに提示してきた実体としての「文化」及び，それと民族との関係という問題に連れ戻すことになる。

実体としての「文化」

これまで論じてきたように，考古学的な「文化」とは，あたかも歴史的なステージの上で演技する実体であるかのように取り扱われてきたが，これは誤りである。それは空間的変化の要約的記述であり，分析的な目的には役に立たないのみならず，先史学的アプローチの基礎に据えることは全くの錯誤である。この見解の説明は多岐にわたる。

(a) それが実体であるとみなされてきた理由の一端は，それが「部族」，「社会」あるいは「民族」等々の他の実体と同一視されてきたことがあげられる。だが，われわれはこうした同一視（例えば，Clarke 1968，Ucho 1969，Hodder 1978a,b，Renfrew 1987）のみならず，他の実体としたものについても，その実体性は疑わしいと考える。

Mann（1986）は個々の「社会」が存在するのではなく，想定しうるのはさまざまなスケールをもち，イデオロギー的，経済的，軍事的あるいは政治的な諸種の社会的権力と連関している重なり合う社会的ネットワークしか想定しえないと指摘している。Feid（1967,1968）は，われわれが想像するような「部族」とは政治的な立場がつくりあげたものにすぎず，世界中至る所で西欧の影響下に出現したと主張している。

同様に，Geary（1983）は先史学における同族的解釈の一つの支柱に疑義を呈している。少なくとも欧州においては，ローマン時代以降の原史時代の民族移動は疑わしい。ここで問題になるのは，現代の民族学的ターミノロジーの意味と用法である（Geary 1983　16頁）。

中世初期の著述家たちは，起源，風習，言語，法律などを同族性を最も明確にあらわすものとして重視した。現代においては，こうした特徴は主観的なものであって，どれをとっても個人や集団の同族的なアイデンティティーをあらわすものではないといわれている。

ひとたび民族をあらわすラベルとして現実的であるのかを検討してみれば，これらの特徴は実際のところ十分に同族性を指し示すものではないことがわかるだろう。同族的なアイデンティティーが特別に意識されるのは政治的なコンテクストであることは明らかであり，しかも，同族性は政治的な支配関係にかかわる場の機能として，認識され，また形作られるのである。

Gearyの結論は，中世の歴史家たちは同族性，すなわち同族的集団のアイデンティティーあるいはメンバーシップとは，彼らがでかけて見つけだすことができる過去についての客観的事実であり，「詳しい検討にふさわしい」カテゴリーであると誤解していた，というものであった。むしろ逆に（Geary 1983 16頁），

中世初期においては，同族性とは主観的プロセスとみなされねばなるまい。それによって，個人と集団は特定の立場と目的にしたがって自他が区別されていたのである。

同族性とは客観的なカテゴリーではなく，主観的で延び縮み自在なカテゴリーであり，それによってさまざまな旧知の類似性が象徴的に表現され，アイデンティティーと共同体を形作るのである。

本書第３部のHillの論文（第６章）はアメリカ合衆国東部における過去200年間の住民のアイデンティティーの変化を考察しているが，これと同様の結論に到達している。もちろん，Barth（1969a）の民族集団とコミュニティーに関する著名な文献も参考となろう。

(b) 考古学的な「文化」が実体的なものではないとする第２の理由は，考古学的資料の

空間的変化とはさまざまな要因によって惹起されるという点に求められる。それは単に異なる地域の異なる住民が異なるやりかたをしている，といった点にのみ起因するのではない。この点についてはBinford(1972b , 197-8頁)の強烈な批判がある。

文化とは幅の広い流れのようなものだ。そこには土器づくりとか婚姻やら義母とのつきあい方とか家や宗教的施設の建築（あるいは建築しない），さらには死に方などについての観念的な決まり事の違いが渦巻いている。

この見解によれば，考古学的資料に観察される変化とは，物事のやり方についての考え方の変化を反映していることになる。考え方なるものは異なる考え方をもつ異なる人口がそれまでの人口に置き換わったり，伝播によって異なる考え方が外部から導入されたりして変化することになる。

Binfordの議論によれば，文化的変化はいろいろな方法で，またいろいろな組み合わせで作用するあらゆる種類の相異なる要因によって引き起こされることになる。かくして，例えば，土器にみられるさまざまな変化は，それが専業的製作者によって作られようと，土器づくりが伝習されるような環境のもとであろうと（Arnold 第10章），土器の機能とか，調理の手法，家族の数，あるいは土器使用者の階層性等々によって生じるであろう。

ここから学ぶべきことは，民族移動と文化伝播と考古学的記録との関連性の有無といったことではなく，考古学的なデータとは分析のプロセスに従属し，解釈学的な原則こそが第一義的な課題として疑問をぶつけ，検討を深めなければならないという点にある。文化を実体的なものする考え方はまさに誤りである。

(c) 考古学的「文化」を実体的なものと考えることに対する第３の反論は経験的なものである。考古学的な分布とは，これまで記述してきたように，さまざまな変化によってひきおこされるという指摘からこの反論は始まる。仮にわれわれが考古学的な資料のタイプの分布を分析する際には，しかもあり・なしといった情報に依拠せず，定量的に分析する場合，そこには緊密に結びあわされた実体ではなく，目も眩むような変化に満ちた横断的なパターンが見出されるであろう。実際，Childeはこんなことはよく知っていたのだが，これに対して彼は都合の悪い情報は捨て去れといっている（Childe 1956 124頁 強調筆者）。

われわれは文化Aにおいてタイプa，b，c，並びにdがくりかえし関連するが，タイプbはタイプe，f とともに文化Bを分別し，タイプc，h，j，kが文化Cを分別するということで満足すべきなのかもしれないが，われわれの目的は，タイプl，m，n等の新しいタイプを発見し，これらが完全に排外的にタイプaと共存することから，いっそうよくAを定義しうることを見出すことにより，タイプb及びcの特徴タイプの組列内の階層的上下関係を低下させることにある。

Clarkeは「考古学的分析」（1968）においてChildeのアプローチを排除して，文化の多角的定義を提示した（Osborn 第８章）。しかしながら，文化とは定義によるという点で，ClarkeはChildeとは違っているとはいうものの，両者は定義によって作り上げられた成果を，集団の文化的伝統を示す実体（Girtlerの用語によれば「有機的全体性」）であるとみなしているのではないか。二人とも横断的分布における曖昧さを排除するための分類的な工夫

を採用するが，実際のところ，この曖昧さが情況の本質であり，また「文化」とは実体的なものではなく，さまざまな要因によって生成される分布論的異差性の偶然的連関にしかすぎないというラジカルなステップを踏み出すことはなかった。

(e) 最後に，上で提示した考古学的「文化」という概念のルーツ（Veit 1984,本書第１章参照）を考察することが，実体としての文化という考え方に対する根本的な懐疑をもたらすことになる。これについてはすでにGirtler(1982)が論じているとおりである。

上述した諸論点に未検討なところはないだろうか。社会的かつ歴史的プロセスの分析を混乱させる想像的実体としての文化は棄却された。また，同族的アイデンティティーは消えつつある，また情況的な構築物であり，それをとおして人々の運命をあとづけるための堅固な実体なのでないことも明確にされた。さらに，すでに見てきたように，ここでいう「社会」といった概念自体が問題視されているのである。

ところで，こうした事柄が無意味かつ不適切であるとして，一切合切捨象されていいのだろうか。この問いも誘惑的ではあるが，満足に回答できるものではない。というのも，たしかにこの問いかけに対するアプローチは誤っていたのかもしれないが，問いかけ自体は妥当であると考えられるからである。すでに述べたように，人間の行為は場所によって違うし（だからこそ地域ごとに解釈のための原則が存在する），そのパターンは時間とともに変動する。さらに，同族性という現象は現代世界において重要な役割を演じており，その起源をめぐる問いかけの背景も重要である。

3. 同族性と考古学

同族性とは単なる空間的変異とは区別されるべきであり，最低限，特定の地縁性と起源によって他と区別される特定の社会集団の自己意識を指しているといわれている。仮にこの定義を認めれば，先史考古学は，少なくともその調査に関する限り，困難な立場に立たされることになる。というのは，先史考古学は決して社会集団の自己意識には手が届かないからである（Arutiuov and Khazanov 1981　と比較せよ）。文献史学といえどもこれとたいして変わらない。すでに見てきたように，Geary（1983）は昔の著述家たちが貼り付けた同族的なラベルは，必ずしも社会集団の自己意識というわれわれの定義には合致しないと指摘している。どのような議論においてであれ，文献の存在が結論を誘導することがあまりにも多すぎたし，そこではこの情報源が単なる証拠の断片以上のものとみなされてきたのである。

しかしながら，一般に人文科学の歴史にとって重要性をもつのは，上で定義した同族性という現象を認識し，どのような要因によってそれが現実のものとなるのかという問題である。Gellner（1983）の見解によれば，同族的グループの実体とは産業社会の成立とそのインパクトによって規定されており，それ以前には存在しないものであった。これに先立つ農業社会にあっては問題になるのは階級という存在であった。そこではエリート層と農民が区別されており，前者はエリート的なスタイルによってタイプ分けされ，後者は空間的に相互が区別される農業共同体の分立によって区別されていたのである。

一方，A.D.Smith（1986 45頁）は同族的（民族的）実体をさらに遡行させている。

それが発生したのは前3000年紀における都市国家と父系的王権の出現と軌を一にしており，とりわけエジプトとシリアにおいては地域的な集団感情や集団意識を超えた民族性が生まれた。

この指摘が結果的に現代の記録に立脚するものであるとすれば，すでに述べたGellner（1983）の提言が問題となろう。すなわち民族のアイデンティティーとは永続的かつ客観的なものではなく，流動的かつ主観的なものであり，同族性なるものの必須の要件であるアイデンティティーという自己意識と特定の「何々人」とを対応させることはできないであろう。この問題が未解決の問題として残されている。

しかしながら，もしも便宜的ではあれ，特定の「何々人」とは「同族（民族的）グループ」であるとみなせば，Gellnerは誤りであり，Smithが正しいということになってしまう。さらに，このような実体の由来が問題になるばかりではなく，われわれに「何々人」という認識をもたらす古い記録を保持する最も古い国家によって同族的アイデンティティーが提示されたのか否か，あるいは，より一般的には，現存の国家による経済的，社会的，そして国家的コンテクストによらずにそれが提示されているのか否かといった問題が発生する。国家の出現とアイデンティティーとの関係については一層の議論の深化が必要である。

すでに検討したように，Fried（1967,1968）は実体としての「部族」が外部にあるより複雑な社会からの圧力の結果であると評価している。それは外圧に直面し，固定された単位として取り扱われ，また登録された断片的な諸原理を寄せ集めて作り上げられたものである。Friedは集団化や同盟関係には一過的で波動的なパターンしかないことを指摘している。同様に，Bentley（1987）は同族性と複合的社会との密接な関係と，それらが社会的かつ政治的に激動を引き起こしたと主張している。

Bentleyのモデルはきわめて興味深い。このモデルは同族性なるものがとりうる形態を説明するもので，同族性の出自基盤を規模の大きな社会との結びつきに求め，過去におけるそのあり方を説明しようとするものである。彼はまず彼のいうところの**方便論者**（*instrumenntalist*）と**起源論者**（*primodalist*）を棄却する。前者は同族性を共同利害に求める者，後者はその起源を感情の同一性に求める者をいう。Bentley（1987 27頁）は，いかにして共同利害や共通感情が存在するようになったのか，という問題に対して立ち向かいうる検証可能なモデルなどこれまでなかったと指摘し，次のようにいっている。

同族性とは根底において，ある特定の人間であることを要請し，（中略）同族的アイデンティティーとは類似性と異差性に関する象徴的な構成を要請し，こうした感情がとにもかくにも説明されなければならないとされてきた。

彼はむしろ同族的グループに含まれている同族意識は「プラークティスにおける客観的共通性に関する潜在意識」（前掲書 27頁），換言すれば彼が理論的に依拠しているBourdieu（1977）のいうハビトゥスから発生すると考えている。

同族的なアイデンティティーとは，それ故に，いくら利害と感情とに導かれているとはいえ，完全に恣意的なものではなく，むしろ「同族的アイデンティティーとは内部的には経験に，また外部的には経験を秩序立てる認識の違いに根ざしている」（Bentley 1987 36頁）。換言すれば，ハビトゥスは主観的アイデンティティーと客観的コンテクストとを架

橋しているのである。しかしながら，民族感情を産出する根拠が摘出されたとはいえ，Bentleyは民族感情が何故，またいかにして現実のものとなるのかという問題に答えなければならないだろう。これについては，しばしば抗争という事例が引き合いに出されているが（Hodder 1979と比較せよ），他にも要因は考えられる（Barth 1969b, 19頁）。現代世界における同族性を検討するBentleyにとって，民族の同族的波動性とは「周りを取り巻く環境の変動に対応して組み上げられる新たな支配様式としてのアイデンティティー概念のシフト」であり（Bentley 1987 45頁），近年の政治的，社会的，経済的変化を反映するものといえるだろう。

Bentley（1987,48頁）によれば，Bourdieuの理論は民族という位相における変動を引き起こす権力を説明するものである。

意識的な評価とか変更に訴えることのないプラークシスに関する前意識的なパターンに根ざした同族的アイデンティティーは，人々が誰であるかという問いかけに答える。この確実性こそが方便論者のモデルをうち砕くのである。同時に，ハビトゥスという概念は同族的グループの形成を説明し，同族的な行動を形作るが，それは同族的なアイデンティティーが無意識的な共通利害といった心理学的にもありそうもないプロセスに関与し，また生成するといった考え方とは無縁である。

同族性を理解するためには，歴史的観点も重要である。というのは，歴史を知ることによってのみ，われわれは同族性の由来を知り，その構成要素を理解し，社会的再生産におけるその役割やその変動要因を説明することができからである。考古学的に見ても，Bentleyの示唆は興味深いものがある。この見解は同族的アイデンティティーの成り立ちにおける文化的性格を重視し，それにまつわる感情の働きに対しても基本的な説明を与えるものであるからである。この立場に立つことによって，同族的アイデンティティーと特定の文化的特徴を他と分別可能なものとが響きあい，考古学的にもその反響を聴くことができるであろう。しかしながら，同族的なアイデンティティーがつくりだされるのは，親族組織といったような，既存のアイデンティティーを産み落とす形態が破壊された時なのである。例えば，国家の起源において機能する特徴などにこうした現象はしばしば看取される（例えば，Crone 1986）。

こうした社会やその影響範囲の外部においては，集団的な利害関係の形成はきわめて限定された現象という他はない。そこでは一種の細切れの原則が作用しており，その場その時の利害関係に関わっている集団の離合と集散を生み出すであろう（Gellner 1987c と比較せよ）。個人のアイデンティティーは考えられているほど強いものではない。言いかえれば，仮にこのような議論の筋道をおうとすれば，さきに定義した同族性とは，BentleyやSmith，あるいは他の論者が指摘したように，初期国家の勢力範囲外には存在しえないであろう。

4. 空間的変異，スタイル，アイデンティティー

だがそれでもなお，考古学的な記録にはほとんど普遍的に顕在化する空間的変異の性格と重要性については問題が残されている。すでに見てきたように，「考古学的文化」とい

う概念は絶望的といってよいほど無力であり，これには対案が必要であろう。ここでは以下の３点を指摘しておきたい。

(a)　Binfordが強調した文化的現象を切り刻むことの重要性
(b)　スタイル概念の分析的アプローチ
(c)　空間的変異の広がりを説明するための理論的基盤の再検討

考古学的記録の変異に関する分析的アプローチ

これはすでに実体としての考古学的「文化」のもつ不満足な性格をめぐる議論の中で触れてきた。製作物の時間的・空間的変異は目も眩むように多様なプロセスの結果として生じる。つまり，特定の環境から社会的権力の割り振りや物質的生産，信仰や図像表現の変動するパターンの組織化等における対処の仕方などの結果として生み出されるのである。1960年代におけるニュー・アーケオロジーへの間断のない攻撃にも関わらず，プロセス分析の必要性は現代考古学の基本的可能性を保ち続けている。たとえ，多彩なプロセスの説明が当初の機能的適応の一義的重要視からかなり逸脱しているにせよ，依然としてそうなのである。

スタイルの性格

ここでは，これまで考察してこなかった空間的変異に関する重要な観点が開示される。スタイルがこれである。

> 明らかにスタイルの意味は多様化してきた。だが，この用語のもっとも核心的な意味は，まず第一に本質に対する形態であり，内容に対するやり方にある。第二に，それは形態のある一貫性であり，第三にスタイルに用いられる形態は首尾一貫しているため一連の関連パターンを生起する。
>
> （Kreber 1957 4頁）

アングロアメリカ系の考古学者の多くは考古学的文化に対するこの定義と文化的プロセスを分節することの重要性を受け入れてきた。だが，彼らは人工物のスタイル変異という現象は十分には解明されていないとも論じてきたのである。実際，過去において考古学的「文化」の性格とか，その実体表現の種類などに関する議論は終息するどころか，スタイル概念の周辺で再燃してきた。

近年のアングロアメリカ系の考古学おいて，最も影響力のあるスタイル論は，情報交換理論であった（Wobst 1977）。人工物における様式的変異は一つのあるいはいくつかのメッセージを伝達することであり，それによって社会的相互関係，とりわけ社会的距離の媒介者として関係を容易にすることである。かくしてWobstは，現代における帽子のスタイルが，帽子着用者のアイデンティティーの目に見えるメッセージを伝達している事例を引用したのである。

Wiessnerは一連の重要な論文においてこのアイディアを練り上げた（Wiessner 1984,1985この結果，彼女は様式変異の性格と意味についてSackettと論戦を闘わせることになった（Sackett 1982,1985）。Wiessnerはとりわけ様式について本質的に能動的な見解を提示し，

それが**標章としての**（*emblemic*）スタイルと**自己表現のための**（*assertive*）スタイルという二つの観点から見ることができる点を示した。標章としてのスタイルとは（Wiessner 1983 257頁），

明確な指示物をもつ物質文化の形態的変異であり，それは認定された対象者に意識的な同盟関係やアイデンティティーに関する明晰なメッセージを伝達する。（中略）指示物の大半は社会的集団性であり，（中略）アイデンティティーにまつわる客観的な属性を表現するために使用される。標章としてのスタイルは明確な指示物をもっているため，集団の存在とその境界に関する情報を搬送するが，両者間の相互関係の程度については何も語らない。

一方，自己表現のためのスタイルとは（前掲書 258頁），

個人ベースの物質文化の形態的変異であり，個人的なアイデンティティーを搬送する。（中略）それは明確な指示物はもっておらず，個人的アイデンティティーを支えはするが，直接的に象徴化されているとはかぎらない。また，それは意識的にも，無意識的にも運用されている。

（中略）かくしてそれが伝達されるにつれて，文化の変容と内面化が惹起されるため，考古学者にはヒトとヒトの接触の程度をはかる目安となるのである。（中略）しかしながら，こうした情報搬送という問題は複雑で，製作者の膨大な意志決定や対象物の自然的，機能的あるいは社会的な属性にも多くを依存している。

Wiessnerはその事例研究において，サン族の矢尻が語族の領域を示す標章としてのスタイルを荷担していることを示した。また，これ以外にも標章としてのスタイルの特徴を論述している。

Sackett（1982,1985）は，事実上こうした標章としてのスタイルという性格規定を排除はしないものの，大多数の人工品の形態変異は，受動的なものであることを論じ，これを**アイソクレスチックな変異**（*isochrestic variation*）とよぶことを提唱している。彼の見解によれば，物質文化とは一定の限界が定められている同族的なコンテクストにおいて製作されているが故に，不可避に同族的な象徴性を帯びているということになる。

しかし，この「考古学の世界」シリーズの別の巻において，Wiessner（1989）はSackettのアイソクレスチックな変異とともに，自身の標章としてのスタイルと自己表現のためのスタイルというカテゴリーを概説して，さまざまな条件の下で作用する「比較という認識作用」という考え方に立脚して，単一の枠組みを提示した。

特定のスタイルが一体何を指示しているのか（すなわち，どの程度それ　標章として，あるいは自己主張として機能しているのか）という問題は，（中略）コンテクストと条件に左右される。つまり，ある社会における社会的ユニットを同定したり，争いといった要因が相手方にスタイルに荷担された明確なメッセージを送るのに有効であるといった諸条件に依存している。

アイソクレスチックな変異とは特定の人工品，あるいはその使われ方があまり重要でない場合にのみ生じるが故に，どのような作り方をするのか，あるいはどう使うのかといっ

た選択は自動的であり，半意識的といってよい。それは他との比較を経た上で使われるというよりも，文化的伝習によって生じる。さらに重要な指摘がある（前掲書）。

コンテクストと条件こそが社会的，様式的比較を可能にし，様式的な観点をつくりだすのであるが故に，様式とアイソクレスチックな変異との間には明確な仕切線など存在しない。もしも，時間の推移につれて，あるものが新しい社会的，象徴的価値を獲得したとすれば，変異の評価も抜本的に変化することになる。

Wiessnerによって導入された区分は非常に有効であり，さきに論じたBentley（1987）の考え方とも矛盾しない。彼らはアイソクレスチックな変異というアイディアにもともとあった混乱を収拾したのである。アイソクレスチックな変異が「同族性」であるとか「同族的なアイデンティティー」を示すものだという考え方は誤りであり，また有効性もない。それはアイソクレスチックな変異によっては説明することができない。すでに検討したように，同族性とは単なる空間的変異なのではなく，特定の社会集団に対応するアイデンティティーという自己意識のことをいうのである。ある特定の様式の位相が同族的なものを表現しているとき，それは異差的かつ特殊的な価値を付与されているが故に，定義により「標章」なのである。これまでくり返し触れてきたように，空間的変異は常に存在する（あるいは現代のヒトの出現以来存在してきた）が，同族性とは特殊かつ偶発的な現象であり，スタイルの一新をも惹起する同族的アイデンティティーの変動を含む特殊な状況の産物でもあった。「同族性」とは，すでに指摘したように，国家の出現にともなうむしろ特別な種類の集団的アイデンティティーなのかもしれない。つまり，それは標章としてのスタイルの使用を含む国家よりも，さらに流動的な集団に対する定義とは対立するものではないだろうか（下記参照）。

アイソクレスチックな変異という概念は別の点からも批判されねばならない。それはわれわれが何事かをするときには常に対象にラベルを貼り付けている，という説明にしかすぎないのではないだろうか。文化的教化による地域的パターンから生じるもののやりかたは，たいてい自動的なものであるという見解であるが，こうした考え方はこのパターンの解釈にはあまり有効とは思われない。実際それは，Binfordが伝統的な文化史学たいして放った批判の矢にたいしても無力であろう。Binfodは伝統的文化史学が空間的変異とその変化を集団のもののやり方についての範型に還元してきたことを批判したのではなかったか。このような変異の特定の形態が発生した理由を一連の適応等のプロセス分析によって理解してきたはずである。

BentleyはBourdieuのハビトゥスという概念を援用した議論は，多くの点でSacketのアイソクレスチックな変異という観点に照応するものがある。ただし，後者が物質文化を対象としているのにたいして，前者は主に社会的な生活を対象としているという違いはあるが。つまり，生誕この方，人々の行動と思考は意識的な反省なしに教化された賜であるが，それはある場所を離れずに生活することが大きく影響していると考えられている。これが同族的なアイデンティティーをはぐくみ，一般に標章としてのスタイルと自己主張としてのスタイルとを生成する。その結果，このようなスタイル概念は，コンテクストに依存しながら意識的にアイデンティティーを形成することを重視するWiessnerの立場よりも強固で

純粋な基盤を保持することになる。一方，ハビトゥスはそれ自体では同族的アイデンティティーたりえず，またアイソクレスチックな変異もこれ以上のものとはいえないばかりでなく，解釈というレヴェルにおいてもその基礎となることはない。つまり，それらには，さらに分析というプロセスが要請されるのである。

標章としてのスタイルとアイデンティティー

これまで述べてきた同族性に関する議論において仮構されているのは，国家の存在を前提とする社会的かつ経済的転位であり，またしからざる場合には，共通利害と地域を超えた集団の存在という状況であった。だが，Wiessner（1989）は焼き畑耕作民が物質的手段を使用して，力と統一性並びに財力を示すために標章としてのスタイルを使用しているとも説明している。複数の谷筋に居住する焼き畑民は定期的に儀式を執り行い，その際に標章としてのスタイルが行使されるというのである。

しかし，標章としてのスタイルとは複数の地域や民族集団を作り上げたり，定義したりすることよりも一層広い範囲に認められる。Shortman（印刷中）が「アイデンティティーの発露（salient identity）」に関して強調しているように，諸個人はさまざまなアイデンティティーの位相を保持している。例えば，年齢，性，社会階級あるいは帰属集団等々といったさまざまな状況において異なるアイデンティティーの位相を使い分けているのである。そして，それぞれの場面でいろいろな標章としてのスタイルが行使されている。どうして特定のコンテクストにおいて特定の位相が発露されるのかという問題は，重要な問題であり，同時に，それらの間にも何らかの相互関係があると考えられる。この点については，近年発表された東アフリカの二つのエスノアーケオロジーの研究によって説かれている（Hodder 1985, Larich 1986）。いずれの研究においても，モノによる「部族」間の関係の表現は内部的な社会的階層性のパターンに結びついていることが示されている。これとは別に，地域集団とより大きな社会・経済的プロセスとの関係が，「ネオ・マルクス主義」的あるいは「ワールド・システム」といった視座から積極的に論じられている（例えば，Kridtiensen 1982, Rowlands 1980）。

以上の考察から，考古学者は認定される集団がどのような標章を行使しているのかを認識するという仕事を引き受けなければならない。この集団は，さまざまなスケールで繰り広げられる特定の社会的ネットワークにおける特定の利害関係から認定される（Mann 1986と比較せよ）。標章の行使は他のスタイルの位相とは区別されなければならないが，同時に，標章としてのスタイルが指示する集団の性格も検討されなければならない。これは必ずしも絶望的な仕事ではあるまい。年齢，性，社会階級等の該当領域の認定は相対的に独立しているし，空間分布の時間的推移は特定の物質文化の荷担する標章としての役割を指示しうるであろう。だが，問題もある。例えば，もしも集団の認定パターンが短期的であったり，波動的であったりすれば，すでに見てきたようにそういう場合が少なくないのであるが，先史学者が利用しうる編年的解像度が相対的に低いため，その物質的位相の判別は困難なものとなろう。

要約しよう。本論で依拠しているWiessnerの様式論は，比較によって認定されるというプロセスを重視するという意味で重要な意義をもっている。そこにおいては，「標章としてのスタイル」，「自己主張としてのスタイル」及び「アイソクレスチックな変異」が相

対的に独自の位相をもつが，全く相互に関係をもたないというわけではない。なるほど，原理的には，例えば土器の特定の装飾といった所与の属性は，形態を変化させることなく，ある時間的推移の中で，「標章としてのスタイル」や「自己主張としてのスタイル」あるいは単なる「アイソクレスチックな変異」へと変容することはありうるであろう。厳密にいえば，Wiessnerも指摘するように，どれであるのかはコンテクストと条件に依存している。このことは，改めて指摘するまでもなく，社会集団間の関係を抜きに，社会集団内での事態の推移を論じても無益であり，また，考古学的なデータを社会的かつ経済的な側面から詳細に検討することの重要性を示唆しているのである。

スタイルとアイソクレスチックな変異に関するダーウィン主義的モデル

考古学の記述を要約すれば，一般に変異の記述，それも文化についての記述であり，特に「文化＝人間 」といった伝統的な基盤に立った特定の事例に観察されるパターンの解釈ということになるだろう。だが，一体全体世界とはどうしてこうなんだろう，というより一般的で，また基本的な問題について考えてみる必要はないのだろうか。この導入において検討を加えた変異にまつわるパターンは出現したのだろうか。この問いかけには，ダーウィン主義的な観点から回答することができるであろう。

Wiessner（1983,1989）は彼女の「標章としてのスタイル」に関する議論の中でこれを試みている（Crook 1981に依拠する）。彼女の示唆によれば，能動的な自己のイメージの形成には自然淘汰による進化があったという。というのは，それは望ましい社会的諸関係の形成を励起し，「標章としてのスタイル」はこのための一つの方途であったからである（Wiessner 1983 258頁）。

> 互恵的パートナー，あるいは異なる性をもつメンバーに積極的に自己のイメージを提示したい，という欲求はサン族のインフォーマントの説明では最もありふれたスタイル行使の動機であった。（中略）もしもCrookの仮説が正しいとすれば，標章としてのスタイルが初めて考古学的な記録に登場するのは，規則的で，遅延的で，また不均衡な社会関係の出現と軌を一にしているであろう。

だが，ダーウィン主義的な説明は，同じ「プラークティス」をもつ複数の地域，換言すればアイソクレスチックな変異が一般的には成立していた，とする普遍的現象をも支持するかもしれない。というのも，淘汰論的な視点からは，遺伝子よりも文化の方がはるかに重要視されようなコンテクストにおいては，個人の学習ではなく，既存の文化的伝達行動における模倣，とりわけ最もありふれた行動の模倣に依拠した意志決定がしばしば有効であるからである。かくして，遺伝子に対立する文化的変異の世代間の伝達とは，既知の素材のランダムな組み合わせではない，ということになる。文化的行動の通常の変異は，生まれつきもっている遺伝子のランダムな混淆なのではなく，地域内において選択的に伝達されていく傾向をもつのである。この結果として，ここで問題とされる変異現象に関しても，地域内の諸世代は文化的に均一化し，同じようなやり方をするようになる。このことから，特定の人口が同質化すのは，遺伝子というよりも文化のためである，という結論に到達する。

この種の模倣は意識のさまざまなレベルに働きかけ，ひとたび意識化されるや，別の現

象と結びつくであろう。これがBoydとRicherson（1985）による「間接的バイアス」とよばれるものである。つまり，ある社会において模倣されるのはもっともうまく身を処している者であるが，この過程で，うまい身の処し方だけではなく，それ以外の行動やあり方までもが模倣の対象とされるもである。この結果として「自己を主張するスタイル」という表現が登場することになる。Wissnerの説明は，なぜ人々は「自己を主張するスタイル」を欲するのか，という問いに回答を与えている。また，「間接的バイアス」は，なぜ「自己を主張するスタイル」の内容に個人差がなく，ある時代，ある地域には広範囲に同じようなパターンが認められるのか，という問いへの照明を投げかけている。

要するに，ヒトという種は，いやそれを特徴づける文化は，不可避にアイソクレスチックな変異と自己を主張するスタイルに由来する空間的変異を示す。これを分析することの必要性についてはすでに議論した。そこで瞥見したように，こうしたパターンは同族性を組み立てる標章としてのスタイルを発達させる素材を提供するのである。

5. 文化的アイデンティティーへの考古学的アプローチ

本書は3部から構成されており，それぞれはこれまで議論した諸問題の視点に関連している。

第1部は考古学的な解釈における客観性をめぐる理論的，哲学的問題と，考古学的，とりわけ先史学的な手段によって過去に関する知を獲得するための可能な方途をさぐる。

Veitの論文（第1章）はKossinaによる考古学的文化概念の形成過程を検証する。Kossinaの業績はこれにつづく1世紀の議論を要約的に体現しているという意味で，本書の冒頭を飾るにふさわしい。だが，これにつづくKossina理論の発展をとおして，Veitは第二次世界大戦後のドイツ考古学，特にその文化概念の両義性を主題化している。何故ならば，その根本にはドイツの遠古性と優越性とを示そうとするモチーフがあり，それはナチによって利用されてもいる。彼らが実体としての考古学的「文化」の重要性を受容していたことは明らかであるが，上で検討したこうした考え方への反論に与するのではなく，それを考古学的に純化する道を選んだのであった。これはVeilの指摘するように，種々の点で不毛な方向への道行きであった。

Martens（第2章）はVeitの議論を効果的に説明する事例研究を提示している。彼はVanddal族が歴史時代に居住していたということへの思い入れが，この集団とポーランドの考古学的な「文化」との間にいかに疑わしいつながりを作り上げたのか，ということを指摘している。Vandal族がゲルマン民族であるという位置づけが，ナチの東方への侵略を正当化し，ポーランドに「文化」が移植されたのはユトランドからのゲルマン民族の移動の結果であるという解釈を許したのである。ナチが一掃されるや，ポーランドの考古学者は移動の方向が逆であることを論じたが，それにつづいて，進化論的な視点に基づき，内的な社会進化を強調するあまり，ポーランドとユトランドとの考古学的記録の明らかな類似性を無視し，両地域の鉄器時代は独立して発展したという見解を提示するに到ったのである。考古学的な議論においては，どうでもいい「物的証拠」は何事も説明することはない。

第3章でDurransは考古学的解釈における，「物的証拠」に対する視点とイデオロギーの役割を強調している。しかしながら，彼のいうイデオロギーは同族性に関する偏見に由来

するのではなく，資本主義というコンテクストの中で仕事をする考古学者の直面している諸問題から生じるとされる。帝国主義段階の資本主義においても民族主義的な要素は現存している。Durannsは資本主義社会を特徴づける虚偽意識を暴露するという考古学の批判的な役割に着目する。この役割を果たすためには，歴史に関する知識は必須であるが，それだけでは十分ではない。考古学者にも批判的行動が必要なのである。というのも，自己の仕事を左右するイデオロギーを自覚するためには，これ以外の方途はないからである。「現在最も鋭いオーソドックスな考古学に対する批判は第三世界や黒人や女性から提起されている」（第３章 73頁）ことこそその証左とされている。

同じくMartensがVeitの一般理論を検証するための事例研究を提示したように，Nassaneyの研究は（第４章），アメリカ原住民であるNarragansett族の墳墓の解釈はDurannsの研究を補うものとなっている。彼は従来の解釈を「考古学における民族誌」がつくりだしたフィクションであると断じ，相対的に独自な二つの基準を参照しながら，彼独自の墳墓の解釈を提示している。その基準とは，まず第１にデータとの高い整合性である。先行する解釈よりも幅広い首尾一貫性が求められる。第２に，それは現在のNarragansett族とともに考古学者にも受け入れられるものであり，また17世紀におけるヨーロッパ人の侵略に対するNarragasett族の創造的役割をも描き出すものでなければならない。これまで，その内容がどのようなものであれ，第１の基準を満足しても第２の基準を満たさないものが多かったのはどうしたことなのであろう。いずれにせよ，彼が主張したいのは，こういう問いかけに対するNarragansett族の応じ方こそが現代国家の要求に対する応え方なのであり，この国家の中で彼らは自己の正当性を訴えたいと思えば，自らの継続性と一貫性とを示さなければならないのである。この要求自体が，その程度は別としても，伝統の創出を求めているともいえるだろう。こうした集団がいかに形成され，また自己を規定するのかという問題は，第16章でHillも扱っている。

Wylie（第５章）客観性と視点といった同様の問題を扱っているが，哲学的かつ認識論的観点からアプローチしている。彼女は考古学的方法による過去に関する知をいかに得られるのか，という認識論的論争に焦点をあてている。Binford（1972a）は客観的視点に強く反発し，われわれはエコシステムを中心とする一般化を指向する正しい方法によって，過去について知りたいことなら何でも知ることができると主張した。Wylieはこの見解を批判し，かつ「もしも過去についての確実な知を得られないとすれば，それは恣意的な推測にしかすぎない」（第５章 108頁）という対極に立つことにも反対する。そうではなく，客観的事実に訴えることは考古学解釈の自由な展開を制約するが，制約には幅があり，また一定ではない。「過去について知りうることと，知の正確さは，その背景にある知（あるいは〈ミドルレンジ〉）的妥当性と，それに関連する技術の進化によって変化するのである」（第５章 108頁）。

Gardin（第６章）も同じ立場に立ち，Wylieと同様に，エスノアーケオロジーと関連分野の重要性を強調している。かれもまた，われわれが過去について知りうることは，偶発的な限界があることを認めるが，一方ではデータの制約を，他方で，普遍的な解釈原理の欠如を指摘する。Gardinによれば，厳密な考古学的ルールを確立しなければならないのであり，それによってのみ本質的な特殊性と文化的地域性とを説明しうるのだという。それは普遍性ではなく地域的なルールであり，内的に統一されてデータとの整合性をもち，適応

領域の限界性をもつものでなければならない。彼はどの問題を研究するのか，あるいはどのモデルを検証するのかという視点の存在が妥当であることは認めるが，モデル自体が妥当であるか否かという段になると，もはや視点は問題とはならない。そのことが，考古学的解釈の可能性に大きな足枷となるかもしれないのだが。

GardinとWylieが強調するように，エスノアーケオロジー及び関連分野が実際のプロセスの作動状況の観察に道を拓くために必要であるということは，近年，特にアングロサクソン系の考古学においては広く受け容れられている。加えて，すでにみてきたように，考古学を念頭におかない，より一般的な民族誌的に収集された情報は（例えば，Clarke 1968, Ucko 1969, Hodder 1978a, b, Renfrew 1987），物質文化の分布と言語の分布，そして（仮にそうしたものがあればの話だが）社会集団の分布等に関する多様な可能性を開示している。本書の第２部は文化的アイデンティティーと物質文化の変異との関係についての諸問題を扱っている。ここには数編のエスノアーケオロジーが収録されているが，それは集団の文化的アイデンティティーと物質文化の変異及び両者の関係に関する情報を提供してくれるが，これは物質文化の空間的変異の要因を考える手がかりを与えてくれる。これ以外には，純粋に考古学的な，あるいは考古学的な，そして文献史学的な記録が収められているが，それは，すでに批判してきたように，考古学的「文化」と同族的集団との同一視には慎重な態度をとっている。著者たちは，自己の情報を分析し，文化的アイデンティティーと同族性，そして，Rowlett（第15 章）の場合ですら，政治的な境界との間にはほとんど関係が存在しないことを論じている。

DeCorse（第７章）はシェラレオネのエスノアーケオロジーを提示している。ここでは隣接する自立した同族的グループの物質文化がさまざまな観点から検討されているが，将来的な含みは残しながらも，それと同族的な区分との間には，ほとんど相関性が認められないという。

Osborn（第８章）もまたエスノアーケオロジーに立脚している。ここではあるシステムの外縁部以外には明確な境界線が存在しないことが注意されている。コロンビア領アンデスのU'wa族はいくつかの異なる集団に分かれ，それらはさまざまな複合的観点から文化的に区分されるが，その区分は多価的（polythetic）である。ある集団のみを分別し，他の集団の分別基準とはなりえない唯一の特徴は存在しないのであり，そこには距離が距たるにつれて増大する総体としての非類似性しか認められないのである。ここでClarke（1968）が考古学的「文化」の多価性を強調したことを想起するのが適切であるのかもしれないが，考古学者がいかにして正確に実在的な集団を同定しうるのか，あるいは集団の空間的な範囲を確定することができるのか，といった問題となると話は別である。一方でU'wa族と白人，他方で低地インディアンとの間には明確な境界線を引くことができるが，明確で永続的な境界線の設定についてのさきに論じた観点に照らすとき，これは植民化による分裂と考えるべきである（第８章 154頁）。

私は征服期以前にはアンデス北東部に居住する住民の間に明確な境界が存在したとはとても信じられない。原住民の信念を引き裂いたスペイン人による征服が，鋭い境界線の生成に関与した要因である可能性が高い。（中略）時間の経過につれて，多かれ少なかれ，お互いに絆を形成していた住民たちが離散したことによって，こうした状況は深刻化したのである。

Washburnのエスノアーケオロジー的な研究（第９章）は，はるかに特殊な領域を扱っている。これまで論じてきた考古学的「文化」概念への批判に依拠しながら，彼女が関心を集中するのは，集団の境界を特定するための考古学的データの様相であるが，近年の研究に使われているそれはあまりにも皮相的かつ目的論的であることが指摘されている。Washburnによれば，対称性に着目することが同族的グループの弁別には好適であり，実際に，対称的なパターンを意識的に選択する同族的グループについての検討を行っている。特定の地域における，集団間の対称的パターンの選択のされ方に関する検討は，新しい重要な観点であろう。

Arnold（第10章）は一つの社会の土器に関する文化伝播を微視的に論じ，それが親族組織と関係していることを指摘する。ただし，別の社会ではそうではないことも示されている。子供たちは世帯内で土器作りを学び，世帯への帰属は親族組織を基盤としている。こうした状況の下での土器作りは，装飾という側面よりも，「土器成形に関わる身のこなし」（第10章 181頁）であり，装飾には別の要因が関係する。Washburnの論文と同様に，今後の展開が注目される。

すでにみてきたように，参照できる情報がエスノグラフィーというよりも，考古学や歴史学の分野のものである場合，一層の冷静さが必要である。Balintの論文（第11章）はこの好例であり，ここでは，東欧の中世初期における「民族的な視点からの」（ethnospecific）考古学的記録が検討されている。彼は物質文化の分布と歴史的に知られた民族との間の複合的な諸関係を提示し，これらの民族と物質文化を定義する方法がこの地域におけるこれまでのナショナリズムと関連していることを示している。Smith（1986）も指摘しているように，Balintは，10世紀から11にかけてのいわゆるBijelo Brdo文化とは，ハンガリーの一般人が自分の文化と彼地でのいくつかの在来の文化とをミックスして作り上げた「ハンガリー帝国の考古学的文化」であると主張している。これが正しいとすれば，複数の民族集団が作り上げた国家であるアメリカ合衆国と比較することは有益であろう。

Wang（第12章）は注目されるデータを示しながら，紀元前約500年～100年における雲南の民族グループの定義について検討している。ここでは人々の日常生活や戦争，儀式などその他の行動が刻まれた青銅器が素材とされている。彼はこれらの情報を駆使して，さらに古代の文献や現代のエスノグラフィーの成果なども援用して，四つの民族集団の存在を定義したが，これらは現在に至る2,000年間もの間，たいして変わることなく存続し続けているのである。確かにデータソースの質は高く，ありふれた議論と比較してはるかに説得力のある論旨となっている。またそれは，個別事例に基づく推論は，偶然性に左右され，相対的なものであるというWylieとGardinの意見を支持するものである。この研究はこれ以外にも注目される点がある。まず，この研究は説得力をもって（中国のデータに精通しないものにとってだが）かつてKossinnaが「文化」概念を練り上げながら目指したもの，つまり現存する民族集団を過去にさかのぼって追求するという目標を，厳密な意味で達成している。第二に，同族的アイデンティティーは，ある場合には驚くほど長期間変わることなく維持されることを示している。

Eluyemi（第13章）は，Wangと同質のデータは使用せず，もっぱら考古学的にYoruba族の民族史を考察し，考古学者が自分の見出したものを理解するために必要なGardinのいう

「ローカルな知」が欠如している場合の問題に触れている。

Larson（第14章）は先史時代の文化的アイデンティティーにいかに接近するかという古典的な考古学上の問題を考察するための好個の事例研究を提出している。彼は，この問題に派生するさまざまな問題，例えば資料の遺存状況，データの欠乏，複数の遺跡の同時性の不確定性等々を論じて，次のような結論に到達する。つまり，スカンジナビア半島南部における二つの地域の葬送儀礼の違いにもとづいて，そこの中石器時代後期には同族的な分化が認められるのだという。私見によれば，かれは葬送儀礼の違いを明示はしたが，それは必ずしも同族性というわけではないであろう。空間的変異には多様な理由があり，同族性はその一部分にしかすぎない。

近年考古学者は文化的あるいは同族的単位としての政治的単位の境界を画定しようと意を注いできた。また，社会考古学の主力は政治過程に向けられ，さらに文化的な分布と政治的実体との間の関係はきわめて偶発的なものであるという認識によって，政治的実体の定義は新しい問題になっている。この問題は，たとえばThiessen polygonnsといったその場しのぎの当て推量的な概念の導入をもたらした。Rowlett（15章）はフランスの鉄器時代の研究において，文化的分布域の周辺部における墓暴きの出現頻度から，それを部族間の略奪と解釈し，政治的意味をもっていたことを論じている。Smith（1986）も指摘したように，われわれがこの興味深くかつ示唆的な考え方を受け容れる前に，なすべきことは少なからずあるであろう。たとえば，ひどく荒らされた墓は，あまり豊かでなく，また地域的つながりの希薄な地域に立地しているが故に，豊かな装飾品の埋納という地域集団の要求を満たすために，副葬品のリサイクルを行っていた可能性はないのだろうか。

個別遺跡を超えた物質文化の空間的変異の定義と理解は，同族性の再構築とか，その欠落の確認となどと同じように，考古学において最も重要な問題である。しかし，その再構築に終わりはない。むしろそれは結論へと到る手段なのだ。なぜならば，考古学者は過去の一点における静止した絵を描くことには満足しないのであって，こうしたパターンの通時的な変化を手に入れたいからだ。こうした変異はなぜ生じたのか，同族的な集団はどのくらい多様性をもっているのか，またその性格はどのようなものなのか，といった疑問こそが本書第３部のテーマであり，さまざまなコンテクストにおける幅広い変異が焦点とされている。

Wangが同族的アイデンティティーの長期的な持続を摘出したのにたいして，Hill（第16章）は北アメリカへの欧州人の植民を例にとり，急速かつ暴力的な社会変化がいかに事態を揺るがすかを提示する。これまで論じてきた意味において（Osborn 第８章と比較せよ），これ以前のアイデンティティーの強さがどのくらいであったのかはよくわからないが，植民による分裂に引き続く民族集団形成の急速さと複雑さは顕著である。Hillはまた，自己と他の集団との違いではなく，自己の帰属する集団の一員とみなすための要素がいかに微妙であるのかを示し，また，より大規模な社会においては，集団の帰属意識が支配的グループの権力に依存している事実を提示している。近年のアメリカ原住民が，自分たちの伝統を見直そうとしているのはこうした状況を背景としており，Nassaney（第４章）はこのプロセスを問題としている。

MendozaとWrightは，アルゼンチンのTobaにおける二つの集団と白人の影響に関する同じようなテーマについての事例研究を提示している（第17章）。その幅広くかつ詳細な研

究によって，二つの集団は適応形態と居住場所に関する初期条件の違いに応じて，次第に濃密になる外的な世界との相互関係にも差が認められることを示した。考古学者が直接生業や消費パターンの変化を調査するために好適なところにこれらの集団は位置している。しかしながら，Smithは彼らの研究の枠組みとしてのMarvin Harrisの文化唯物論の援用について批判している（1986）。

理論的にいって，基盤と構造，そして上部構造とは直線的な規定関係によって結びあっているのであるが，概念的に，また実際的には，それらはエチックに，またイーミックに関連しあっているが故に，これらを結びつけている規定的関係は線状的というよりも体系的で再帰的である。

Borreroの論文（第18章）もアルゼンチンを扱っているが，その時間射程は長く（12,000年前から現代まで），この地域の人類の登場と拡大を論じている。結論的には，ここでは一般的な生態学的問題が論じられているが，この間点からの興味深い居住プロセスが指摘されている。

Dolkhanovは同じように時間的かつ空間的にマクロなアプローチを試みているが（第19章），原ヨーロッパ諸語の拡散についての考古学的証拠と言語との関係に対して，仮説的であるが挑発的な議論を提示している。近年Renfrew（1987）はこの分野について話題を提供しているが，Dolkhanovの議論もRenfrewのラインに沿ったものとなっており，特に言語の拡散と農耕の拡大との関係に焦点をあてている。

Franklinはオーストラリアにおける岩壁絵画のスタイルと分布パターンを論じ（第20章），Sackettのいう「アイソクレスチックな変異」とは異なる「確率論的な変異」なる概念を導入している。彼女は民族集団間の違いに関連する様式的変異を前提にする「標章としてのスタイル」を斥けるのであるが，すでにみたように，「標章としてのスタイル」も「アイソクレスチックなスタイル」も相互に排除しあう概念ではない。特定のスタイルが「標章的」であるか否かは，その事例研究における調査のすすめかたの問題といえる。これを先験的に排除してしまうため，彼女はこうしたスタイルのもつ可能性をも排除してしまうのである。

いうまでもないが，Franklinの研究は考古学者とは異なる基盤に立つが，それはPaloczi-Horvathの立場とも違っている（第21章）。彼の研究は考古学と歴史学によって中世ハンガリーの文化的類同性を扱っている。これは本書第２部のBalintの論文に類似しているが，それは物質文化の変異と歴史的な記録のある民族との相互関係というよりも，文化的類似性の形成プロセスが中心となっているため，ここに排列した。良質の資料に基づく魅力的な説明により，Paloczi-Horvathはさまざまな分野における変化をあとづけて，それらの相互関係を論じている。これをHillやMendozaとRightの論考と比較すると興味深いものがある（第16章及び第17章）。

Kobylinskiは５・６世紀のポーランドにおける変化について考察している（第22章）。しかし，資料面からみると，彼は先史学的な方法を採用し，この時期のポーランドにおける継続性の問題を論じている。これはニュートラルな領域とはいえない。ここで提起されているのは，スラブ族の起源と同じように，きわめて感情的な問題であって，その答えは考古学的な事実とも抵触している。これは同様の問題を提起しているVandalとMarensの論考

（第２章）に近いが，その観点は異なっている。Kobylinskiは論拠を示しながら，さまざまな理論的な提起をおこなっているが，実際，それこそが本書のメインテーマなのである。

結 論

民族という問題の重要性及び現代世界における利害をめぐる抗争は，たとえ部分的ではあっても，過去におけるそうした問題を考えることの正当性を物語っている。不幸なことに，しかしこれ以外の問題についてもそうなのだが，こうした問題を考察するためには，われわれは過去なるものをわれわれ自身のイメージの中につくりだしがちである。未来への挑戦，私は本書もいささか寄与することを願うのであるが，はこうした卑小な主観主義を乗り越えることである。このためにできることといえば，本書のさまざまな提起を不断に問い返すことしかないのだ。理論的な諸問題と目的・手段・結果，つまり過去の実体的パターンに接近するためのアプローチはもつれ合い，絡み合いして，考古学者もその一員である広大な世界を織りなしているのである。

Contents

1 Ethnic consept in German prehistory:a case sudy on the relationship between cultural identity and arhaeological objectivity Ulrich Veit

2 The Vandals:myths and facts about a German tribe of the first half of the 1st millenium AD Jes Martens

3 Theory,profession, and the political rôle of archaeology Brian Durans

4 An epistemological enquiry into some archaeological and historical interpretations of 17th century Native American-European relation Michael Nassaney

5 Matters of fact and matters of interest Alison Wylie

6 The rôle of 'local knowredge' in archaeological interpretation Jean-Claud Gardin

7 Material aspects of Limba,Yalunka and Kranko ethnicity:archaeological reserch in northeastern Sierra Leone Chritopher R DeCorse

8 Multiculturalism in the eastern Andes Ann Osborn

9 The property of symmetry and the concept of ethnic style Dorothy K.Washburn

10 Pattern of learning,residence and descent among potters in Ticul,Yucatan,Mexico Dean E.Arnold

11 Some ethnospecific features in central and eastern European archaeology during the early Middle Age:the cace of Avars and Hungarians Csanád Bálint

12 Ancient ethnic groups as represented on bronzes from Yunnan,China Wang Ningsheng

13 The archaeology of the Yoruba:problems and possibilities Omotoso Eluyemi

14 Ethnisity and traditions in Mesolithic mortuary practices of southern Scandinavia Lars Larssopn

15 Detecting political units in archaeology-an Iron Age example Ralph M.Rowlett

16 Who is what? A preliminary enquiry into cultural and physical identity Carol W.Hill

17 Sociocultural and economic elements of the adaptation systems of the Argentine Toba:the Nacilamlek and Taksek cases of Formosa province Marcela Mendoza and Pablo G.Wright

18 Spatial heterogenity in Fuego-Patogonia Luis Alberto Borrero

19 Cultulal and ethnic processes in prehistory as seen through the evidence of archaeology and related disiplines P.M.Dolkuhanov

20 Reserch with style:a case study from Australian rock art Natalie R.Franklin

21 Steppe traditions and cultural assimilation of a nomadic people:the Cumanians in Hungary in the 13th-14th century Andras Pálóczi-Horváth

22 An ethnic change or a socio-economic one? The 5th and 6th centuries AD in the Polish lands Zbigniew Kobylínski

（田村論文　付載）

序章：文化的アイデンティティーへの考古学的アプローチ

スティーブン・シェナン

文献リファレンス

References

Arutiunov, S. A. & A. M. Khazanov 1981. Das Problem der archaeologischen Kriterien mit ethnischer Spezifik. *Ethnographisch–Archaeologische Zeitschrift* **22**, 669–85.

Barnes, B. & D. Bloor 1982. Relativism, rationalism and the sociology of knowledge. In *Rationality and relativism*, M. Hollis & S. Lukes (eds), 21–47. Oxford: Basil Blackwell.

Barth, F. (ed.) 1969a. *Ethnic groups and boundaries*. London: Allen & Unwin.

Barth, F. 1969b. Introduction. In *Ethnic groups and boundaries*, F. Barth (ed.), 9–38. London: Allen & Unwin.

Bentley, G. C. 1987. Ethnicity and practice. *Comparative Studies in Society and History* **29**, 24–55.

Binford, L. R. 1962 (1972a). Archaeology as anthropology. *American Antiquity* **28**, 217–25. (Reprinted in Binford, L. R. 1972. *An archaeological perspective*, 20–32. New York: Seminar Press.)

Binford, L. R. 1965 (1972b). Archaeological systematics and the study of culture process. *American Antiquity* **31**, 203–10. (Reprinted in Binford, L. R. 1972. *An archaeological perspective*, 195–207. New York: Seminar Press.)

Binford, L. R. 1983. Forty-seven trips: a case study in the character of archaeological formation processes. In *Working at archaeology*, 243–68. New York: Academic Press.

Bourdieu, P. 1977. *Outline of a theory of practice*. Cambridge: Cambridge University Press.

Boyd, R. & P. J. Richerson 1985. *Culture and the evolutionary process*. Chicago: University of Chicago Press.

Childe, V. G. 1925. *The Aryans*. London: Routledge & Kegan Paul.

Childe, V. G. 1936. *Man makes himself*. London: Collins.

Childe, V. G. 1956. *Piecing together the past*. London: Routledge & Kegan Paul.

Clarke, D. L. 1968. *Analytical archaeology*. London: Methuen.

Costall, A. 1982. On how so much information controls so much behaviour. In *Infancy and epistemology*, G. Butterworth (ed.), 30–51. Brighton: Harvester Press.

Crone, P. 1986. The tribe and the state. In *States in history*, J. A. Hall (ed.), 48–77. Oxford: Basil Blackwell.

Crook, J. H. 1981. The evolutionary ethology of social processes in man. In *Group cohesion*, H. Kellerman (ed.), 86–108. New York: Grune & Stratton.

Diaz-Polanco, H. in press. Ethnic questions and social change in Latin America. *World Archaeological Bulletin* **3**.

Fried, M. H. 1967. *The evolution of political society*. New York: Random House.

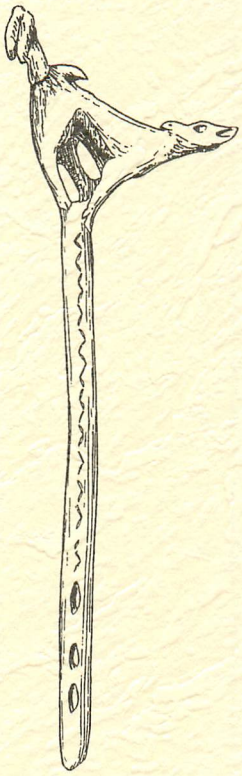
Fried, M. H. 1968. On the concepts of 'tribe' and 'tribal society'. In *Essays on the problem of tribe*, J. Helm (ed.), 3–22. Seattle: University of Washington Press.
Friedman, J. 1988. Culture, identity and world process. In *Domination and resistance*, D. Miller, M. Rowlands & C. Tilley (eds), ch. 1. London: Unwin Hyman.
Geary, P. J. 1983. Ethnic identity as a situational construct in the early middle ages. *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien* **113**, 15–26.
Gebuehr, M. 1987. Das Allerletzte: Montelius und Kossinna im Himmel. *Archaeologische Informationen* **10**, 109–15.
Gellner, E. 1983. *Nations and nationalism*. Oxford: Basil Blackwell.
Gellner, E. 1987a. *Culture, identity and politics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Gellner, E. 1987b. Zeno of Cracow. In *Culture, identity and politics*, 47–74. Cambridge: Cambridge University Press.
Gellner, E. 1987c. The roots of cohesion. In *Culture, identity and politics*, 29–46. Cambridge: Cambridge University Press.
Girtler, R. 1982. 'Ethnos', 'Volk' und soziale Gruppe. *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien* **112**, 42–57.
Gould, S. J. 1981. *The mismeasure of Man*. New York: W. W. Norton.
Hacking, I. 1982. Language, truth and reason. In *Rationality and relativism*, M. Hollis & S. Lukes (eds), 48–65. Oxford: Basil Blackwell.
Hodder, I. 1978a. Simple correlations between material culture and society: a review. In *The spatial organisation of culture*, I. Hodder (ed.), 3–24. London: Duckworth.
Hodder, I. 1978b. The spatial structure of material 'cultures': a review of some of the evidence. In *The spatial organisation of culture*, I. Hodder (ed.), 93–111. London: Duckworth.
Hodder, I. 1979. Social and economic stress and material culture patterning. *American Antiquity* **44**, 446–54.
Hodder, I. 1985. Boundaries as strategies. In *The archaeology of frontiers and boundaries*, S. W. Green & S. M. Perlman (eds), 141–59. Orlando: Academic Press.
Hollis, M. & S. Lukes 1982. Introduction. In *Rationality and relativism*, M. Hollis & S. Lukes (eds), 1–20. Oxford: Basil Blackwell.
Horton, R. 1982. Tradition and modernity revisited. In *Rationality and relativism*, M. Hollis & S. Lukes (eds), 201–60. Oxford: Basil Blackwell.
Kristiansen, K. 1982. The formation of tribal systems in later European prehistory: northern Europe, 4000–500 BC. In *Theory and explanation in archaeology*, C. Renfrew, M. J. Rowlands & B. Segraves (eds), 241–80. New York: Academic Press.
Kristiansen, K. 1984. Ideology and material culture. In *Marxist perspectives in archaeology*, M. Spriggs (ed.), 72–100. Cambridge: Cambridge University Press.
Kroeber, A. L. 1957. *Style and civilizations*. Cornell University Press.
Larick, R. 1986. Age grading and ethnicity in the style of Loikop (Samburu) spears. *World Archaeology* **18**, 269–83.
Mann, M. 1986. *The sources of social power*, vol. I: *A history of power from the beginning to AD 1760*. Cambridge: Cambridge University Press.
Mellor, D. 1973. On some methodological misconceptions. In *The explanation of culture change*, C. Renfrew (ed.), 493–8. London: Duckworth.
Muehlmann, W. E. 1985. Ethnogonie und Ethnogenese: theoretisch–ethnologische und ideologiekritische Studie. In *Studien zur Ethnogenese* (Abhandlungen der Rheinisch-Westfaelischen Akademie der Wissenschaften 72), 9–26. Opladen: Westdeutscher Verlag.
Nietzsche, F. 1873. On truth and lie in an extra-moral sense. A posthumous fragment

included in *The portable Nietzsche*, W. Kaufman (ed.). New York: Viking Press (1954).
Renfrew, C. 1987. *Archaeology and language: the puzzle of Indo-European origins.* London: Jonathan Cape.
Rouse, I. 1972. *Introduction to prehistory: a systematic approach.* New York: McGraw-Hill.
Rowlands, M. J. 1980. Kinship, alliance and exchange in the European Bronze Age. In *Settlement and society in the British later Bronze Age*, J. Barrett & R. Bradley (eds), 15–55. Oxford: British Archaeological Reports.
Rowlands, M. J. 1984. Objectivity and subjectivity in archaeology. In *Marxist perspectives in archaeology*, M. Spriggs (ed.), 108–13. Cambridge: Cambridge University Press.
Sackett, J. R. 1982. Approaches to style in lithic archaeology. *Journal of Anthropological Archaeology* **1**, 59–112.
Sackett, J. R. 1985. Style and ethnicity in the Kalahari: a reply to Wiessner. *American Antiquity* **50**, 151–9.
Schortman, E. M. in press. Interregional interaction in prehistory: the need for a new perspective.
Shanks, M. & C. Tilley 1987. *Re-constructing archaeology.* Cambridge: Cambridge University Press.
Shennan, S. J. 1978. Archaeological 'cultures': an empirical investigation. In *The spatial organisation of culture*, I. Hodder (ed.), 113–39. London: Duckworth.
Smith, A. D. 1981. *The ethnic revival.* Cambridge: Cambridge University Press.
Smith, A. D. 1986. *The ethnic origins of nations.* Oxford: Basil Blackwell.
Smith, M. G. 1982. Ethnicity and ethnic groups in America: the view from Harvard. *Ethnic and Racial Studies* **5**, 1–22.
Smith, M. G. 1986. Some cultural and ethnic problems in archaeology. Concluding remarks on the session 'Multiculturalism and Ethnicity in Archaeological Interpretation'. World Archaeological Congress, September.
Thernstrom, S., A. Orlov & O. Handlin (eds) 1980. *Harvard encyclopedia of American ethnic groups.* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
Ucko, P. J. 1969. Ethnography and archaeological interpretation of funerary remains. *World Archaeology* **1**, 262–80.
Ucko, P. J. 1983a. Australian academic archaeology: Aboriginal transformations of its aims and practices. *Australian Archaeology* **16**, 11–26.
Ucko, P. J. 1983b. The politics of the indigenous minority. *Journal of Biosocial Science Supplement* **8**, 25–40.
Veit, U. 1984. Gustaf Kossinna und V. Gordon Childe: Ansaetze zu einer theoretischen Grundlegung der Vorgeschichte. *Saeculum* **35**, 326–64.
Wiessner, P. 1983. Style and social information in Kalahari San projectile points. *American Antiquity* **48**, 253–76.
Wiessner, P. 1984. Reconsidering the behavioural basis of style. *Journal of Anthropological Archaeology* **3**, 190–234.
Wiessner, P. 1985. Style or isochrestic variation? A reply to Sackett. *American Antiquity* **50**, 221–4.
Wiessner, P. 1989. Style and changing relations between the individual and society. In *The meanings of things: material culture and symbolic expression*, I. Hodder (ed.), ch. 2. London: Unwin Hyman.
Wobst, M. 1977. Stylistic behavior and information exchange. In *For the director: research essays in honor of James B. Griffin* (Museum of Anthropology, University of Michigan, Anthropological Papers 61), C. E. Cleland (ed.), 317–42. Ann Arbor: Museum of Anthropology, University of Michigan.

八ケ岳旧石器研究グループのシンボルマーク

旧石器時代の食料といわれるハシバミの葉をデザインしてあり、その下縁は八ケ岳の稜線を描いている。ハシバミは現在でも野辺山にたくさん自生する。

野辺山シンポジウム　２０００

人類の適応行動と認知構造

発行者：八ケ岳旧石器研究グループ
発行日：2000 年 10 月 14 日
編集者：堤　　隆
印刷所：ほおずき書籍株式会社
連絡先：〒385-0022　長野県佐久市岩村田
568-4　202　堤　　隆　方
E-mail　tsutsumi@avis.ne.jp
URL　　http：//www.avis.ne.jp./~tsutsumi/